平成二十八年度大淀町地域遺産シンポジウム資料集

吉野宮の原像を探る

奈良県大淀町教育委員会
平成二十八年十一月五日

ご　挨　拶

菊花香る季節となりました。皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。また平素は、大淀町の文化行政に多大なるご理解・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、奈良県内でも有数の大河である吉野川に育まれ、豊かな文化を営んできた大淀町は、縄文時代以来、人々の行き交う吉野文化の門戸として栄えてきました。町内には、その歴史・文化によって生み出された文化財・文化遺産等が、数多く残されています。

大淀町では、これらの文化財・文化遺産を「ご当地の宝」「ふるさとの誇り」である「地域遺産（おおよど遺産）」としてとらえ、次世代へ継承するとりくみとして、その保存・活用を推進するための事業（大淀町地域遺産創生事業）をおこなっています。

本年度は、大淀町を代表する古代寺院「国史跡・比曽寺跡」にスポットをあてて、多くの古代史ファンの心をひきつけてやまない、吉野を舞台とする「壬申の乱」と、その始まりの地「吉野宮」をテーマにしたシンポジウム『吉野宮の原像を探る』を開催します。

こんにち、壬申の乱始まりの地を、国史跡・宮滝遺跡にあてる意見が多いなか、史料の記述をもとに、それを「吉野寺（比曽寺跡）」だと考える意見も根強くあります。

本シンポジウムでは、近年の比曽寺跡・宮滝遺跡の調査研究成果や、周辺の古代遺跡の最新情報などをもとに、「吉野宮」をめぐる所在地論争やその実態、関連遺跡の保存・活用についての展望を話し合います。第一線で活躍されている各先生方の講演と、白熱したパネルディスカッションを楽しんでいただければ、主催者としてうれしく思います。

最後になりましたが、本シンポジウムを開催するにあたり、企画段階からご指導いただきました奈良女子大学の小路田泰直先生をはじめ、ご協力いただきました関係各位、ご支援いただきました大淀町民の皆様に、深く御礼申し上げます。

平成 28 年 11 月

大　淀　町　長

平成 28 年度大淀町地域遺産シンポジウム「吉野宮の原像を探る」
2016 年 11 月５日（土）於 大淀町文化会館あらかしホール

―プログラム・目次―

13:00～13:05　開会・オープニング（映像による古代吉野への誘い）

13:05～13:10　開会の挨拶

＜第１部：講演＞

13:10～13:20　＜趣旨説明＞「本シンポジウムを企画するにあたって」・・・・・・・・・1
奈良女子大学副学長　小路田 泰直　氏

13:20～13:50　＜講演１＞「宮瀧遺跡と吉野宮」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
奈良芸術短期大学教授
奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員　前園 実知雄　氏

13:50～14:10　＜講演２＞「吉野宮をみる視点―過去から うたから 調査から―」・・・23
吉野歴史資料館
吉野町教育委員会事務局主事　中東 洋行　氏

14:10～14:20　休憩

14:20～14:50　＜講演３＞「大和と吉野―壬申の乱の前後―」・・・・・・・・・・・・・・63
奈良女子大学准教授　西村 さとみ　氏

14:50～15:10　＜講演４＞「僧形の皇子たち―いざ、吉野へ―」・・・・・・・・・・・・・77
大淀町教育委員会事務局主任技師　松田 度　氏

15:10～15:20　休憩

15:20～16:25　＜第２部：パネルディスカッション＞
〇司会・コーディネーター：小路田泰直氏
〇パネラー：前園実知雄氏・中東洋行氏・西村さとみ氏・松田度氏

16:25～16:30　閉会の挨拶

関連史書解説（本文中※印をつけたもの）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
紙上参加：蔵下稔氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95

【表紙】世尊寺太子堂の夕暮れ（大淀町比曽）・夕日の吉野川・夢のわだ（吉野町宮滝）・僧形の皇子（イラスト・MW）

投げられたカサゴク

（世尊寺・聖徳太子報恩大会式より）

本シンポジウムを企画するにあたって

プロフィール：
1954 年、神戸市生まれ。京都大学文学部卒業。橘女子大学助教授をへて、現在奈良女子大学教授・同副学長。編著書多数。専門は日本近代史。「日本史学見直し論」を実践中。

奈良女子大学

小路田（こじた） 泰直（やすなお）

大和は不思議に満ちている。なぜ日本の建国はこの地で起きたのか。なぜこの地は権力が大和を去っても長く日本の宗教的聖地として栄えたのか。なぜこの地は、日本の代名詞が大和であることに象徴されているように、今なお日本人の心の故郷であり続けているのか。何れも、今の日本史学の解き得ていない問題だ。

ではこれらの問題に答えを出すためにはどうしたらいいのか。日本地図に一本の補助線を引けばいいのである。黒潮の道という補助線である。

これまで我々は殆ど自然に、日本と世界の接点は朝鮮半島と北九州の間にしかないと思ってきた。しかし日本列島は黒潮の流れに包まれている。太平洋側は黒潮本流が流れ、日本海側はその支流である対馬海流が流れている。黒潮の流れが世界と日本を結ぶ交易路だとしたら、海に面している日本中の全ての地域が――まさに津々浦々が――世界と日本の接点ということになる。

ならば次の『日本書紀』の描く、神武東征の目的に、一定の合理性を見出すこともできる。大和は「六合の中心」だから、そこで建国するという。

抑又、塩土老翁（しおつつのをじ）に聞きき。曰ひしく『東（ひがしのかた）に美（よ）き地有り。青山四周（あおやまよもにめぐ）れり。其の中に亦、天磐船（あまのいはふね）に乗りて飛び降（くだ）る者有り』といひき。余謂（われおも）ふに、彼（そ）の地は、必ず以て大業（あまのひつぎ）を恢弘（ひらきの）べて、天下に光宅（みちを）るに足りぬべし。蓋し六合（くに）の中心（もなか）か。厥（そ）の飛び降るといふ者は、是饒速日（にぎはやひ）と謂ふか。何（ゆ）ぞ就きて都つくらざらむ。（『日本書紀』※）

確かに大和は「六合の中心」に見えてくる。大和は、黒潮本流に沿って発達した迂回路、瀬戸内海から紀ノ川、吉野川、櫛田川を経て伊勢に抜けるルートの線上にあり、丁度黒潮の道の東西の中間点ぐらいにある。さらには、その迂回路と黒潮本流と対馬海流を南北に結ぶのに至って便利なところにあるからである。

ならば大和、とりわけ吉野川流域とそれに隣接する大和盆地南部が建国の地として選ばれるに至った理由がわかる。

そして、だとすればもう一つ分かることがある。それは時の政府に叛旗を翻した叛逆者たちが、何時の時代も吉野を反抗拠点にしたわけである。そこが、京都（近江）政府に対する全国的叛乱を組織するのには最も便利な「六合の中心」だったからであった。深山幽谷にゲリラ戦を戦う根拠地を求めたわけでも、神仙の住処を求めたわけではなかった。

ならば宮滝よりも、大和盆地から下ってきた道が吉野川を渡河し、さらに天川・十津川・熊野川方面に向かって行く、大淀町（世尊寺付近）こそが吉野宮の所在地に相応（ふさわ）しいのではないかと思い、本シンポジウムの開催を提案した。

宮瀧遺跡と吉野宮

はじめに

１．「宮瀧」の名の由来と歴史

２．文献に見える吉野宮・吉野離宮

３．宮瀧遺跡の調査と研究史

４．発掘した遺構と吉野宮・吉野離宮

おわりに　―吉野のもつ歴史性―

奈良芸術短期大学

前園　実知雄

講師プロフィール：

1946 年、愛媛県生まれ。同志社大学文学部卒業後、1969 年、奈良県立橿原考古学研究所へ。1998 年より奈良芸術短期大学勤務。現在奈良芸術短期大学教授、橿原考古学研究所特別指導研究員。宮瀧遺跡、大箕峯山寺など吉野の調査にも深く関わる。主な著書は『奈良・大和の古代遺跡を掘る』、『斑鳩に眠る二人の貴公子－藤ノ木古墳－』、『中国歴史紀行』、編著は『吉野　仙境の歴史』など。本務は真言宗豊山派法蓮寺住職。趣味は音楽鑑賞（ファド）とベイスターズファン（50 余年）。

はじめに

古墳時代から飛鳥、奈良時代を通して政治の中心地であった大和は、四周を山に囲まれた盆地である。その南、龍門山塊をさらに越えると、そこには果てしなく続く吉野、熊野の山並みが広がっている。

都から直接目にすることのできない彼方の吉野は、当時の人々にとってあこがれの神仙境でもあった。

古墳時代に応神、雄略天皇が行幸したと『古事記』※や『日本書紀』※（あわせて『記･紀』）に記された吉野宮、飛鳥時代には斉明天皇が宮を造り、大海人皇子が壬申の乱の計画を練り、天武に即位した後には、皇子達とともに契りを結んだとされる吉野宮の所在地はどこだろうか。

古代の人達の吉野に対する強い思いは、『万葉集』※とか『懐風藻』※にもみられる

が、時代が下った鎌倉時代、南北朝時代の権力者にもそれは強く残っていたであろうことが、文献史料からもうかがうことができる。

ここでは、文献に残された吉野宮について概観し、その候補地の一つとされる宮瀧遺跡の調査の歴史、研究史、さらに発掘調査であきらかになった宮瀧遺跡の概要をもとに吉野宮について考えたい。

１．「宮瀧」の名の由来と歴史

吉野川の上流に位置する宮瀧（**図１**）は、水煙を立てる淵、蒼い水面と奇岩のならぶ風景と、周囲の緑深い山容とが相まって神仙境と形容するにふさわしい情景を醸し出している（**写真１**）。

「宮瀧」というこの優美な名称が、いつの頃から用いられるようになったかは定かではないが、『万葉集』巻１の 36 の歌（**史料１**）は、持統天皇の吉野宮行幸に伴った柿本人麻呂の歌である。

この中の「瀧のみやこ」から「宮瀧」の名が生まれたとの見方を支持すれば、飛

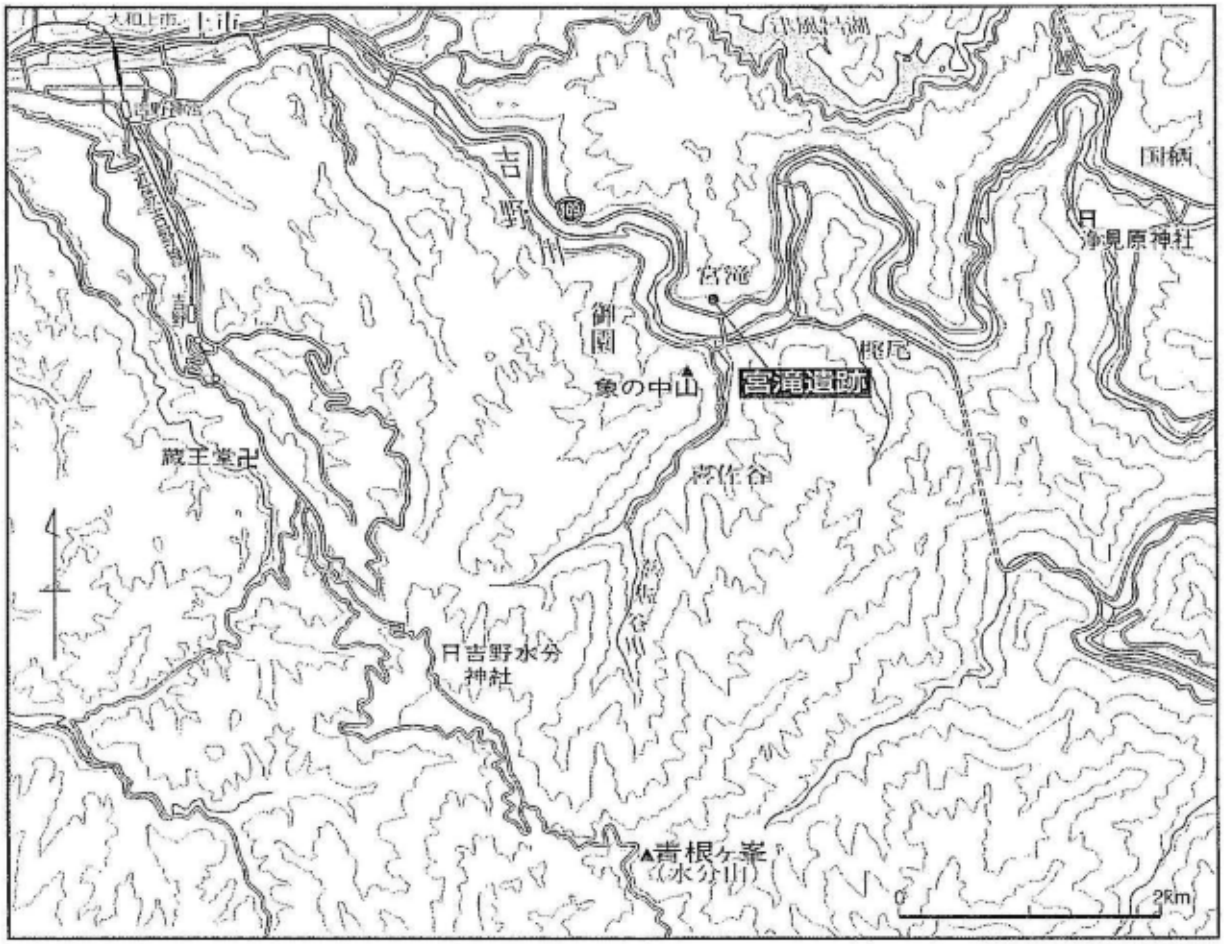


図１　宮滝遺跡の周辺

鳥時代から奈良時代には成立していた可能性はある。

実際に「宮瀧」が歴史書に登場するのは、平安時代前期の昌泰（しょうたい）元年（898）に宇多上皇（うだじょうこう）が宮瀧に行幸された記事で、『日本紀略』※、『扶桑略記』※、『帝王編年記』※などに詳しく記されている。その中でも詳しく描写されている『扶桑略記』を見てみよう。

昌泰元年 10 月 21 日、宇多上皇は鷹狩りのため、是貞親王（これさだしんのう）、菅原道真（すがわらのみちざね）、源昇（みなもとののぼる）ら数十人と共に宮瀧に向かうことを決め、23 日早朝京を発った。途中奈良の法華寺に参詣し、その夜は高市郡にある菅原道真の山荘に宿泊した。翌 24 日は吉野の現光寺（比曽寺ひそでら）に参り，吉野郡院を宿にしている。明けて 25 日は宮瀧を訪れ、上皇は吉野川の美しさを「瀧は積雪を崩すがごとく、愛賞を徘徊して景の傾くを知らず」と称え、一行にも和歌を献じさせている。その後龍門、大坂の住吉浜を回って京に帰ったようだ。

行程からみても、この行幸の最も重要な目的地が宮瀧であったことは間違いなかろう。

平安時代後期の歌人西行の『山家集』※にも宮瀧を詠んだ次の歌が収められている。

瀬をはやみ宮瀧川を渡り行けば
心の底の澄む心地する

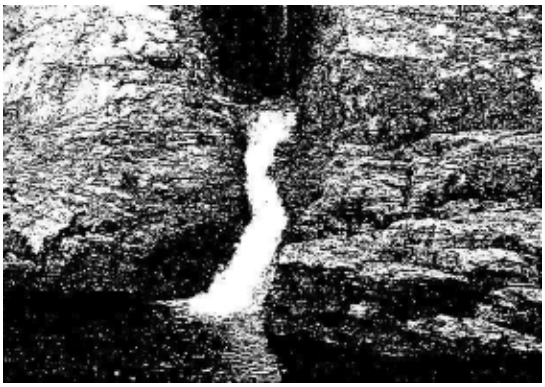


写真１　象の小川

やすみしし　我が大君の　聞こし食す　天の下に　国はしも　さはにあれども　山川の
清き河内と　御心を　吉野の国の　花散らふ　秋津の野辺に　宮柱　太敷きませば　も
もしきの　大宮人は　舟並めて　朝川渡り　舟競ひ　夕川渡る　この川の　絶ゆること
なく　この山の　いや高知らす　みなそそく　滝のみやこは　見れど飽かぬかも

反歌

見れど飽かぬ　吉野の川の　常滑の　絶ゆることなく　またかへり見む

（巻一の三六・三七）

史料１　柿本人麻呂の歌（『万葉集』）

鎌倉時代の建長(けんちょう)6 年（1254）、橘成季の著した『古今著聞集』※は古代王朝への憧憬が強い説話集だが、この中にも 350 年も昔の宇多上皇の宮瀧行幸に関する記述が在る。

時代が下って江戸時代に入ると、大和の最初の地誌『和州旧跡幽考』※、貝原益軒の『和州巡覧記』※、本居宣長の『菅笠日記』※など多くの地誌、紀行文に古くから宮跡の伝承のある宮瀧を訪ね、景観を愛でる記録が残されている。

宇多上皇以降、都の貴紳達がこぞって宮瀧に憧れを抱いた背景には、そこが『記・紀』、『万葉集』、『懐風藻』に記された吉野宮、吉野離宮の故地であると強く思っていたからであろう。

２．文献に見える吉野宮・吉野離宮

吉野宮が文献に初めて登場するのは、『記・紀』の応神天皇の条である。「吉野宮に行幸した天皇に、国栖人(くにすひと)が来朝して酒を献じた」という内容で、応神天皇 19 年のことのようだ（**史料２・３**）。

次が雄略天皇で、『日本書紀』によると２年冬 10 月と、４年秋８月に二度吉野宮に行幸している（**史料４・５・６**）。

４年の記事は「秋津島(あきつしま)」の地名起源説話として有名であるが、多くの研究者はこの二人の天皇の吉野宮の存在には懐疑的である。

『日本書紀』には斉明天皇が２年（656）に吉野宮を造営したことが記されている。その３年後の５年（659）３月に行幸し、トヨノアカリ（大宴会）を開いている。

もともと稲作と関わりのある儀式であるトヨノアカリを吉野で行ったのは、おそらく春３月にその年の豊作を祈ったのだろう。

吉野宮が古代史上クローズアップされるのは、大海人皇子(おおあまのみこ)が壬申の乱の挙兵地に選んだことである（**図２**）。

この地は母の斉明天皇の宮であることに加えて、神仙の住む吉野であったことにも大きな意味があったと思われる。戦いに勝利し天武天皇となった後、天武８年（679）にここで皇子達を前に「吉野会盟」を行ったのも同じ理由だったであろう。

天武天皇から皇位を引き継いだ持統天皇は、夫と共に一時期を過ごした吉野宮に 31 回、即位前後の３回を加えると、実に 34 回も訪れている（**表１・２**）。

なかでも注意を引くのは、持統７年（693）と９年（695）には年間に五回も訪れていることで、私はこの行幸と持統８年（694）の藤原宮への遷宮に何らかの関わりがあるのではと考えている。そして彼女の吉野宮行幸の前後に、風の神を祀る龍田神への奉幣が目立つことから、斉明天皇と同じく、吉野の水神に五穀豊穣を祈願するための祭祀が大きな目的

の一つとみて良いだろう。文武天皇、元明天皇の行幸も『続日本紀』※に記されているが、注目すべきは、神亀元年（724）に皇位を継いだ聖武天皇が、即位後間もなく芳（吉）野宮に行幸したことである。その後芳野と和泉の監（げん）で干ばつに苦しむ民のために雨乞いを命じたことが、天平４年（732）のこととして記されている。また天平８年（736）の6月 27 日から7月 10 日までのほぼ半月間滞在し、監や近隣の民に品物を下賜している。この天平８年の行幸については、近年平城京内で出土した４点の木簡（**表３**）によって裏付けられた。

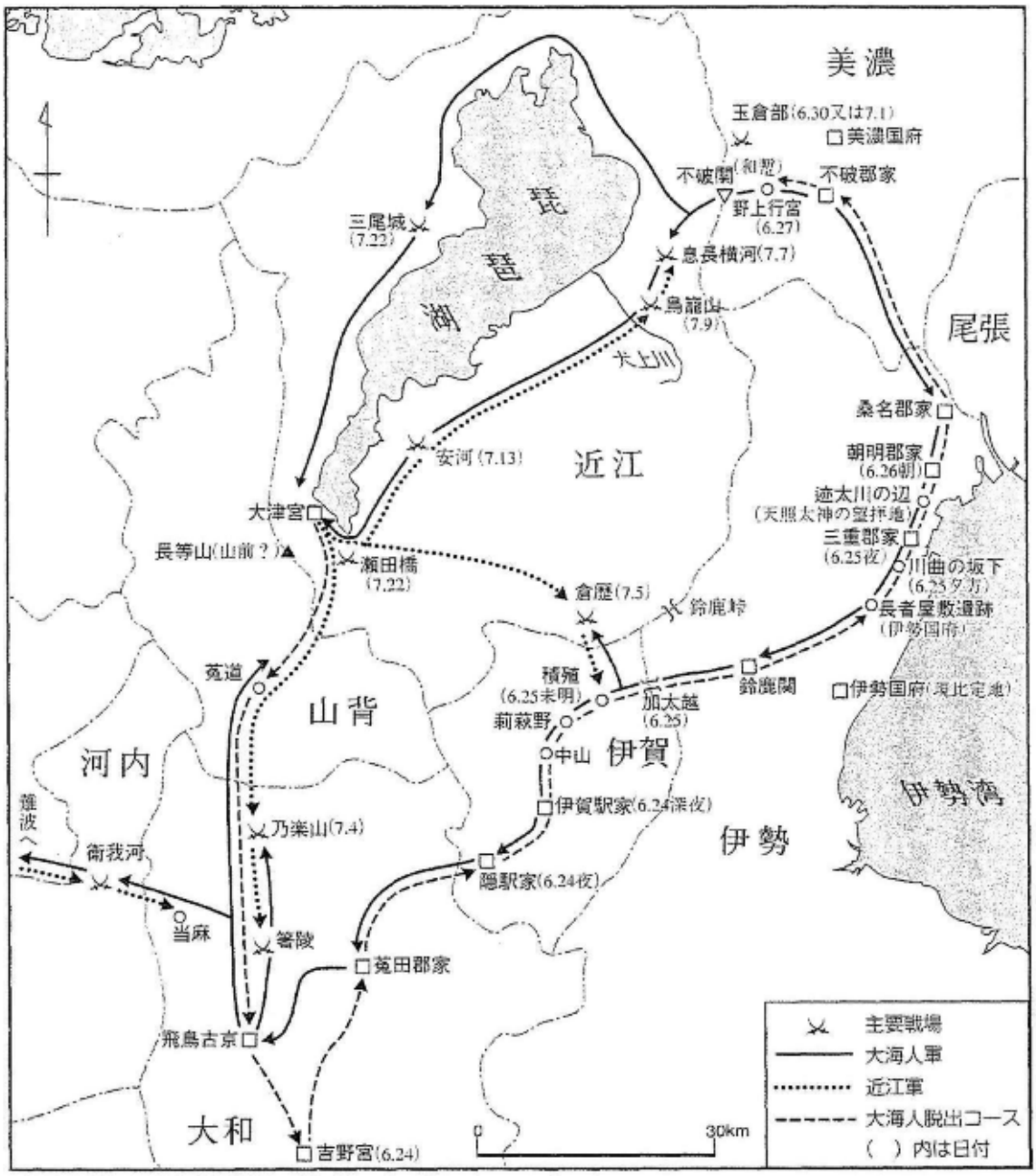


図２　壬申の乱と関連地

又吉野の國主等、大雀命の佩かせる御刀を瞻て歌曰ひけらく、

品陀の　日の御子　大雀　大雀　佩かせる大刀　本つるぎ　末ふゆ　冬木

如す　からが下樹の　さやさや

とうたひき。又吉野の白檮上に横臼を作りて、其の横臼に大御酒を釀みて、其の大御酒を獻りし時、口鼓を擊ち、伎を爲して歌曰ひけらく、

白檮の上に　横臼を作り　横臼に　醸みし大御酒　うまらに　聞しもち食せ　まろが父

とうたひき。此の歌は、國主等大贄を獻る時時、恒に今に至るまで詠むる歌なり。

史料２　応神天皇（『古事記』上巻）

十九年の冬十月の戊戌の朔に、吉野宮に幸す。時に國樔人來朝り。因りて醴酒を以て、天皇に獻りて、歌して曰さく、

橿の生に　横臼を作り　横臼に　醸める大御酒　うまらに　聞し持ち食せ　まろが父

歌既に訖りて、則ち口を打ちて仰ぎて咲ふ。今國樔、土毛獻る日に、歌訖りて即ち口を擊ち仰ぎ咲ふは、蓋し上古の遺則なり。夫れ國樔は、其の爲人、甚だ淳朴なり。毎に山の菓を取りて食ふ。亦蝦蟆を煮て上味とす。名けて毛瀰と曰ふ。其の土は、京より東南、山を隔てて、吉野河の上に居り。峯嶮しく谷深くして、道路狹く嶮し。故に、京に遠からずと雖も、本より朝來ること希なり。然れども此より後、屢參赴て、土毛を獻る。其の土毛は、栗・菌及び年魚の類なり。

史料３　応神天皇（『日本書紀』巻第 10）

天皇、吉野の宮に幸行でましし時、吉野川の濱に童女有りき。其の形姿美麗しかりき。故、是の童女と婚ひして、宮に還り坐しき。後更に亦吉野に幸行でましし時、其の童女の遇ひし所に留まりまして、其處に大御呉床を立てて、其の御呉床に坐して、御琴を彈きて、其の嬢子に儛爲しめたまひき。爾に其の嬢子の好く儛へるに因りて、御歌を作みたまひき。其の歌に曰ひしく、

呉床座の　神の御手もち　彈く琴に　舞する女　常世にもがも

といひき。卽ち阿岐豆野に幸でまして、御獵したまひし時、天皇御呉床に坐しましき。爾に蜩御腕を咋ふ卽ち、蜻蛉來て其の蜩を咋ひて飛びき。蜻蛉を訓みてアキヅと云ふ。是に御歌を作みたまひき。其の歌に曰ひしく、

み吉野の　袁牟漏が嶽に　猪鹿伏すと　誰ぞ　大前に奏す　やすみしし
我が大君の　猪鹿待つと　呉床に坐し　白栲の　衣手著具ふ　手腓に　蜩
かきつき　その蜩を　蜻蛉早咋ひ　かくの如　名に負はむと　そらみつ
倭の國を　蜻蛉島とふ

といひき。故、其の時より其の野を號けて阿岐豆野と謂ふ。

史料４　雄略天皇（『古事記』下巻）

冬十月の辛未の朔癸酉（三日）に、吉野宮（一九）に幸す。丙子（六日）に、御馬瀬（二〇）に幸す。虞人（二一）に命せて縦に獵す。重れる巘に凌り長き莽に赴く。未だ移影かざるに、什が七八を獲る。獵する毎に大きに獲。鳥獸、盡きむとす。遂に旋りて林泉に憩ふ。藪澤に相羊び、行夫を息めて車馬を展ふ。群臣に問ひて曰はく、「獵場の樂は、膳夫をして鮮を割らしむ。自ら割らむに何與に」とのたまふ。群臣、忽に對へまうすこと能はず。是に、天皇、大きに怒りたまひて、刀を抜きて御者（三）大津馬飼を斬りたまふ。是の日に、車駕、吉野宮より至りたまふ。

史料５　雄略天皇２年（458）条（『日本書紀』巻第 14）

秋八月の辛卯の朔戊申（十八日）に、吉野宮（二八）に行幸す。庚戌（二十日）に、河上の小野（二九）に幸す。

虞人（一）に命して獣駈らしめたまふ。躬ら射むとしたまひて待ひたまふ。虻、疾く飛び來て、天皇の臂を噬ふ。是に、蜻蛉（二）、忽然に飛び來て、虻を嚙ひて將て去ぬ。天皇、厥の心有ることを嘉したまひ、群臣に詔して曰はく、「朕が爲に蜻蛉を讃めて歌賦せよ」とのたまふ。群臣、能く敢へて賦む者莫し。天皇、乃ち口號して曰はく、

倭（三）の峰群の嶺に　猪鹿伏すと　誰か　この事　大前に奏す

一本、大前に奏すといふを以て、大君に奏すといふに易へたり。

大君は　そこを聞かして　玉纏の　胡床に
立たし

一本、立たしといふを以て、坐しといふに易へたり。

倭文纏の　胡床に立たし
猪鹿待つと　我がいませば　さ猪待つと　我が立たせば　手腓に　虻かきつき
その虻を　蜻蛉はや嚙ひ　昆ふ蟲も　大君にまつらふ　汝が形は　置かむ

蜻蛉嶋倭

一本、昆ふ蟲もといふより以下を以て、かくのごと　名に負はむと　そらみつ　倭の國を　蜻蛉嶋、といふといふに易へたり。

因りて蜻蛉を讃めて、此の地を名けて蜻蛉野（四）とす。

史料６　雄略天皇４年（460）条（『日本書紀』巻第 14）

年　代	天皇	月日	事　　項	文献
斉明 2(656)	斉明		吉野宮を作る	書紀
〃 5(659)		3月 5日	吉野宮へ行幸	書紀
天智10(671)	天智	10月21日	大海人皇子ら吉野宮に入る	書紀
天武元(672)	弘文	6月24日 7月23日	大海人挙兵して吉野宮進発、弘文天皇自決。近江朝滅ぶ	書紀
天武 2(673)	天武	2月27日	大海人皇子、飛鳥浄御原宮で即位。天武天皇となる	書紀
8(679)	天武	5月 5日 6日 7日	天皇吉野宮に行幸 皇后、諸皇子を集めて結束を誓わせる(吉野盟) 天皇、吉野宮から還幸	書紀
持統 3(689)	持統	1月18日 21日 8月 4日	天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸	書紀
4(690)		2月17日 5月 3日 8月 4日 10月 5日 12月12日 14日	天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸	書紀
5(691)		1月16日 23日 4月16日 22日 7月 3日 12日 10月13日 20日	天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸	書紀

表１　飛鳥時代以降の吉野宮関係年表１（日本書紀）

６月27日	行幸用の野菜の進上
７月２日	行幸用の器の請求
７月15日	芳野行幸に用いた貫簀札の付け札
７月15日	芳野行幸に用いなかった貫簀札の付け札

表３　天平８年（736）の芳野行幸にかかわる木簡（平城京二条大路側溝出土）

6(692)		5月12日 16日 7月 9日 28日 10月12日 19日	天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸	紀
7(693)		3月 6日 13日 5月 1日 7日 7月 7日 16日 8月17日 21日 11月 5日 10日	天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸	紀
8(694)		1月24日 4月 7日 丁 亥 9月 4日	天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸	紀
9(695)		2月 8日 15日 3月12日 15日 6月18日 26日 8月24日 30日 12月 5日 13日	天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸	紀
10(696)		2月 3日 4月28日 5月 4日 6月18日 26日	天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸 天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸	紀
11(697)		4月 7日 14日	天皇、吉野宮へ行幸 天皇、吉野宮から還幸	紀
文武 3(699)	文武	8月 3日	吉野宮付近の木が理由不明のまま枯れる	紀
大宝元(701)	文武	2月20日 27日 6月29日 7月10日	天皇、吉野離宮へ行幸 天皇、吉野離宮から還幸 持統太上天皇、吉野離宮へ行幸 太上天皇、吉野離宮から還	紀
2(702)		7月11日	天皇、吉野離宮行幸	紀
和銅 4(711)	元明	4月 9日	吉野郡に事務職員を置く	紀
養老 7(723)	元正	5月 9日	天皇、芳野宮へ行幸 天皇、芳野宮から還幸	紀
神亀元(724)	聖武	3月 1日 5日	天皇、芳野宮へ行幸 天皇、芳野宮から還幸	紀
天平 4(732)		7月 5日	人々干ばつで苦しみ、芳野・和泉の監に雨を祈らせる	紀
5(733)		1月27日	芳野監の稲として稲を貸与	紀
6(734)		5月28日	芳野監の稲として稲を貸与	紀
8(736)		6月27日 7月10日 13日 15日 ほか	天皇、芳野宮へ行幸 天皇、芳野監と近くの人々に品物を賜う 天皇、芳野宮から還幸 天皇、芳野宮行幸にかかわる木簡（多数）	紀 二条大路木簡

表２　飛鳥時代以降の吉野宮関係年表２（日本書紀・続日本紀・木簡）

３．宮瀧遺跡の調査と研究史

宮瀧遺跡の本格的な発掘調査は昭和５年（1930）から 13 年（1938）にかけて、京都大学考古学教室の末永雅雄（すえながまさお）博士によって行われた。

この遺跡については早くも明治 20 年代から昭和初期にかけて、木村一郎、山本源次郎、中岡清一、岸熊吉氏などによって地道な研究は行われていた。

発掘調査のきっかけは、吉野宮、吉野離宮と宮瀧遺跡の関係を知ることだったが、縄文時代、弥生時代、飛鳥・奈良時代の複合遺跡であることが明らかになり、さらにこの遺跡の重要性が指摘されるようになった。

末永博士の調査では、吉野川の河岸の台地上に飛鳥京に共通する石敷きや、小規模な礎石建物、土師器、須恵器、奈良時代の瓦などが検出され、ここに歴史時代の重要な遺構群が残されていることが明らかになった。しかし、昭和 19 年（1944）に刊行された調査報告書『宮瀧の遺跡』の結論は、「この地が吉野離宮の跡地と断定する資料は得られなかったが、その説を否定することは出来ない」という慎重なものであった。

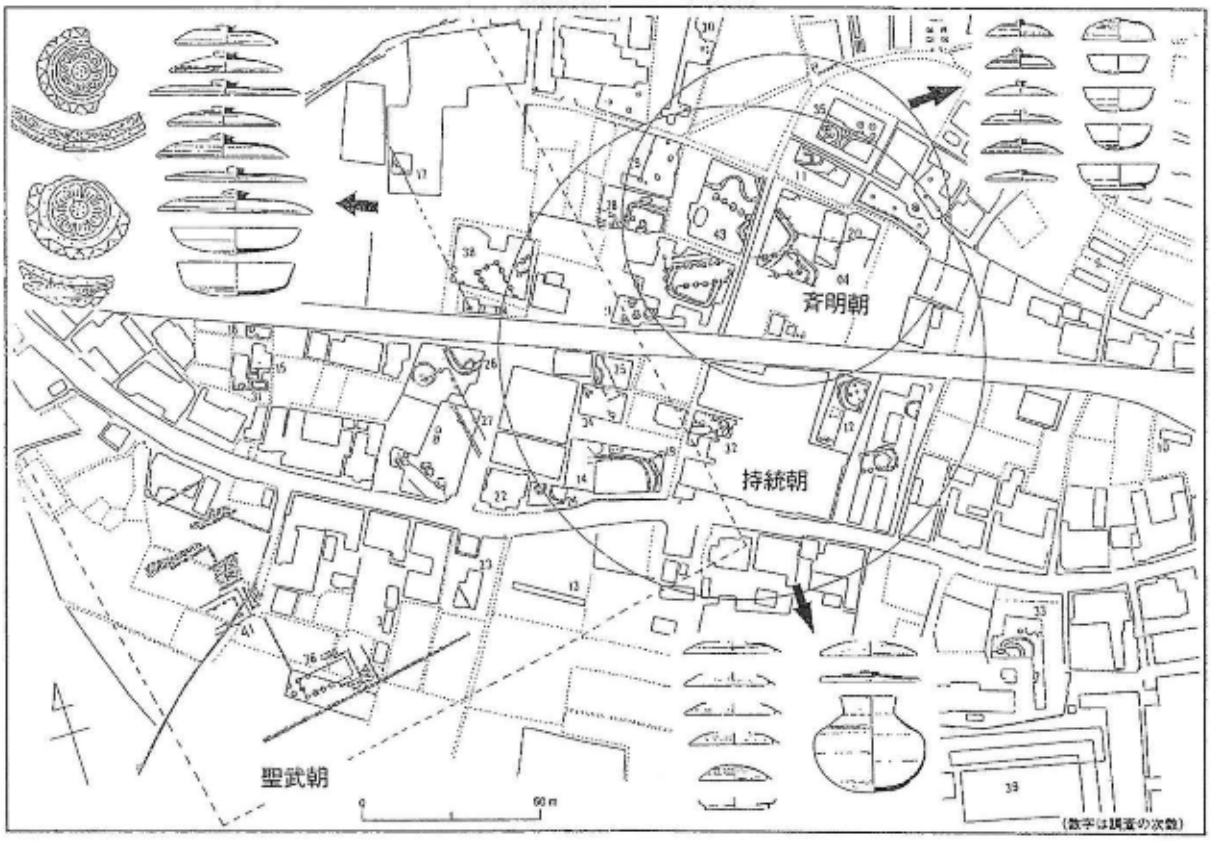


図３　宮滝遺跡の検出遺構

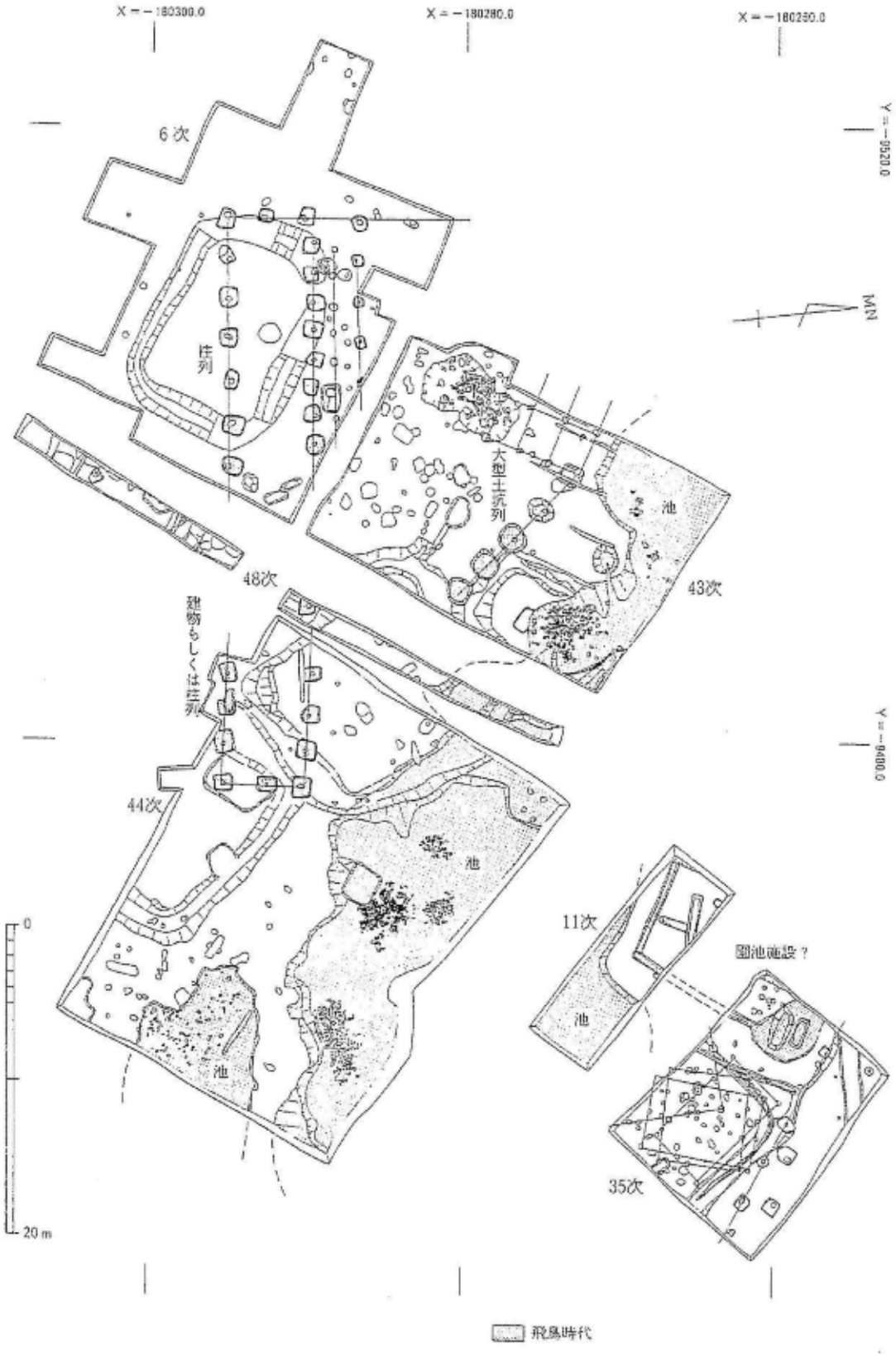


図４　宮滝遺跡の庭園と掘立柱列

４．発掘した遺構と吉野宮、吉野離宮

昭和 13 年の調査以降、長く発掘調査は行われていなかったが、昭和 50 年（1975）から始まった調査は、断続的ではあるが現在まで続いている。発掘調査面積は 7000 ㎡を越えたが、まだ宮瀧の台地全体の６分の１にすぎない。今後の調査によるところも大きいが、現在までの調査結果から考えられることを概略しておこう。

検出した飛鳥時代以降の遺構（**図３・４、写真２・３**）は四期に区分できる。第一期は７世紀中頃、第二期は７世紀後半、第三期は８世紀前半、第四期は９世紀末から 10 世紀初頭とみてよい。

私はこれらの遺構群を以下のようにとらえている。まず第一期が、斉明天皇の宮に相当すると思われる。台地の中央よりやや東寄りを中心とする庭園遺構や導水施設が設けられているが、ここからは遥か南方に喜佐谷（きさだに）を越えて青根ヶ峰（あおねがみね）を望むことができる。この山は別名水分山（みくまりやま）と呼ばれ、吉野連山を象徴する山でもある。斉明天皇はこの山を望む場所に、人工池と導水施設を作り、水辺の祭祀を行ったのだろう。

第二期が持統朝の宮と考えられる。第一期と重なる部分が多いが、西南部に広がり建造物が散在している。基本的には前代の池を中心とした場所を踏襲していることから、同じく水にかかわる祭祀が行われていたのだろう。面積の割合には建物遺構が少ないが、かえってそのことが、祭祀性の強いこの宮の性格を物語っているのかも知れない。

第三期の遺構群が最も遺存状態が良く、石敷き、石溝、掘立柱建物などが残っている。この時期の遺構の中心は、第一・二期の中心地から西に 60mほど移動しているが、このことによって周囲の景観が大きく変化している。今まで遠望できた青根ヶ峰が視界から消え、正面に吉野川を隔てて、神南備型の象山（きさやま）と対置するのだ。この時点で、吉野宮で行われていた祭祀のかたちが大きく変化したと考えられる。

第三期の建物は建て替えの痕跡もなく、土器、瓦とも８世紀第２四半期の短い期間に限られることから、この遺構群は聖武天皇の吉野離宮、さらに芳野監の役所も兼ねた建物の可能性が強い。

第四期の遺構は今のところ礎石建物一棟のみである。しかし、その位置は第三期の建物群のほぼ中央部に当たり、その建造時期からみて、宇多上皇の昌泰元年（898）の宮瀧行幸の際の行宮の一部ではなかろうか、と私は考えている。そうであれば、宮瀧遺跡が吉野宮である可能性が一段と強くなるだろう。上皇が２年後の昌泰３年（900）、大峰山に入峰されたことは『金峰山草創記』※に記されている。

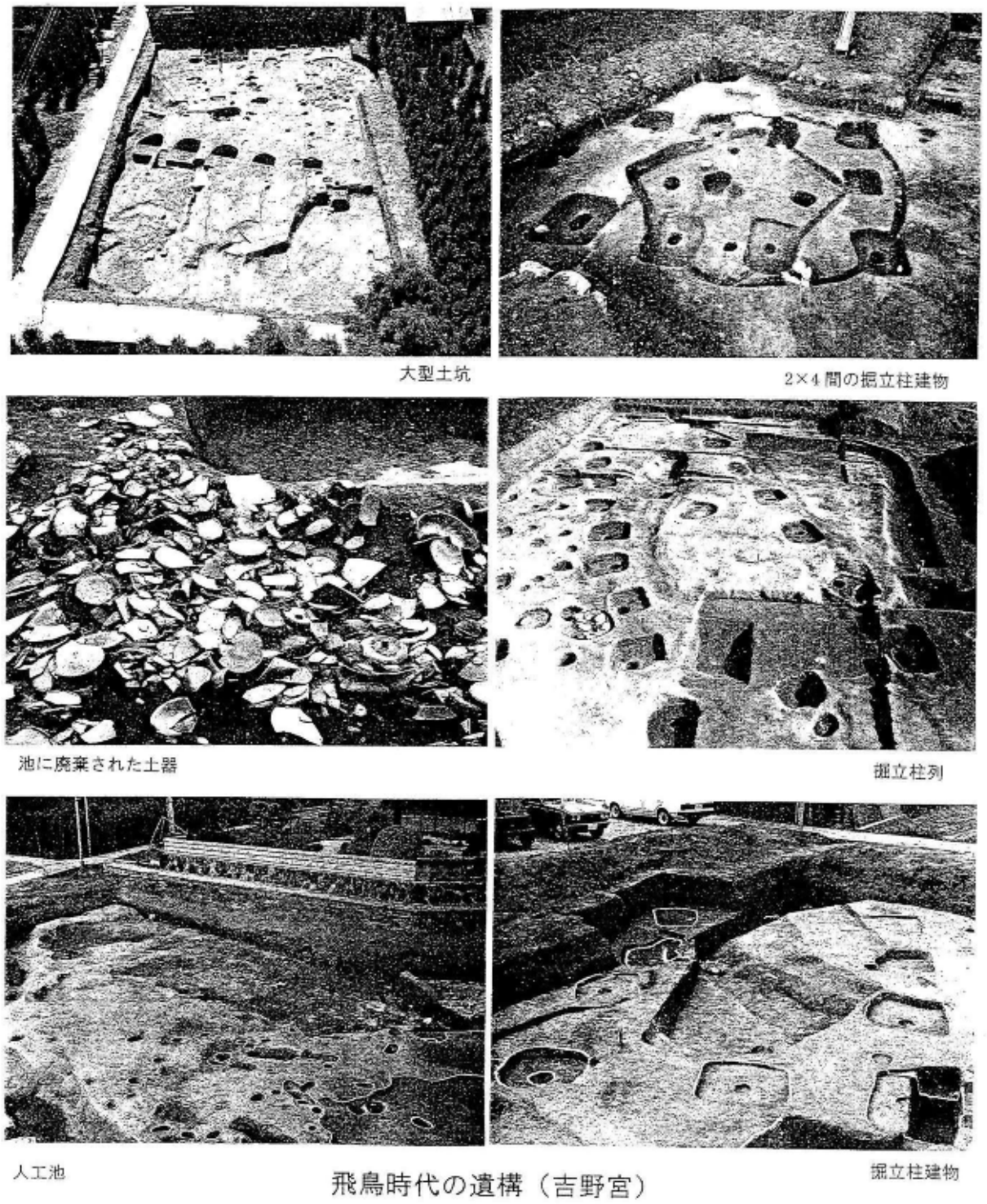
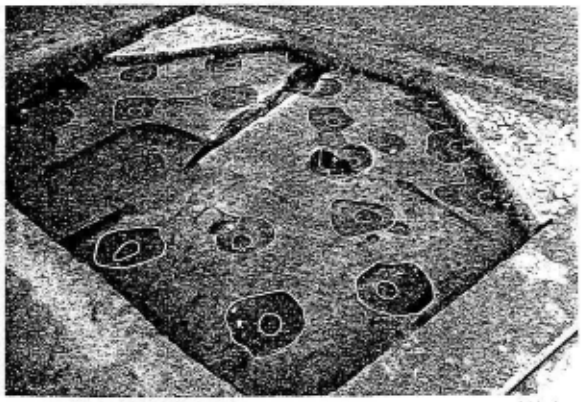
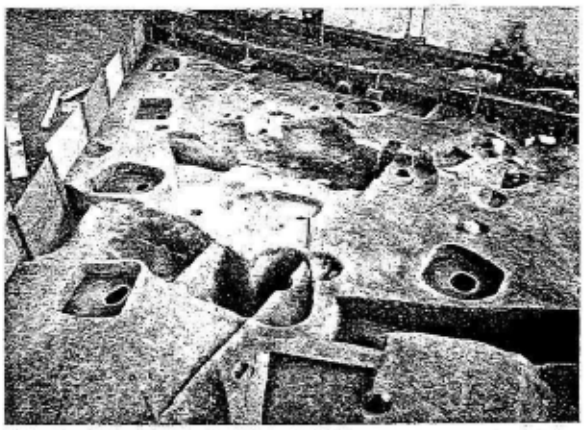


写真２　宮滝遺跡の遺構１

建物周囲の石敷き



掘立柱建物と石敷き



掘立柱建物

掘立柱建物

重なった礎石と柱穴

石溝

奈良時代の遺構（吉野離宮）

写真３　宮滝遺跡の遺構２

中世以降に成立した縁起で、史料としてはあまり重要視されていなかったが、昭和 59 年（1984）以降の、大峰山寺本堂地下の発掘調査で、宇多上皇の登山の可能性が指摘されている。宮瀧は古代には吉野山の登山口にあたっていたが、この宮瀧を訪れた上皇は、３年後の大峰参りの構想を描いていたのかも知れない。

もう一つ加えなければならないのは、遺跡中心近くの第三期の掘立柱建物の柱穴から、５世紀後半の須恵器大甕の破片が出土したことである。それは先に述べた『日本書紀』の雄略紀にみえる吉野宮と何らかの関わりがあるのでは、と思うからである。

雄略天皇（倭王武）の時代は大陸との交流が活発的に行われたいわゆる「倭の五王」の時代で、中国南北朝から様々な技術や文化がもたらされた。その中には「風水思想」、「神仙思想」も含まれていた。

私は斉明天皇がここに宮を営んだきっかけは、200 年前に雄略天皇が新しい思想を導入し、風水思想に基づいた宮を築いたことに起因するのではと思っている。

おわりに
― 吉野のもつ歴史性 ―

奈良時代になると、吉野は神仙境として都の貴紳たちの憧れの地となった。『懐風藻』に詠まれた数々の歌にその想いがあらわれているが、大伴王の漢詩を見てみよう（**史料７**）。

天皇にともなって吉野宮に行き、詔に応じて詠んだ歌

筏（いかだ）に乗って黄河の源流を尋ねた張騫（ちょうけん）にならって、天皇の行幸に従ってここ吉野川の源にある吉野宮（離宮）にやってきた。朝雲は南北にあり、夕霧は西東に流れている。吉野の峰は険しく、かき鳴らす弦琴の音も急を奏して、吉野川の谷は廣く、竹笛の音は良く通る。

まさに自然の神の造られた、この吉野の素晴らしい趣を歌にしようと筆を執ったが、詩才のない自分が恥ずかしいことだ。

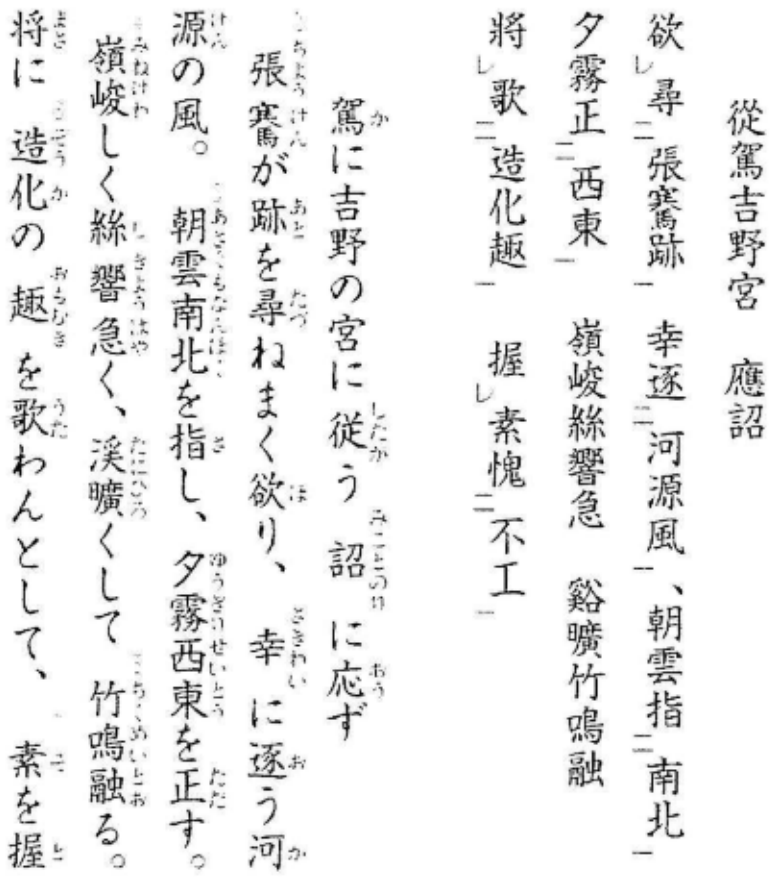
このように、吉野は日常の生活とは全く異なった世界、神仙の住む世界と認識されていたようだ。そこはまた再生、つまり蘇りの可能な空間としても捉えられていた。

乙巳のクーデターの後、身の危険を感じて吉野に入った古人大兄皇子（ふるひとのおおえのみこ）、満を持して吉野宮で半年を過ごした大海人皇子、時代は下って 14 世紀、後醍醐天皇（ごだいごてんのう）によって開かれた南の朝廷もこの吉野に置かれた。

都から遙か南の奥深い吉野に、時代を超えて再起を願った権力者達が向かった背景には、地理的にみれば、中央構造線沿

いに流れる吉野川が天然の濠となり、背後に広大な山並みが続く難攻不落の城砦とみることもできよう。

　しかし、それにも増して自然豊かな景観と、そこに暮らす人々の築いてきた歴史が、時代を超えて再起を願う人達の目指す地となったのだろう。



従駕吉野宮　應詔

欲尋張騫跡　幸逐河源風、朝雲指南北
夕霧正西東　嶺峻絲響急　谿曠竹鳴融
將歌造化趣　握素愧不工

駕に吉野の宮に従う　詔に応ず

張騫が跡を尋ねまく欲り、幸に逐う河源の風。朝雲南北を指し、夕霧西東を正す。嶺峻しく絲響急く、渓曠くして竹鳴融る。将に造化の趣を歌わんとして、素を握りて不工を愧ず。

史料７　大伴王の漢詩（『懐風藻』）

【関連史書解説（刊行年順）】　本文中に※をつけたもの

史書名	ふりがな	解説
古事記	こじき	和銅５年（712）成立（序文による）。日本最古の編年体史書。上中下３巻。
日本書紀	にほんしょき	養老４年（720）撰。編年体史書。30 巻・系図１巻（失）。
万葉集	まんようしゅう	奈良時代に成立した現存最古の歌集。20 巻。歌数 4500 余り。編者・大伴家持（？‐785）。
懐風藻	かいふうそう	天平勝宝 3 年（751）成立。１巻。現存最古の漢詩集。撰者未詳。64 人、120 首の漢詩を収める。
続日本紀	しょくにほんぎ	官人・菅野真道（741‐814）らが延暦 16 年（797）に完成させた全 40 巻の編年体史書。文武元年（697）より延暦 10 年（791）までの歴史を扱う。
日本紀略	にほんきりゃく	平安時代中期（11 世紀後半～12 世紀頃）以降に成立。編年体史書。編者未詳。
扶桑略記	ふそうりゃっき	平安時代後期に成立。神武天皇から嘉保元年（1094）までの仏教史を中心とした編年体史書。
山家集	さんかしゅう	歌人・西行（1118‐1190）の家集。最古の写本（陽明文庫本）で 1552 首を掲載。
宇治拾遺物語	うじしゅういものがたり	鎌倉時代前期（13 世紀初頭）に成立した説話集。197 話。編者不詳。
古今著聞集	ここんちょもんしゅう	建長６年（1254）、官人・橘成李が編纂した説話集。20 巻 30 篇 726 話からなる。
源平盛衰記	げんぺいせいすいき	源氏・平氏の盛衰を描いた軍記物語。鎌倉時代後期以降成立か。48 巻。著者不詳。『平家物語』の異本とされる。
帝王編年記	ていおうへんねんき	室町時代の 14 世紀後半に記された編年体史書。神代から後伏見院までの 27 巻。僧永祐撰と伝える。
和州旧跡幽考	わしゅうきゅうせきゆうこう	延宝９年・天和元年（1681）成立。20 巻。大和国の名所案内記で『大和名所記』とも。著者は大和郡山の町人学者・林宗甫。
和州巡覧記	わしゅうじゅんらんき	元禄５年（1692）成立。同９年刊行。大和国の名所案内記で「大和めぐりの記」とも。著者は福岡藩儒の貝原益軒。
大和志	やまとし	享保 21 年（1736）の開板。幕撰地誌『日本與地通志畿内部』の一つで、大和国の地誌。並河誠所（1668‐1738）編。
菅傘日記	すががさのにき	国学者・本居宣長（1730‐1801）が 43 歳の時、明和９年（1772）３月に吉野・飛鳥を旅した折の日記。上下２巻。
岩橋の記	いわはしのき	江戸時代の文人・上田秋成（1734‐1809）が天明８年（1788）３月、吉野・飛鳥を巡った折の紀行文。『秋成遺文』所収。

※上記の解説は主として『岩波日本史辞典』1999 年に拠った。

吉野宮をみる視点

―過去から うたから 調査から―

1．なぜ今、研究史なのか

2．お話をはじめる前に

3．吉野宮所在地研究の黎明

4．静かに灯は灯された

5．燃え上がる炎のように

6．なおも炎は揺らめいて

7．ある研究者の付き合い方

8．静かな炎と新しい風

9．吉野宮をみる視点

吉野町教育委員会

中東 洋行

講師プロフィール：

昭和 61（1986）年、奈良県大淀町生まれ。大阪教育大学教員養成課程を卒業後、関西大学大学院で考古学を学ぶ。平成 24（2012）年、奈良県立橿原考古学研究所嘱託職員となり、平成 26（2014）年より現職。

1．なぜ今、研究史なのか

昨今、聖地巡礼なる観光が人気を博している。専用の HP も多くつくられており、その人気ぶりがうかがえる。平成 25（2013）年には観光庁が外国人向けに専用の HP を作成していたし[注1]、平成 26（2014）年には日本政府観光局がジャパン・アニメ・マップを作製するなど[注2]、国としても聖地巡礼という観光を重視し

ていることが分かる。

この聖地巡礼とは一体何か。要は、人気アニメの舞台となった場所を、あるいは、人気アニメの舞台のモデルとなった場所（これらがいわゆる聖地）を、実際に訪れるというものである。アニメファンがこの聖地を特定するためにそそぐ力の入れ具合には目を見張るものがあり、アニメが放映された次の瞬間には、聖地特定に向けた議論がなされていると聞く。そして、その聖地に行ってアニメの世界に浸る感覚を楽しむのだという。

もしかすると、この聖地巡礼とよばれる新しい観光に、違和感を覚える方がおられるかもしれない。だが、“アニメ”を“歴史上の事件”に置き換えれば、どうだろうか。観光地で、“あの歴史の舞台となったのがここか”と感傷に浸る。読者諸賢にも、似たような経験をされた方がおられるのではないだろうか。そう考えると、聖地巡礼と呼ばれる観光も、普通の観光の延長線上にある事に気づく。

アニメの舞台となった場所が一体どこなのかを探す、ということについても、ある意味歴史名所の観光と変わらない。今だって、例えば邪馬台国の場所を巡って論争が続いているし、壬申の乱がおこったのは畿内ではなく九州であったとする著書注3が刊行されたりしている。少し時代を遡って昭和初期ともなれば、平城宮や藤原宮の場所は諸説あったし、飛鳥京跡なども明日香村雷（いかづち）のあたり、現在石神遺跡（いしがみいせき）と呼ばれている場所注4とされていた。

なぜ、このような話題を出すのか。実はここ吉野でも、歴史の舞台を巡って議論がなされてきた。そして、この議論は今なお静かに続いている。その論争のテーマは、古代吉野に造営されたという離宮“吉野宮”跡の所在地についてである。

吉野宮跡の所在地は、今日、吉野町宮滝の宮滝遺跡とみるのが通説である。とはいうものの、吉野宮が宮滝にあったとすることに対しては反対意見もあって、今でも宮滝以外に候補地を求める方がおられる。もちろん、今後、学術的に研究が進んで他の候補地が有力になることもあるだろうし、個々人ではその方の想う万葉の故地があってもよいと思う。ただし、私はこの吉野宮跡の所在地を考えるにあたって、常々留意したいと思っていることがある。それは、研究史である。

近年の研究動向を窺うに、吉野宮跡所在地を巡る長く積み重ねられてきた議論の経過を抜きにして各自の主張を唱え、ある意味一方的に他の候補地を批判するものが散見される。研究を進めるには、議論を進めるには、やはりこれまでの経緯というものを踏まえる必要がある。今一度、吉野宮跡所在地を巡ってどのような議論がなされてきたのか、見つめなおす必要性があるのではないだろうか。

本稿では、吉野宮を巡ってこれまでにどのような議論・論争が繰り広げられてきたのか、可能な限り紹介する。このことを通して今後の吉野宮研究推進の一助としたい。そのうえで、吉野宮跡所在地と宮滝遺跡の今、そして今後について、若干の報告と私見を述べたい。

2．お話をはじめる前に

吉野宮はどこにあったのか。言葉にするとわずか 12 文字に過ぎない、素朴で単純明快な疑問である。その解を巡っては、これまでに多くの説や伝承注5が生み出されてきたし、また、多くの研究者が議論を交わしてきた。特に研究者たちが交わしてきた議論は、時に静かに、時に熱く、時には滑稽と思えるほどに激しい調子でなされてきたのである。

詳細は後述するが、本稿で吉野宮跡所在地論争として扱う論争をも引き起こした、吉野宮跡所在地研究の研究史の全容を把握するには、いくつかの前提知識と、とてつもない量の資料を読む必要がある。ただし、その資料の中には、すでに所在不明となっているものがあるし、議論が様々なメディアを通じてなされてきた注6ために残っていないものさえある。よって、吉野宮跡所在地研究の研究史全容をつまびらかにすることは、もはや不可能といって過言ではない。

しかし、今、ここで筆者が求めたいのは、一言一句すべてを漏らさずに吉野宮跡所在地研究の展開を解き明かすことではない。本稿では、筆者が把握しえた限りにおける情報をまとめ、吉野宮跡所在地研究のおおよその流れを提示することで、その責を果たしたい。なお、筆者とていまだ吉野宮跡所在地研究を可能な限り把握すべく、努力を続けている最中である。今後新たな資料がみつかれば、ここで述べた内容を一部なりとも変更する必要が生じるかもしれない。その点は何卒ご寛恕をお願いしたい。

ところで、「吉野宮」という言葉が意味するものは非常に多岐にわたる。筆者と読者諸賢との間でも「吉野宮」という言葉から受け取るニュアンスが異なる場合がある。その場合、筆者の伝えたい情報が上手く伝わらない可能性が出てくる。そこでまずは、本稿で用いる「吉野宮」について定義しておきたい。

歴史的にみて、吉野宮という言葉には次の意味を指すものがある。

①応神天皇が吉野に行幸されたときの宮。
②雄略天皇が吉野で狩りをされた際の宮。
③飛鳥時代、斉明天皇が吉野に造営された宮。壬申の乱の吉野宮、持統天皇が 30 回以上訪れた宮と同一とする。
④奈良時代、聖武天皇が訪れた離宮。
⑤南北朝時代、後醍醐天皇が開いた宮。

本稿では混乱を避けるため、必要に応

じて、①を応神期吉野宮、②を雄略期吉野宮、③を吉野宮、④を吉野離宮、⑤を南朝吉野宮と呼び分けることとしたい。よって本稿で単独に“吉野宮”と記す場合は、原則として③の意味でのみ用いていることをご承知いただきたい。なお、研究者によっては上記と異なるニュアンスで吉野宮をとらえている場合がある。その場合は必要に応じ、「〇〇のいう吉野宮」（例えば、「中東のいう吉野宮」）といった具合に書き分けることとする。少々類似する語句が入り乱れることになるかもしれないが、ご容赦願いたい。

３．吉野宮跡所在地研究の黎明

ｉ．中世以前の吉野宮跡所在地研究

『日本書記』※によれば、吉野宮は斉明天皇２（656）年に造営されたという。その後、吉野宮には斉明天皇の行幸があり、壬申の乱の前に大海人皇子が籠られ、持統天皇が足しげく通い、以降聖武天皇までの歴代天皇の行幸があって、随伴する貴族たちにより多くの万葉歌が残された。このように古代史上、非常に大きな意味をもつこととなった吉野宮。しかし、吉野宮に関する一連の記述には、そのいずれにも所在地が明記されなかった。『古事記』※、『日本書紀』、『続日本紀』※などの歴史書そのいずれにも、である。飛鳥時代には場所を示す必要がないくらい、吉野宮のある場所は誰にとっても明らかだったのだろう。だが現実問題として、平安時代になる頃には、吉野宮があった場所は誰にも分からなくなっていたのである。

管見の限り、吉野宮の所在地を記すようになる最古級の資料は、平安時代～鎌倉時代に書かれた『宇治拾遺物語』※や『源平盛衰記』※などである。これらは、吉野宮は吉野山にあったと記している。以下に『宇治拾遺物語』を引用してみよう。

今は昔、天智天皇の御子に、大友皇子といふ人ありけり。太政大臣に成て、世の政を行てなんありける。心の中に、「御門失給なば、次の御門には、我ならん」と思給けり。清見原天皇、その時は春宮にておはしましけるが、此気色を知らせ給ければ、「大友皇子は、時の政をし、世のおぼえも威勢も猛也。我は春宮にてあれば、勢も及べからず。あやまたれなん」と、おそりおぼして、御門、病つき給則、「吉野山の奥に入りて、法師になりぬ」といひて、籠り給ぬ。

我寺の本願主、淨見原の宮と申は、事新けれども天智天皇御弟、大海人王子是也、天皇我御子達には譲位給はで、淨見原宮に譲位給へりしかば、天智崩御の後、皇子大友位に洩給ひぬる事を恨て、謀叛をおこし、淨見原宮を襲ひ給しかば、宮都を出て吉野川に入給ふ、天神憐を垂給けるにや、天女あま降り、天の羽衣にて廻雪の袖をかなでしかば、後憑しくぞ思

召けるに、猶芳野山を責べき聞えありければ、彼山を出給。

この記述が吉野宮跡の所在地を記した最古の記録だとしても、この記事を以て吉野宮跡は吉野山にあったとするのは早計である。これらの書物が、吉野宮がなくなって 300 年以上経ってから書かれたことを鑑みれば、どこまで信用できるのかは疑問が残る。『古事記』『日本書紀』（以下、『記』『紀』とする）にないエピソードも追加されており、物語としてのニュアンスが強いことに留意すれば、その扱いには慎重になるべきであろう。

ⅱ．江戸時代の吉野宮跡所在地研究

次に吉野宮跡の所在地が記されるようになるのは、江戸時代になってからである。享保 19（1734）年成立の『大和志』※には、当時の人々がもっていた吉野宮に関する情報が最も端的に表されている。

行宮　五所の一つは、池田の荘麻志口村　雄略天皇二年冬十月、吉野の御馬瀬に幸す。即ち此の一つは、大滝村に在り、一つは宮滝村に在り、一つは下市村に在り、平城七代の天子、屢（しばしば）此に幸す。又、美吉野村は大井川、嵐山などの名有り、相伝わる。後村上帝の行宮と云う。

江戸時代になると吉野宮が吉野山にあったとする見解は弱まり、別の候補地が有力になっていたことが分かる。

『大和志』の記述を傍証できる資料もある。江戸時代の国文学者・本居宣長（もとおりのりなが）が記した『菅笠日記』※（1772）に、次のような文章がでてくる。

いにしへ吉野の宮と申て。みかどのしばしばおはしましし所。柿本人まろ主の。御供にさぶらひて。滝のみやことよみけるも。この大瀧によれる所なりけんかし。…（中略）…此のわたりも、いにしへ御かり宮有て。おはしましつつ、せうえうし給ひし所なるべし。宮瀧といふ里の名も、さるよしにやあらん。

このように、吉野宮跡所在地に大滝説と宮滝説があることが記されている。本居宣長は下市町秋津付近には足を延ばさなかったようで、秋津説の記述は見当たらない。しかし、いずれにせよ江戸時代の時点で複数の説があり、読みようによっては、当時、吉野宮が複数存在していたと思われていた節が感じられよう。

もちろん、吉野宮は一か所であると考え、どこにあったのかを追求しようとした者もいた。以下に上田秋成の「岩橋の記」※を引用する。

桜木の社を過ぎて川邊に出ず。あきつの宮の瀧の流うべも名にひびける處なり。屏風を立てた巌の肩よりさしのぞめば、底ひも知られぬ青淵の色、骨も冷ゆるばかり覚ゆ。むかひの里より宮の瀧と云ふ。このわたりいにしえの帝の四つの時いでまして、御遊びありし秋津の小野はここならんを、伊勢人の記には、河かみなる

西河大瀧のあたりなるべしいはれたり。

また、本居宣長の師にあたる加茂真淵（かものまぶち）は『萬葉集巻一之考』（1768）において、「*此宮は吉野の夏箕川の下、今は宮瀧といふ川曲の上方に、宮滝てふ村ある所なり*」と記している。しかし、彼らの主張について他の候補地から特に異議はでず、議論にもならなかった。

このことから推察するに、江戸時代後期頃にはゆるやかに宮滝説が優位を保ちながらも、宮滝説、大滝説、秋津説が大きくは競合せず、あるいは共存しながら、広く流布していたのだろう。また、その考証において明確な論点などはみられず、『万葉集』や『記』『紀』に表れる地名との関係や伝承などによって、各説が存在していたのではないだろうか。

4．静かに灯はともされた

ｉ．明治～大正期の吉野宮跡所在地研究

江戸時代末、ゆるやかに３カ所の候補地があげられていた吉野宮跡だが、明治時代になるとその所在地を解明しようとする動きが現れる。その嚆矢となったのが、吉田東伍の『大日本地名辞書』（1890）である。同書は日本初の日本全国を対象とした地誌書である。それを個人の力で、しかもかなりの史料批判を行いながらつくりあげたとして、当時の研究者たちから大注目された[注7]。その『大日本地名辞書』で吉野宮跡の所在地は「*吉野離宮は蓋二所あり、一は国栖村大字宮滝にして一は下市村なり、然れども下市の徴證明白ならず*」として、宮滝説が紹介された。このことは、後身の研究者に大きな影響を与え、長く吉野宮研究をする人々に引用・参照されていくことになる。

『大日本地名辞書』刊行からしばらくの時が流れて大正時代を迎える頃になると、“この場所”こそが吉野宮跡であるとする見解・研究が次々に発表され始めるようになる。この背景には、大正中頃から急激に大和への関心が盛んになっていたことや[注8]、聖跡と称された皇室に所縁のある遺跡の研究が各地で盛んになっていたことなどがあげられよう。

蛇足ではある、が藤原宮跡や平城宮跡の所在地が解明されるのも、丁度この時期にあたる。平城宮跡の場所が関野貞（せきのただし）によって解明されたのが明治 33（1900）年[注9]、同地が国史跡指定を受けたのは大正 11（1922）年である。また、藤原宮跡が現在の場所とされるようになったのは、明治以降の木村一郎をはじめとする研究者たちの成果によっており、昭和 9（1934）年から始まった発掘調査で位置が確定したのであった[注10]。

話を戻そう。明治・大正期の吉野宮跡所在地研究においては、大滝説と宮滝説とが取り上げられることが多かった。例えば、奈良県史跡調査員などを務めた水木要太郎（みずきようたろう）の『大和巡』（1903）

や奈良県教育委員会の『大和志料』（1905)、『川上村誌』（1904）などは大滝説をとっている。一方、民俗学者・国文学者である折口信夫(おりぐちしのぶ)の『萬葉集辭典』（1919)、立教大学教授などを務めた次田潤(つぎたうるう)の『萬葉集新講』（1921)、神宮皇学館教授などを務めた鈴木友吉の『吉野哀史』（1921)、吉野郡役所の『奈良縣吉野郡史料』（1919-1923）などは宮滝説をとる。

この時期の研究は、他者の見解を批判・検証しながら自説を展開するのではなく、それぞれの研究者が淡々と自身の見解を述べるようにすすめられた。そのため、当時どの説が有力であったのかが分かりにくい。だが、年代が新しくなるにつれて宮滝説の論考が増えていることを思えば、徐々に宮滝説が有力視されていったのだろう。そして大正 12(1923) 年、後に当時京都大学教授となる国文学者の澤瀉久孝（おもだかひさたか）が「吉野離宮跡の位置其他」にて宮滝説を支持し、宮滝説の優勢はさらに強いものとなった。

ⅱ．大正期の吉野宮研究者①　木村一郎

明治・大正期の研究は、淡々と自身の見解を述べる様に進められたと先ほど記したが、一方でこの時期の研究者たちの研究熱にはとても熱いものがあった。吉野宮跡所在地を実証的に検証しようと、現地を訪れて踏査をしたり、あるいは表面採取という方法で、今日でいう考古学的に吉野宮跡所在地を検証しようする者が現れはじめたのである。この時期の動きは、後に激しく燃え上がる吉野宮跡所在地論争にも影響を与えることとなる。

まず注目されるのは木村一郎である。同姓同名の人物がいる恐れがあるが、現存する記録から分かることをまとめていきたい[注 11]。木村は文久 2（1862）年生まれ、三重県伊勢山田の出身で、奈良県下で教職に従事した人物である。古代の帝都宮跡が顕彰されずに荒廃したままであることを嘆いて調査研究にはげみ、明治 31（1888）年に上京。有志の間を奔走し、協力を得て、古墓墳保存建議案や御歴世宮跡保存の建議案などを国会へ提出した。これらの建議は結果として採用されなかったが、帝国古跡取調會や史跡名勝天然記念物保存協会の起こるきっかけになったという。また、木村の研究成果は、明治 32（1889）年に大阪市で行われた仁徳天皇 1500 年祭や、高津宮跡記念碑建立等に採用されたほか、喜田貞吉ら他の研究者に参照されるなど、大きな影響を与えた。皇跡尊重研究者として知られた人物であった。

木村が発表した研究の中で宮滝について記したものがないため[注 12]、彼の宮滝に関する調査研究の内容は不明な部分が多い。しかし、木村の宮滝調査にまつわる活動については、昭和 19（1944）年刊

行の『宮滝の遺跡』に、喜田貞吉と宮滝在住の今西新兵衛から末永雅雄が聞き取った情報がまとめられている。以下に引用する。

今より約四十四五年も以前、宮滝から三里ばかり東北の高見村中黒と云う所へ来住した一人の奇人型の人があった。閑のあるごとに小さな麻袋を提げて宮瀧へ来て、畠の中を探しては袋をふくらませて帰る姿をよく見た。その人が即ち茲に云ふ木村一郎氏であった。当時今西氏等は子供であったが不審に思ってそれを注意されていた。

この文章を『宮滝の遺跡』が刊行された昭和 19（1944）年の 44～45 年前を読むと、木村が宮滝を訪れたのは明治 33（1900）年頃のことになる。これだと木村はすでに東京へ行ってしまっているはずで、実態とあわない。おそらくこれは、末永が宮滝での調査中に今西から聞き取った際のメモをそのまま引用したために生じた齟齬であろう。末永が宮滝にいたのは昭和 5（1930）年～13（1938）年だから、木村が活動したのはその 44～45 年前にあたる明治 19（1886）年～明治 27（1894）年頃のこととみられる。この頃、高見村中黒（現在の東吉野村中黒）におそらく教師として赴任した木村は、自身の関心にもとづき、教職の合間を縫って、当時吉野宮跡であることが指摘されていた宮滝の踏査を行ったのだろう。そこで遺物等を採取し、何らかの手がかりを経て、宮滝説を確信したと思われる。

なお、木村は同様のことを各地の遺跡等で行っていたようであり、そのことで遺跡の現状を知り、嘆き、明治 31（1898）年に上京して遺跡保護のための有志を募ったのではないか。東京に出てからの様子については、喜田が末永に伝えており、木村が喜田のもとを訪れたことが分かっている[注13]。その時、他の様々な宮跡の見解などとともに、吉野宮跡所在地は宮滝だと喜田に訴えたのではないだろうか。

ⅲ．大正期の吉野宮研究者② 山本源次郎

また、木村にやや遅れて、地元で宮滝の研究を進めた人物がいた。中荘村樫尾（現吉野町樫尾）出身の山本源次郎である。山本は、慶応 2（1866）年の生れである[注14]。明治 27（1896）年に吉野材木中荘村産業組合長となり、明治 30（1897）年には全国材木連合大会を中荘村で開催している[注15]から、材木関係の仕事を長く続けていた人物と思われる。父の後をついで明治 37（1904）年から中荘村の村長となり[注16]、中荘村の円満発展に意を注いだ。

末永の『宮滝の遺跡』（1944）によると、山本は大正の初め頃から宮滝説の検証に務めたという。そのきっかけが何だったのかはつまびらかでないが、木村が

宮滝の調査をしていた頃に山本の父が宮滝を含む中荘村村長を務めていた注 17 ことを思えば、あるいは木村の活動を何らかのかたちで知っていたのかもしれない。

山本は地元住民という地の利を生かしつつ、様々な文献史料に当たり、宮滝説を検証したようだ。その見解はすべてノートにまとめたという注 18 が、現在そのノートは所在不明である。ただし、「吉野離宮論」と題した論考が雑誌『奈良文化』に連載されており、今も読むことができる。また山本は、現地踏査で宮滝を訪れた澤瀉の案内も務めており注 19 宮滝説をとった澤瀉の研究にも一役買った。

iv．昭和初頭の研究者たち

山本の後を担うかのように宮滝説を検証した人物が、中岡清一である。中岡は吉野山の生まれで、県内の教職、奈良県立奈良図書館司書、奈良県視学などを務めた注 20 人物である。生年等は不明であるが、明治 38（1905）年には現・吉野山小学校にて教諭をしており注 21、中岡の代表作である『大塔宮之吉野城』を刊行された昭和 12（1937）年には小学校校長を務めていた注 22 ことを思えば、明治 20 年以前の生まれであろうか。

中岡は、明治 45（1912）年から主に吉野山の名所を解説した『吉野名所誌』という書物を吉野山小学校同窓会の事業として刊行している。このことから、若いうちから吉野山の歴史について調査・研究していたものと思われる。この『吉野名所誌』は確認できる限り昭和 4（1929）年刊行の改訂 13 版まで刊行されており、これらを読み比べることで、多少なりとも中岡の考えの変化を追うことができる。明治 45（1912）年刊行の『吉野名所誌』では天武帝の離宮址とする項目を設け、「*袖振山の背後一丁ばかり右に取れば日雄寺址あり、天智天皇の十年、大海人皇子大友皇子を避けて此の寺に入らせ給ひ、後長く離宮とし給へり。*」としている。この記事は昭和 3（1928）年まで利用されるのだが、昭和 4（1929）年刊行の『吉野名所誌（改訂 13 版）』では新たに「吉野離宮址」という項目が設けられ、宮滝説を書き記すようになっている。このことから考えれば、当初中岡は、吉野宮が吉野山にあったと考えていたらしい。しかし遅くとも昭和に入る頃には考えを改め、宮滝に吉野宮があったと考えるようになったようである。

中岡が心変わりしたきっかけは明らかでない。ただ、大正の後半と言えば澤瀉の論文が発表されるなどして宮滝説が強まっていく時期に当たるし、吉野山にほど近い宮滝では山本源次郎が精力的な活動を続けていた。あるいは、彼らの調査や活動を知ったことが、一つのきっかけになったのではないかと思われる。以降、中岡は宮滝説の研究を進めるようになり、

後に始まる吉野宮跡所在地論争をけん引する一人となっていく。

吉野宮跡所在地論争をけん引した一人が中岡であることは既に述べた。だが、論争を行うには、中岡一人では人数が足りない。少なくとももう一人、争う相手が必要である。その人物となったのが、森口奈良吉（もりぐちならきち）であった。

森口は明治８（1875）年に小川村（現在の東吉野村小川）に生まれた。奈良女子高等師範学校（現在の奈良女子大学の前身）の教諭や、春日神社宮司などを歴任したほか、大正 8（1919）年から奈良県史跡名勝天然記念物調査委員会の委員を務めた注23。森口は小川村にある蟻通（ありとおし）神社の研究を進め、『延喜式』にみる丹生川上神社は蟻通神社であるとの説を発表し、蟻通神社を丹生川上神社中社にする実績をあげた人物でもある。

先の中岡が吉野宮跡宮滝説をとり始めたころ、森口は自身の研究の成果から、吉野宮跡は丹生川上神社中社にあると考えていた。昭和２（1927）年８月、森口は自身の見解、吉野宮跡小川説「吉野離宮の発見に就いて」を８月 24 日発行分から３回、『奈良新聞』紙上に発表した注24。これが、この後長く続く吉野宮跡所在地論争の引き金となったのである。

５．燃え上がる炎のように

ｉ．吉野宮跡所在地論争のはじまり

昭和 2（1927）年夏の奈良県史跡調査會注25の席上で、中岡と森口、異なる意見の持ち主が出会った。この時、中岡は一般参加者として、森口は委員として、委員会に出席していたようである注26。会議の議事録などが残されていないため、その会議の内容は想像するしかないが、この際に中岡と森口は吉野宮跡所在地を巡って真っ向から衝突したようだ注27。同じ年に奈良県史跡調査会の嘱託となっていた末永雅雄は、この時のことを次のように述懐している（末永 2004）。

奈良では吉野離宮の問題があって、中岡さんは宮滝、森口さんは丹生川上社付近でいつも史跡調査委員会で激論をやる。

この記述からも察せられるように、調査會席上での両者の議論は激しいものとなったようだ。おそらく、両者納得のいかないままお開きになったことだろう。

余談ではあるが、中岡が昭和３(1928)年 12 月発行の雑誌『名所舊跡』で発表した「金峯山に関する考證（一）」では、自身の身分を奈良県史跡調査委員としている。昭和 2（1927）年夏に森口と衝突して以降、中岡も奈良県史跡調査會の委員になったようだ。末永が自身の述壊で、「*中岡さんは宮滝、森口さんは丹生川上社付近で“いつも”史跡調査委員会で激論をやる*」(末永 2004)としたのには、このような経緯があると思われる。

話を戻そう。昭和 2（1927）年夏の

委員会以降、両者は自説の妥当性を高めるべく、それぞれに自身の研究を深めていく。また、彼らは自身の研究を深める一方で、競い合うかのように論文を発表した。まず森口が、昭和 2（1927）年 11 月に「吉野離宮考」を『奈良新聞』紙上に掲載。翌昭和 3（1928）年 2 月には中岡の発掘調査成果を受けて「宮滝は吉野郡院の址であらう」を『奈良新聞』と『県神職会報』107 号に掲載。同年 8 月と 9 月には改めて「吉野離宮考」と題した論考を『県神職会報』112 号と全国誌『史跡名勝天然記念物』第３集第９號に発表した。これをうけて中岡も「宮滝の吉野離宮阯に就て　森口氏の「吉野離宮考」を駁す」と題した論考を『史跡名勝天然記念物』第３集第１０號に発表し、同じものを『奈良文化』15 号にも投稿した。そうすると、森口は「吉野離宮考」を改訂し、翌昭和 4（1929）年に『名所旧跡』や『皇学』第 2 巻 2 号などに発表している。これに対して中岡は、奈良市で講演を行っていた際に飛鳥村でも石敷き遺構が埋蔵されていると聞き、独自に飛鳥村で発掘調査を行った。この成果をもとに、昭和 4（1929）年に『飛鳥浄御原宮跡一部発掘ニ就テ』を自費で刊行。宮滝遺跡の石敷き遺構と飛鳥で確認された石敷き遺構の共通性をもとに、改めて宮滝説を主張したのであった。

ここで中岡と森口の記した文章のうち、昭和 3（1928）年に発表された「吉野離宮考」と「宮滝の吉野離宮阯に就て　森口氏の「吉野離宮考」を駁す」を参考に、彼らの考察の内容を見ることにしよう。

まずは発表の時期が早い森口からみていこう。森口は、吉野宮について考えるには、位置と創建年代の二つの要素が重要とした。まず吉野宮の位置を考えるにあたっては、万葉歌にみる秋津野の位置を確定する必要があるとした。そして、その秋津野の所在地を考えるには、万葉歌をもとに、付近に吉野川（秋津の川、丹生の川、三船の谿、象の小川）、象の中山（象山）、三船の山、青根が峰、滝、ゆづる葉の三井、御山、夢のわたなどがあること、そしてなによりも秋津野は川上の小野が改名させられたものであり、川上の小野の側には小牟漏岳があると記されていることから、小牟漏岳があることが必要だと考えた。古くから小牟漏岳は小川村小村にあるとされ、丹生川上神社中社裏の小村岳がそれに該当するとみられてきた。このことを重視し、吉野宮は丹生川上神社中社付近にあると考えた。

しかし、秋津野の所在地がこれで解決したとしても、それ以外の地名等が未解決である。そこで付近の小字等の地名を参照し、まず“アキツ”については、その名残が小村岳東北一帯に残る字“アカベ”であるとし、秋津野は小村岳山中にある千畳敷や字萩原に求められるとした。

また、“御山”は神社付近にある小渓を御山谷と称するからこの一帯に、“三船山”は“ミウネ峠”や“ミウネ”の地名が残っているから“三船”がなまって“丹生峯” になったとして小村岳の南側にある山に、“瀧”は丹生川上神社中社の東端にある滝に、“象山”は丹生川上神社中社前にある象の鼻頭に似た地形にと、次々に比定していったのであった。

次に、吉野宮の創建年代については、万葉歌の“神代より芳野の宮に…”から、吉野宮は神武天皇の頃に創祀されたものと考えていた。このため、丹生川上神社は神武天皇以来の聖跡であり、その同地に吉野宮が造営され、後に丹生川上神社となったと考えていたのである。森口は別の論考で、神武天皇が祭祀を行った鳥見の霊畤を小村岳の千畳敷に比定していた。森口にとって、吉野宮は丹生川上神社中社付近にないはずがなかったことだろう。なお、後述する宮滝の発掘で確認されたものについては、当初は寺跡とし、後には吉野郡院の跡であると考えた注28。

一方の中岡は、自ら宮滝の発掘調査を行い、宮滝説の検証を進めた。検証においては、文献史料の精査、『万葉集』でうたわれた地名や景観との妥当性、補助学的省察注29など、様々な観点によっている。

森口の見解に対しては次のように反論した。まず、秋津野についてだが、吉野宮は万葉歌から秋津野につくられたとみられるので、森口のいう秋津野が小村岳山中にあって、吉野宮跡とする丹生川上神社中社が小村岳の麓にあるのは不適切だと指摘した。一方の宮滝説であれば、現在の吉野町御園のあたりに秋戸や下津野といった地名が残っているから矛盾はなく、宮滝説こそ適当であると主張した。また、タキについては、そもそもタキには瀧と瀑の二種類があるのであって、瀧は急瀬を、瀑は飛瀑をそれぞれ指すのだとした。よって、吉野宮に関する瀧は急瀬であるはずとし、丹生川上神社中社にある一小瀑ではありえないとした。さらには、そもそも吉野川の本流は小村付近に発するのではなく、大台ケ原から川上村を経て宮滝に至る流れが本筋のため、丹生川上神社中社は不適切だと反論したのであった。このほか、三船山については森口説が正しいとすると、そもそも丹生川上神社中社からは眺望できないことを指摘し、宮滝であれば無理なく解釈できるとした。

中岡が宮滝説を主張するうえで特に重視したのは、自身が行った宮滝の発掘調査成果であった。これによって、宮滝地内に石敷き遺構や奈良時代の瓦が埋まっていることを確認したのである。調査で出土した土器についても、平城宮跡から出土するものと宮滝から出土するものが形式手法に於いて同じものがあるとして、元正・聖武天皇の行幸とも矛盾がない事

を指摘した。また、中岡によると森口は「*神武天皇檀（橿の誤りか）原に即位されてより、四十三代元明天皇平城に奠都せられたまで、皇居の数四十八カ所、何處に鮮明なる宮址の遺跡を発見せられたか、遺跡を求むる方が無理で、寺院建築と混同した思想である*」（中岡 1928）と指摘したという。これに対して中岡は、飛鳥時代以降の宮跡は唐の都制を導入しており、実際に礎石建物などが続々と発掘されていることを指摘した。そのため、遺構・遺物が出土することは問題ないと返した。中岡は、吉野宮は斉明天皇によって造営されたと考えており、発掘調査で唐の都制につながる遺構を確認したことで、ほとんどの証明はできたと考えていたのではないだろうか。

こうして中岡と森口の論争が続いたことで、奈良の片田舎で起こった吉野宮跡所在地を巡る論争は、奈良県史跡調査會で議論が行われたことで奈良県下で議論される問題となり、全国誌で議論されたことによって、ついには全国の研究者に知れ渡ることとなったのであった。

吉野宮跡所在地論争が知れ渡るようになるにつれて、森口の小川説、中岡の宮滝説のそれぞれに、加担する者が現れはじめた。森口の小川説に加担した研究者としては、豊田八十代があげられる注 30。豊田は東京府青山師範学校・奈良女子高等師範学校の教諭や講師を歴任し、駒澤大学教授を務めた人物である。主に『万葉集』に表れる地名を研究対象とし、現地踏査や地理学的な観点から『万葉集』の研究を進めた。森口と中岡を発端とする吉野宮跡所在地論争においては、雑誌『心の花』で「吉野離宮考」（1928）を発表し、雄略期吉野宮は宮滝の可能性を示唆しつつも、吉野宮の所在地は小川説を主張した。これに対し、中岡が同雑誌で「豊田氏の吉野離宮考を難ず」（1929）を発表すると、改めて「續吉野離宮考」（1929）を発表し、これに反論した。

豊田が森口説を支援した理由の一つには、森口との親交関係があるだろう。豊田の奈良女子高等師範学校講師時代、その同僚の一人が森口であった。二人はともに旅行することもあったという。この影響は氏の著作『大和万葉地理研究』（1927）にも見ることができる。同書の「いめのわだ」の項目には、「*大和国吉野郡丹生川上神社の東丹生の瀧に近く碧潭あり。これなるべきかと森口奈良吉氏はいへり。*」とあるし、また「きさ」の項目では、「*大和国吉野郡にあり。森口奈良吉氏は、丹生川上中社の前を流るゝ渓流を象の小川に当て、象の小川に架したる蟻通橋の東北に聳ゆるを象山とせり*」と紹介している。

一方、中岡の宮滝説に加担した代表的な研究者が、喜田貞吉である。喜田は東京帝国大学講師・教授などを務め、文部

省で国定教科書の編纂にも従事した人物である[注31]。日本民族の形成を研究テーマとし、考古学・歴史学・民俗学などを扱った。法隆寺再建・非再建論争[注32]や古墳年代論争[注33]、ミネルヴァ論争[注34]などに関与したほか、部落問題や日本原住民などに関係する論考を発表したことで知られる。喜田が宮滝説をとるようになったきっかけは、木村一郎の訪問であったという。先にも述べたが、木村とは明治年間に宮滝遺跡の踏査を行い、宮滝説をとった人物である。論争をきっかけに中岡が宮滝で発掘を始めると、雑誌『東北文化研究』に連載していた「学窓日誌」にて「*持統天皇以後の吉野宮が宮滝の地であることは、地形や、地名や、和歌などから判断して、今度の遺跡の発見がなくとも、旧説動かないものだとは自分のかねて信じているところだった*」（喜田 1928a）と宮滝説の立場を表明する。一方の森口に対しては、「*地名や古歌はある程度までなんとでも故事付けられるが、この活きた遺跡についてはなんとか説明がなければならぬ。そこで森口君は吉野郡院を古書から見付け出して、この遺跡はそれだと主張される。（中略）宮滝は郡院にはならぬ。郡院はやはり後の郡衙の地たる上市あたりで、宮滝が依然離宮址たることは動かぬ。*」（喜田 1928c）と手厳しい見解を示されている。

宮滝説にはもう一人、中岡を後押ししした人物がいた。辰巳利文である[注35]。辰巳は県内小学校の教職に従事した人物だが、歌人佐々木信綱に師事して歌人としても活躍したほか、古美術・民俗・『万葉集』などの研究を進め、雑誌『奈良文化』を創刊するなど、多方面に活躍した人物である。辰巳の『万葉集』研究におけるスタンスの一つは、地理的研究の重視であったという。実地見聞を特に重視して、『万葉集』の歌の詠まれた契機を明らかにしようとした。

森口と中岡による吉野宮跡所在地論争が始まる以前から、辰巳は宮滝説をとっていた。論争開始後、森口を支持する豊田の説にふれた辰巳は、「この説、あたかも畝傍山を飛鳥に求め、天香久山を奈良に求むるの愚かなるが如く、笑止千万なり。眼光あるものの言ふべき辞にあらざるべし」（辰巳 1929b）と酷評。小川説を否定した。そのほか、澤瀉久孝や山本源次郎らの論考を、自身の『奈良文化』に掲載し、宮滝説を支援した。

ⅱ．吉野宮跡所在地論争の様相

中岡清一や豊田八十代の論考タイトルや辰巳の言動にみるように、昭和初期に発表された吉野宮跡所在地を巡る議論・論考では、特定の相手を非難したり、誹謗ともとれるほどの強い言葉を投げかけたりと、非常に激しい言葉の応酬がなされたという特徴がある。明治・大正年間

のそれとはまったくと言ってよいほど趣が異なり、まさに論“争”の呈をなしている。例えば、森口が「*徒に凡てを無視して河川の秀美即離宮址なりと曲解する人達の反省を希望する*」（森口 1928）と述べれば、中岡は「*森口氏の近説吉野離宮考を見るに、吉野の宮の位置決定の礎ともいふべき、瀧、瀧の河内、吉野川、秋津の野辺、川上の小野、三船山、象山、象の小川等すべて附會に非ずんば、無理独断と申すより他はない*」として、「*私は思ふ森口の如き聡明と博識を以て何故に宮滝の研究に一歩を進め、彼此相比較し、虚心坦懐茲に確乎たる考證を樹立せられ、後人の為にはた縣下史蹟発揚の為に、誤りなからしめざることに努力せざるかを悲しむものである。*」（中岡 1928）と返す。すると、豊田が「*予は万葉地理に深い興味を有するところから、その真相を明らかにせんがため、二回まで実地踏査を試み、萬葉時代の吉野離宮が丹生川上に在ったことを確かめ、初見を公にした。それにも拘はらず、今尚疑を懐いてをられる人があるやうであるから、更にここに詳説することにする。*」（豊田 1928）と言い返す、といった具合であった。

それぞれの主張するところはすでに記したので、ここで、論争の争点を整理しておこう。この時期における吉野宮跡所在地論争の争点は次の三つであった。即ち、『万葉集』に表れる地名の比定方法、『万葉集』の解釈、宮滝発掘成果の解釈である。これらについては、従来から議論されていたものも含まれるが、この論争によって議論が深まった部分もあった。

地名の比定方法については、従来は史料に頼った議論となることが多かった。しかし、吉野宮跡所在地論争の頃には、実際に現地を訪れて吟味するという方法がとられるようになっており、議論がより現実的になったという点で注目される。

ただし、その分主観の入り込む余地が増えるという問題が生じた。結果、議論全体を眺めると、論者同士でどの景色が最も万葉歌にふさわしいと感じるかを揉めた印象がぬぐえない。また、小村の“ニフネ”や宮滝の“アキド”のように、似た地名探しに終始したり、小牟漏岳が付近にあるのかないのかといった議論に終始したため、それ以上の議論の発展に繋がらなかったことは誠に惜しまれる。

『万葉集』の解釈についても、地名の比定方法と共通する問題点がある。しかも、吉野宮跡所在地論争に限れば、森口のいう吉野宮と中岡のいう吉野宮は意味するところが異なっていた。その解釈に差異がでたのは無理なからぬことであった。森口のいう吉野宮とは、神武天皇から聖武天皇まで続いたものであり、中岡のいう吉野宮とは、斉明天皇から聖武天皇までのものを指していた。この根本の解釈が異なる状態のところに、丹生信仰

との結びつきや万葉地理に係る問題などをそれぞれが付与したため、論点が多様化し、問題点がぼやけてしまった。

最後に宮滝発掘成果の評価についてである。これも前者と同じく、最終的には吉野宮をどのようなものと捉えるのか、印象論に集中した部分がある。この時点では宮跡に関する考古資料の蓄積が乏しかったため、無理なからぬ話かもしれない。ただし、発掘調査を実施した上で、その成果を積極的に評価していこうとする姿勢は先進的で、歴史研究における考古資料の重要性が認識されたという意味では評価すべきである。

このように、吉野宮跡所在地論争は従来の吉野宮跡所在地研究よりも論点が増え、また深化したという点で評価できる一方、双方の解釈の違いに議論が集中し、その違いが明白になるだけで終わってしまった点は遺憾である。双方がどれだけ根拠をそろえて議論をしようと、そもそもそれぞれが想定しているものが異なれば、話が平行線になるのも無理はない。大正期以前よりは一歩進んで議論がなされるようになったものの、問題解決への方向性は見つけられなかったのである。

ただし、吉野宮跡所在地論争そのものは平行線をたどったものの、中岡と森口の論争が燃え上がったことで少し違った場所に余波が届いた。このことがきっかけの一つとなり、事態は次の段階へと進むこととなる。宮滝の遺跡としての価値が評価され、奈良県によって、宮滝の発掘調査が行われることになったのである。

ⅲ．吉野宮跡所在地論争の展開と発掘

奈良県による宮滝の発掘調査は、まず試掘調査から始まった。報文がないため明らかでないが、昭和４（1929）年～5（1930）年にかけて、中岡の協力を得ながら、奈良県技師の岸熊吉が宮滝地内の試掘を行い、埋蔵されている石敷き遺構の分布概要を把握したらしい。同じ頃、宮滝地内に住む住民の畑から弥生土器が出土し、このことも奈良県に報告が届いた。こうした経過を経て、昭和５(1930)年 10 月、末永雅雄が浜田耕作らとともに現地を踏査し、その後、第１次宮滝遺跡発掘調査が開始されたのである。

第１次発掘調査では、宮滝のほぼ全域にわたってメスが入れられた。石敷き遺構が確認された場所を重点的に、それ以外の場所にはトレンチが設けられた。ただし、いくら山間の集落であるとはいえ、宮滝はかなりの広さがある。発掘調査は昭和５（1930）年～昭和 13（1938）年まで続き、その成果は逐一、末永によって公表された。ただし、その公表される成果は宮滝説の立場によったものではなく、また、小川説によったものでもなかった。むしろ、既知の遺構である石敷等の吉野宮所在地に関連するような情報

よりも、吉野宮造営以前にあたる縄文・弥生時代の成果報告に、同等かそれ以上の分量が割かれたのであった（末永 1932、同 1934、同 1935）。

なぜ末永は縄文・弥生時代の成果を重視したのだろうか。それにはいくつかの理由があると思われる。一つは、発掘調査着手前に行った現地踏査の際、浜田が末永に縄文・弥生時代の遺物の存在を重視するよう助言したことである。浜田は末永の師であったから、当然その発言は重く受け止められただろう（末永 1944）。

またもう一つには、当時の学界の動向が挙げられるだろう。これを説明するには、まず昭和初期頃の歴史観というものに触れる必要がある注 36。

今でこそ、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代…と時代が変化していく事が一般常識となっている。そして、縄文時代から我々の祖先にあたる人々が既に住んでいて、縄文時代末～弥生時代初頭に朝鮮半島または中国大陸から人々が渡来して農耕を伝え、古墳時代も継続して渡来系の技術を受容し、飛鳥時代を迎えるという流れが明らかになっている。しかし、昭和初期頃は、今日の歴史観とはまた異なる時代であった。

当時、日本の歴史はすべて『記』『紀』によっていた。そしてこれに基づき、日本にはもともと先住民族が住んでいたのだが、我々の先祖である天孫民族が彼らを追いやり、今の日本をつくった、と考えられていたのである。ここでいう先住民族の時代が縄文時代で、天孫民族の時代が古墳時代（または後に弥生時代）から始まるとされていた。明治年間には、先住民族がはたしてアイヌであるのかコロポックルであるのか、という論争まで起こった（アイヌ・コロポックル論争）。

この歴史観に“待った”をかけ始めるのが、大正～昭和初期である。その前提の一つとなったのが、明治年間に縄文土器と古墳時代の土器・土師器の両方の特徴をもつ弥生土器の確認であった。この土器の解釈をめぐっては、しばらく議論が続くことになる。その後、土器の形状や文様の変化は、民族によるものか時代差によるものかという論争が、大正 6（1917）年から大正 8（1919）年に喜田貞吉と浜田耕作の間で起こった。また、縄文土器の形状や文様が時間の流れと共に変化していくのではないか、という研究が大正 13（1924）年頃から始まる。このことから派生して、東北地方の縄文時代の終わりは、他の地域と同タイミングであったか異なっていた（中世頃）か、という論争が昭和 12（1937）年に起こる（ミネルヴァ論争）。さらには、弥生土器の研究を経て弥生時代という時代が認識されるようになり、同時代に稲作がおこなわれていたと認識され始めたのが 1920 年代、実態が解明されるのが昭

和 12（1937）年である。以上みてきたように、当時の学会の動態からみれば縄文・弥生時代の実態解明は全国的に期待されていた案件であった。

他にも理由はあろうが、以上の状況を勘案すれば、末永が縄文・弥生時代の遺物・遺構を重視したのも無理なからぬことであろう。そして実際に末永の調査によって、後に近畿地方の縄文時代後期末の標識となる宮滝式が確認されたし、近畿地方で初めて弥生土器を転用した棺なども確認されたのであった。宮滝の発掘調査は、吉野宮跡所在地論争の陰で、このような考古学研究にも少なからぬ影響を与えていたのである。いわんや、奈良の郷土史を考えるうえでも重要な意味があった。かくして、末永の宮滝遺跡調査概報に対する姿勢は、宮滝遺跡の発掘調査報告書である『宮滝の遺跡』（1944）が刊行されるまで貫かれたのである。

iv．宮滝遺跡第 1 次調査の外側で

末永が調査を続ける間も論争は続き、中岡・森口とも自身の研究を発表している。ただし、発表した媒体がこれまでのように雑誌等だけでなく、単行本が増えた点は注目される。それぞれの研究が一つの到達点に達し、内容をまとめる段階にかかったことを意味しよう。

中岡は、吉野山同窓会で作成していた『吉野名所誌（改訂 13 版）』（1929）で宮滝説を紹介する項目を設けている。また、中岡が吉野宮とともに研究対象としていたものに、南北朝時代前後の吉野山というのがある。これら中岡の長年の研究成果は昭和 12（1937）年に 1 冊にまとめあげられ、『大塔宮之吉野城（おおとうのみやのよしのじょう）』として刊行されている。

また、森口は丹生川上神社および吉野宮が神武天皇の聖跡に由来するとの考えをもっていた。このため、丹生川上神社の研究によって蟻通神社を丹生川上神社中社とした後は、吉野宮研究および、神武天皇が橿原市で初代天皇に即位された折に大嘗祭を行った場所“鳥見の霊畤”についても研究を進めていた。これらの研究をまとめあげ、著書『鳥見霊畤考・吉野離宮考』（1929）を刊行されている。

それぞれの著作をみるに、主張する内容や根拠とするものが深まってはいるものの、おおむね主張に変更はない。ただし、既発表の論考に対する反論を受けるなどして、いくつか言及する内容に追加がみられる。ここではその例として、森口の論考に対して出された反論とそれに対する回答をみてみよう。

例えば、壬申の乱の行程からみた反論である。壬申の乱で大海人皇子は吉野宮を出発して津振に出たという。津振は現在、吉野町津風呂に比定されているが、小村を出発して不破の関を目指したのであれば、津風呂を通らないではないかと

いう指摘がでた。これに対して森口は、吉野宮を発った後に就いたのは津振ではなく津振川であるとし、津振（津風呂）川は津風呂を流れる川であって、その上流でも下流でも構わないとした。そして、津風呂川上流の現在の吉野町三茶屋あたりを通れば問題はないと指摘した。

その他の追加された内容としては、持統天皇の度重なる行幸についてである。このことについて、持統天皇は請雨祈晴による五穀豊穣を願うために吉野宮を訪れたと考え、その行先は水の神を祀る丹生川上神社の所在地以外考えられないとした。また、宮滝説ではないと主張する根拠として、吉野にいたという国栖部とよばれた人々を挙げ、宮滝は吉野ではなく国栖の国であったとした。後にはその地名から、吉野町国栖から大淀町越部の範囲が国栖部の地域だったとし、その範疇に含まれる宮滝は国栖の地域であるので、吉野ではない宮滝に吉野宮が置かれるわけではない、と主張するようになる（森口 1929、森口 1966）。

このように中岡と森口の論争が続く中で、他にも様々な論者が吉野宮所在地に係る書籍や論考を発表している。遺漏は承知で論者の名をあげると、国学者・国文学者の山田孝雄、柳田國男の弟にして言語学者・民俗学者の松岡静雄、国文学者・歴史学者の大井重二郎、国文学者の鴻巣盛廣や武田裕吉、歌人の斉藤茂吉、ジャーナリストの熊田葦城などである。また、吉野宮跡所在地論争が始まる以前より宮滝説をとってきた澤瀉久孝もまた、この時期に改めて宮滝説を発表された。その顔触れを見ると、実に様々な分野の方が吉野宮跡所在地論争に関心を示していたことが伺える。なお、このうち大半の論者は宮滝説であった。森口の反論がある中でも、大勢としては宮滝説が優勢の様相を示していたようである。

余談ではあるが、この時期に『吉野川上村史』（1941）を著した福島宗緒は、同書内で『大和志料』などを引用して小川説を説いている。このことが特に大きな影響を与える事は無かったが、吉野宮跡所在地論争が起こる以前、宮滝と共に有力候補地であった小川説もまた、吉野宮跡所在地論争の影で主張されていたことは忘れてはならないだろう。

さて、このように加熱し続ける吉野宮跡所在地論争であったが、各論者に対して冷静さを求める研究者もいた。原本を確認できていないため、昭和４（1929）年の森口論文から孫引きする事をご容赦頂きたいが、奈良女子高等師範学校教授の岩城準太郎が次のように記している。

宮址で古瓦を発掘したとか伝えられて宮滝指示の人々を喜ばせていましたが、これが為格別宮滝説が有力になったとは思われません。それよりも万葉歌人の足跡を証拠立てるべき有力な資料を提供し

て欲しいものだと思います。私共は宮滝にしても小川にしても萬葉集の遺跡として的確な説明を新しい研究家に待望します。

繰り返しになるが、この時期は飛鳥～奈良時代の宮がどのようなものか、まだ明確になっていなかった時期である。発掘調査も全国的にほとんど行われていない時期であった、そのため、岩城が宮滝遺跡の発掘調査成果を十分に評価できなかったことは仕方がない。しかし、宮滝説にせよ小川説にせよ、それぞれが主張している意見が未だ決定的でないと岩城が感じていたことは重要である。中岡にせよ森口にせよ、自身の信じる吉野宮跡所在地こそ真実で、異見は認めないとの立場から論を組み立てていた節が感じられる。結果、互いの『万葉集』や『記』『紀』にある記述の解釈の仕方を指摘しあうも、稿を違えて主張する内容はおおよそ変わらず、あたかも反論するための反論とでもいうべき状態になっていた感は否めない。論争を外側から見ていた研究者の中には、同様の感想を抱いていた者も少なくなかったのかもしれない。

また、宮滝説の強い追い風であった宮滝遺跡の発掘調査でも、宮滝説を確定させるような最終的な決め手には欠ける部分があった。中岡の調査で明らかになった宮滝の地下に眠る石敷き遺構が、末永の調査によって奈良時代のものであることが明らかとなり、飛鳥時代の吉野宮跡そのものではないことが確認されたのだ。これは、石敷き遺構に隣接して設けられていた石組み溝の中に、奈良時代の瓦が埋もれていたことなどに因る。このため、双方それぞれに都合の良い解釈の余地が生まれることとなり、奈良時代の吉野離宮跡があるなら宮滝のどこかに飛鳥時代の離宮跡があったはずだとみる見解と、奈良時代の石敷き遺構は寺院跡や吉野監などの跡で宮跡ではないとする見解と、二つの解釈が生み出されたのである。

結果だけをみれば、発掘調査が行われたことで、遺跡としての宮滝の重要性は論争開始時よりもさらに増すことになった。ただし、吉野宮跡所在地論争に限って宮滝遺跡の発掘調査を評価すると、飛鳥時代の遺構等が確認されず、さらには調査担当者であった末永が吉野宮跡所在地に関する見解を明言せずに終わったため、あらゆる立場の者にとって肩透かしの結果となった。このため、奈良県の発掘調査でも吉野宮跡所在地論争を鎮静化させる特効薬とはならなかった。

６．なおも炎は揺らめいて

ｉ．発掘調査後の宮滝説と小川説

『宮滝の遺跡』刊行後になると、吉野宮跡所在地論争はやや違う展開を見せ始める。特にこれまでと大きく変わるのが、中岡清一の論考発表がなくなることであ

る。『大塔宮之吉野城』（1937）刊行後、中岡が発表した論考は把握できた限りで3本に過ぎない。その3本の内、1本は教育にまつわるもので、残り2本は南朝吉野宮に関するものである。『大塔宮之吉野城』が刊行されたことによって南北朝時代研究家としての注目が集まった事と自身の職とにより、吉野宮研究に割ける時間が減ったのだろうか。想像の域をでないが、『大塔宮之吉野城』という大著を刊行したことで、中岡の中にある種の区切りが芽生えたのかもしれない。昭和17（1942）年に発表した論考を最後に、研究者としての中岡の姿は窺えなくなる。

宮滝説をけん引してきた中岡の論考がなくなったからといって、宮滝説の勢いが弱まることはなかった。主張の度合は個々人で異なるが、引き続き、山田孝雄、大井重二郎、武田裕吉、澤瀉久孝らの研究があったし、その他にも、辰巳利文の師である佐佐木信綱をはじめ、国文学者の犬養孝、北島葭江、猪股静彌、歌人の前登志雄、歴史学者の直木孝次郎らが宮滝説をとっている。さらには、小川説に反論した岸田定雄や大口善信などもいた。

一方で、小川説をとった者たちはどうだったのだろうか。実は、『宮滝の遺跡』刊行以後も、森口奈良吉は精力的に活動を続けていた[注37]。筆者が把握できた限り、森口は昭和28（1953）年から昭和41（1966）年の間で、小川説を主張する文章・研究を7本発表している。この7本の中には再掲のものが含まれるが、この“7”という数を多いととるべきだろうか、少ないととるべきだろうか。実は、昭和28（1953）年～和41（1966）年というのは、森口が78歳～91歳の事である。年齢を考慮すれば、7本の論考を発表したことは、十分精力的な活動であったと評価してよい。その著作の中には、宮滝の対岸にある三船山が、本来二井の峰と呼ばれていたと記されるなど、自説を補強する根拠資料の収集にも余念がなかったようだ。（森口 1966）

また、森口は研究だけでなく、小川説の対象地である丹生川上神社中社の顕彰にも努めた。昭和30（1955）年には県議会議員の紹介で「吉野離宮特別史蹟に指定願書」を提出しているし、その他署名活動なども行っている。結果として丹生川上神社中社が史跡指定を受けることはなかったが、昭和41（1966）年には吉野離宮址顕彰碑が丹生川上神社中社境内に設けられ、森口の小川説が後世まで伝えられることとなった。その他にも、とあるTV番組で宮滝説を紹介した講師に対して「なぜ宮滝説を紹介したのか」尋ねる旨の質問を送付するなどしており（森口 1965）、研究発表以外にも様々な機会・方法を活かした活動を続けていた。

森口の他に小川説をとったものとしては、文芸評論家・保田與重郎の「吉野離

宮の濫觴」（1971）、同じく文芸評論家・山本健吉の『大和山河抄』（1962）、大和史跡研究会発行の『史跡と古美術 大和巡礼』（1955）などがある。しかし、宮滝説の発表と比べると、小川説を支持者が少ない感はどうしても否めなかった。

昭和 43（1968）年に森口が亡くなると、「大伴卿の吉野の歌について　吉野離宮を考える」（1984）を発表した栢木善一のように小川説を支持する者こそいるものの、新たに研究がなされることが乏しくなっていく。結果として、中岡と森口が始めた吉野宮跡所在地論争は、その結論を学会に示せぬまま、森口の死によって終わりを迎えることになった。

ⅱ．大滝説へのまなざしと新説の登場

実質的に昭和 40 年代に終焉を迎える事となった吉野宮跡所在地論争だが、これで吉野宮跡所在地研究が終わった訳ではない。むしろ、吉野宮跡所在地論争が終わりに近づくにつれて、その議論の対象はさらに広がっていったのである。

まず、吉野宮跡所在地論争以前に盛んであった大滝説が再び注目されるようになった。昭和 16（1941）年に収録された「万葉集巻三輪講第七回」において、かつて宮滝説を支持していた折口信夫が次のような発言をしている。

只今の宮瀧といふ所が吉野の宮址と言はれていて、これが大体動かないものと仮に見て、その宮滝から南に今の吉野の町を越えて行く所を十町ほど入った所に喜佐谷といふ所があって、これが象の小河のあった所だ（中略）といふことになって居ますが、これは信ずることが出来ません。恐らく此は、歌から後に出来た地名だと思ひます。（中略）私は只今まで宮滝を吉野宮址として、大体信じていたんですけれども、段々少しづつ考へが変わって来ました。（中略）亡くなった豊田八十代さん、生きていらっしゃる森口奈良吉さんなどの言はれる吉野宮址と象の小河、夢の回淵の地の指定には、まだ賛成しきらないのですが、その影響は多少受けて変って来たのかも知れません。ただ今丹生川上の上社といふ社がある、その川筋に吉野宮址があったのではないか。従って、象の小河もそっちへ行くのではないかと思っています（後略）

折口が宮滝説から大滝説に改めたことは、後進の研究者や歌人たちに影響を与えた。折口に師事した万葉研究者・堀内民一は折口の見解を引用し、『大和万葉旅行』（1964）で次のように述べている。

丹生信仰を中心にして、持統天皇の行幸を考えるのが至当だから、丹生川上中社か上社のあたりに吉野離宮址を考えるべきであろう。私は、川上上社を吉野離宮の奥宮と考え、蜻蛉瀧の周辺地を秋津野として、その大滝付近に離宮址を想定するのである。

こうして、再び大滝説が注目されるようになったのである。

また、吉野宮跡所在地論争終了後には新しい説も現れた。六田・比曽説である。六田説は土屋文明が主張したものである（土屋 1959）。『扶桑略記』や『菅家御記』にみる昌泰元（898）年の吉野行幸記事の解釈から、宮滝以外にも滝と称する場所があったとし、その滝を大淀町六田付近の急流あたりに想定した。そして、同書に記されている吉野郡院は下市付近としたのであった。この考察から時代を遡って、六田付近の「滝」を古代の吉野の滝の河内に比定し、宮滝は古代の大滝にあたると考えたのである。そして、吉野宮跡は六田か下市のあたりと考えたのである。なお、宮滝遺跡の遺構は離宮跡ではなく、大滝寺跡とした。

また、土屋が『続万葉紀行』（1946）で記したのが比曽説である。同書で大海人皇子が入られたのはここかと記す。その後、安井良三の「古代寺院と氏」（1971）や三浦昇『敵見たる虎か吼ゆると』（1976）などで大海人皇子が吉野入りした場所は比曽寺ではないか述べられた。

かくして、論者の不在によって終わりを迎えた吉野宮跡所在地論争であったが、その所在地を求める研究者たちの火は決して消えることなく、さらに多くの研究者をまきこんで研究が続けられていった。この時期の吉野宮跡所在地研究は、論争といえるほど激しくならなかったものの、静かに、そして徐々に、その議論の対象を増やしていった。また、この頃は関係する各町村から町史や村史が刊行されており、各町村の主張が垣間見れて興味深い[注38]。なお、このころまでの議論の経過は犬養孝の「吉野離宮の所在地」（1969）や奥野健治の『大和志考決』（1986）などでも簡潔にまとめられている。

ⅲ．宮滝遺跡第２次調査の開始

吉野宮跡所在地論争に影響を与えた末永による宮滝遺跡発掘調査が昭和 13（1938）年に終わって以降、宮滝遺跡の発掘調査は長らく行われなかった。しかし、昭和 50（1975）年に行われた中荘幼稚園の新築に伴う事前調査をきっかけに、奈良県立橿原考古学研究所によって、宮滝遺跡の範囲確認等を目的とした発掘調査が再び行われるようになる。それぞれの調査面積は小規模なものが多く、個々の調査で末永の調査のように劇的な知見が得られることはなかったが、調査を積み重ねることによって、宮滝遺跡の新たな事実が明らかになってきた。この成果が、吉野宮跡所在地にまつわる議論に引用・参照されるようになっていくので、ここでは末永雅雄の調査を第１次俊、昭和 50（1975）年に前園實知雄によって行われた調査を第２次調査として、第２ 次調査開始以降、昭和後期までの間に

行われた発掘調査概要を表１にまとめる。

この時期の発掘調査で特に注目されるのは、末永の発掘調査で明確に確認されなかった飛鳥時代の遺物・遺構が確認されたことである。特に、11 次・20 次調査で確認された池状遺構は、後に飛鳥時代の池状遺構であることが確認されるものになる。前園らの発掘調査によって、着実に宮滝に関する考古学的な資料・知見が蓄積されていくのであった。

昭和 50（1975）年の第 2 次調査開始以降、宮滝遺跡と長く関わりをもつことになったのが、先ほどから述べている前園實知雄である。この宮滝との関わりから、宮滝遺跡第 1 次調査発掘調査の報告書である『宮滝の遺跡』の増補版『増補宮滝の遺跡』が刊行されることとなった際、前園は同書の増補部分である第 2 次調査以降の記述を任されるなどしている。さらには、宮滝遺跡の調査研究を以後精力的に進められたのである。

7．ある研究者の付き合い方

ｉ．慎重な態度

ここまで、吉野宮跡所在地研究について、宮滝遺跡発掘調査以降の研究を追いかけてきた。中岡と森口による論争の軌跡と、その論争の前後に吉野宮跡所在地を研究してきた先学たちの紹介を通じて、おおよそ平成以前になされてきた吉野宮跡所在地研究および論争の様相をつかんでいただけたと思う。ただし、ここまであえて取り上げてこなかった研究者がいる。末永雅雄である。

発掘調査直後から、吉野宮跡所在地論争から距離をとるように、末永は自身が吉野宮跡所在地をどこに考えているのか、その見解を述べてこなかった。「*ただことさらに宮滝の離宮址問題を紛糾させるようなことは避けなければならぬと思うので、出来るだけ慎重なるべきことは自覚している。*」（末永 1935）と本人も述べているように、調査担当者の意見が吉野宮跡所在地論争でむやみに取り上げられることのないよう、慎重な姿勢をとり続けたのである。

末永が宮滝遺跡調査中に中間報告として発表した文章では、いずれも特定の時代に偏りすぎないように、むしろ縄文時代や弥生時代の情報を多めに出されていることは、先に述べた通りである。この姿勢は、宮滝遺跡調査後に発表された報告書『宮滝の遺跡』でも貫かれている。ただし、調査報告書という以上、まとめ等で“吉野宮跡”について言及せざるを得ない部分がでてくる。そこでは、宮滝説をとる者にも小川説をとる者にも非常に配慮をし、次のように記されている。

最後に我が宮滝の調査に於いて吉野離宮との問題を看過することができない。既に触れる所があったように、宮滝を以て吉野離宮の遺址なりとするにはなほ幾

多考慮の余地がある。今日まで調査し来った経過よりすれば何等直接断定の資料に接しなかった。しかしながら直接の示唆を得なかったことは、直ちに宮滝の吉野離宮址説を否定に導くものではない。むしろ石器時代以来の遺構遺物の現存することは、云ふまでもなくこの地に悠遠な年代に互って育まれ来った文化の存続を実証するものである。

なお、ここで末永が言う“断定の資料”とは、例えば“吉野宮”と書かれた木簡など、誰が見ても明らかにここが“吉野宮”であったことが分かる資料を指していたと思われる。当時は飛鳥京跡などの発掘調査がなされておらず、宮跡とはどのような遺跡であるのか、不明な部分が多かった。さらには飛鳥時代と奈良時代の遺物の差異も明確に判別できておらず、直接断定の証拠を見つけることは、むしろ非常に困難であったと思われる。

話を戻そう。末永の吉野宮に対する慎重な姿勢は、いつまで続いたのだろうか。晩年まで末永は、たびたび宮滝遺跡に関する文章を発表している。古いものから順に紐解くこととしよう。

『宮滝の遺跡』刊行後、次に末永が宮滝の事を記したのは昭和 26（1951）年刊行の『青陵』である。『青陵』5 号と 6 号に「宮滝【上】」「宮滝【下】」と題する文章を掲載している。この時点においても、やはり末永は慎重な姿勢を崩さない。「*吉野離宮の名は続日本紀の大宝元年（持統）に見える。宮瀧の文化はこれらの飛鳥時代をはるかに越した石器時代に初まるのであるから、若し宮瀧の吉野離宮跡説を支持するなら別に時代的な誤りはなものと云える*」（末永 1951a）「*宮滝が吉野離宮跡であるか否かについてはなお今後の研究に俟つて自ら帰結するところにしたがうとして、さらに古い時代の文化的様相をかんたんに記して研究者の観察に備える*」（末永 1951b）として、縄文・弥生時代の記述を始めている。『青陵』の 8 年後、吉野史談会が機関紙『吉野風土記』12 号で行ったアンケート調査には「*吉野離宮の推定は小生宮滝遺跡の調査担当以来軽率な主規的判断に陥らぬようますます慎重を期しております。*」と回答。昭和 38（1963）年に同紙が掲載した「宮滝調査の回想」では、宮滝の住人とのふれあいや、在りし日の宮滝周辺の景色を懐古するにとどめている（末永 1963）。調査後 20 年を経てなお、慎重な姿勢をとり続けた様子が察せられる。

ⅱ．軟化

1960 年代後半になると、この末永の姿勢が徐々に軟化しはじめる。昭和 43（1968）年に刊行された『考古学の窓』では、宮滝遺跡および吉野宮跡について次のように記している（末永 1968）。

私は直接の調査者として何か意見を求

められれば、断定はできないが、その推定を全面的に否定することはできない。それよりも宮滝の吉野離宮址として支持する可能性を、遺構の上からはかえって、弱いかも知れないが、文献の判断では、むしろ積極的に支持されるものがあると考えている。

これまで宮滝説をにおわせる発言すら控えていた末永であったが、これ以降徐々に、かつ非常に消極的にではあるが、宮滝説を推す様子が文章の節々に感じられるようになる。

昭和 46（1971）年には、昭和 35（1960）年来進められてきた飛鳥京跡発掘調査の報告書が刊行される。この報告書によって、飛鳥京では石敷き遺構や石組み溝などが検出されたことが広く知られるようになった。同書において末永は、「壬申の乱」や「飛鳥と宮滝」という節を設け、「*（宮滝は）考古学徒としての生涯の中で深く印象に残る調査であったのが、再び飛鳥との関係で四十年の昔を顧みることになるのもまた奇縁といえよう。*」として、飛鳥の調査からみた宮滝遺跡についての見解を記している。そして、「*大海人皇子は（中略）二十日に吉野に到着であるが、『書紀』にはその場所の記載がない。しかしここが古典に記す吉野宮であり、その所在は現在の吉野町宮滝であろうとする推測が学会に多い。私も宮滝の調査担当者として今日までの資料からこの推測が肯定されてよいと考えている*」「*四十年の後に飛鳥京跡によって得た見解から宮滝の吉野離宮推定への接近を示したので、残る六十年の間にだれかが更に前進をさせてくださるかもしれない。*」といった具合に、自身が宮滝説をとっていることを明らかにするのである。この後に刊行された『考古学十二話』（1976）でも、「*吉野宮の位置を宮滝に想定するのがいちばん近いのではないかと思う。*」として、宮滝説を主張している。また、同書内では次のように記し、学会の動向としても宮滝遺跡が吉野宮跡であるとする考えが認められつつあるとした。

宮滝の調査当時にはまだこのことをあまり深く考えることなく、ただ奈良時代ごろの建築遺構と判定する程度であったが、最近飛鳥京跡の調査が進むにつれてだんだん両方の敷石遺構を対照的に見ることができるようになり、現在確証はないが、古典に現れる吉野宮はやはり宮滝ではないかと調査成果の上から、私もこの考えに傾きつつある。学会でも賛同者が増加してきているようである。

続く『奈良県史跡名所天然記念物調査報告第 40 冊 飛鳥京（二）』（1980）では、末永はより踏み込んで私見を発表する。「*（前略）『記紀』をはじめとする応神・雄略・天武・持統・文武・元正各天皇行幸における吉野宮・吉野離宮の所在は宮滝の地と判定したい。*」と明記して文章を

はじめたのである。そして、その文章をこう締めくくった。

ただもう少し宮滝研究を通じて吉野宮への見解を強めるならば、宮滝の地をもってかつての吉野宮の所在地とする私案は、昭和五年から十年近く手掛けてきた調査成果によるもので、宮滝を吉野宮とする見解は文学方面でかなり論じられていることであり、あるいは無批判に想定をする人たちもあるが、考古学的実証に基づく見解は奈良県による発掘調査以外には中岡清一氏を中心とした中荘村役場の試掘程度であり、最近の調査では弥生時代に遡る資料の検出が多く、奈良時代前後の遺構・遺物の種類と量は多くない。及び敷石は河岸に近く、縄文・弥生時代の遺構・遺物はその下層に多いこともほぼ明らかにされてきた。しかしこの点はなお将来の調査でどのような成果を示すかは未知数だが現在私の見解としては永く古典に現れる吉野宮・吉野離宮の所在地を宮滝とすることについて、他の候補地よりも有力であることを提唱したい。かつ考古学的実証を踏まえた点から故なく否定なされるべきではなかろうと思うのである。

その後発表された『近畿古文化の研究』（1984）では、さらに主張が強まる。

宮滝遺跡で敷石と古建築の関係を考えつつあったとき、飛鳥板蓋宮伝承地の調査に入るに及んで広範囲の敷石・掘立柱痕・若干の土器類を検出して宮滝・飛鳥の相互関係を観察することとなった私は、特に宮滝はかつての吉野宮・離宮所在地と見ることの可能性を強く考えさせられた。この問題について現在断定を控えて学会の総意によることを待つこととしているが、調査責任者としての私は吉野宮・離宮跡と断定の見解をもっていることを茲に書き残して置きたい。

また、同書では「吉野宮（離宮）の所在探求」とする項目を設け、「*その当時は断定を控えていたが今日に至る間の各種資（史）料に基づくと、古典に記す吉野宮（離宮）は宮滝にあったと判定することができる。*」（末永 1984）と重ねて記している。さらもこの２年後に刊行された『日本考古学への道』（1986）では次のように記し、宮滝遺跡が吉野宮跡であることを前提にした文章が書かれるまでになっていくのである。

（前略）かつ敷石ではその溝の間に砂礫とともに流積した奈良時代後期の古瓦があったから時代の判定もほぼ見通しがついているが、これを飛鳥京跡の敷石と比較をすればその規模において差が甚だしく貧弱であったが、大海人皇子がここで作戦を練ったとし、髄従者をも収容するだけの建物はあったと考えてよい。

このように昭和 43（1968）年以降の末永の発言を追いかけると、年を経るにつれて宮滝遺跡＝吉野宮跡の主張が強ま

ってきていることが伺えるのである。

ⅲ．末永はなぜ態度を軟化したのだろう

ここまでの経過から判断すると、末永は昭和５（1930）～13（1938）年にかけて行った宮滝遺跡での発掘調査以来、心の中では宮滝説にひかれ続けていたとみてよいのではないだろうか。しかし、自身の研究に対する慎重な姿勢により、宮滝が吉野宮跡であると主張するには、学問的根拠が不十分であること考えていた。そんな中、飛鳥京跡の発掘によって、“石敷き遺構“という飛鳥と宮滝を結ぶつながりが明らかになった。このことを受けて、宮滝遺跡＝吉野宮跡と主張できる考古学的証拠がそろってきた、と考えたように詠むことができる。

もちろん、飛鳥の発掘調査だけで末永が吉野宮跡所在地研究に対する慎重さを弱めたわけではないだろう。おそらく、これには学会の動向も影響している。飛鳥京跡報告書に、同書刊行前後の学会の動向について、自身の感じることを述べている（末永 1971）。

最近は各地でほとんど根拠の握めない遺跡の調査で建築名なり殿堂名を断定的に発表する傾向に対して、いささか抵抗と学問への慎重性をより深く感じながら、やはり時代がこうした環境をつくり出しつつあることに対して、私はまだこの胎土から脱却しえない。調査着手四十年後の現在なお百年川清を俟つに等しいのだろうか。

こうした学会の動向があることもあって、宮滝説を主張する事への抵抗がやや弱まった可能性は考えられよう。

末永が昭和 43（1968）年まで宮滝説を主張しなかった理由について、もう一つ、もしかしてと思うことがある。昭和 43（1968）年という年は、小川説の論者、森口奈良吉が永眠した年なのだ。無論、筆者は森口の死が末永の研究態度を軟化させたとまで言いたいわけではない。本を１冊執筆するのにかかる時間を考えれば、それは邪推しすぎだと思う。ただ、末永にとって、自身が奈良県に着任する以前から活躍していた郷土史家たちの存在は非常に大きかったのではと感じている。それは、自身の調査・研究歴を述懐した『末永雅雄が語る大和発掘物語』（2004）にある発言からも察せられる。

（前略）森口さんはなかったけれども、他の保井芳太郎、島本一、田村吉永らの郷土史家がおった。それらはある意味では連携してワシをおっぽり出せという計画はあった。（中略）肥後和男という男が保井さんの瓦を調べて、保井さんの本の原稿を肥後君がまとめておった。そのときに肥後はワシに、「末永、君は奈良県ではきをつけろ」、「なんだ」と言ったら、「京都から来る末永という若造は、早く県外へ出してしまわんと、どういうことをす

るかわからんと、そういう話だから、どこにマムシがおるかわからんから気をつけろ」とワシに言ったことがあるわ。

こういう話を聞いていた中で、末永は奈良県に着任した。そして、その１年目の奈良県史跡調査會席上で起こったのが、中岡と森口の論争である。しかも、中岡と森口のやりとりは、一回の会議だけで終わらなかった目算が高い。奈良県で自身の居場所を確保するため、末永が郷土史家の挙動に対して慎重にならざるを得なかったとしても、納得できる部分がある。そんな末永にとって、郷土史家の諸先輩方がこの世をどんどんと去っていき、吉野宮跡所在地論争に限れば、小川説最大の主張者であった森口が亡くなった。このことは大きな意味があったのではないかと、筆者は邪推したのである。

筆者がこのように邪推したのには、末永の晩年の態度に対してもったある違和感が原因である。その違和感を覚える原因となった末永の文章を以下に示す。

他の場所は発掘調査をしていないから、地下遺構・遺物のあり方などについては知られていない。これをいますぐに宮滝と比較してみるには、一方は資料不足ということになるから、私はいっそうこの点に慎重であるべきだとかんがえているが他の候補地では、宮滝のように直接資料となるものの地上散布がひじょうに乏しいのは事実である。（末永 1964）

ワシは宮滝の敷石を掘ったとき「君、こんなものは飛鳥にもあるよ」といったもんだから、「ほなら君、案内してくれ」と言って、一部を試掘したところが、今の小学校の北側やった。

ワシらが掘った時に石は出たけど、それから後敷石が、あの辺には広い面積では出ていない。それはそのままですんどった。それから石舞台の調査でよく岡本邸へ夕食を食いにいった。夕食を食いに行って、あるとき庭先に出たら、小さい池がある。橋がかけてある。橋の向こうへ行こうとしたら、水の底にこんな石がずーっと並んで透けて見えるやないか。そのときはまだ宮滝の敷石との関連は考えるときではなかった。岡本邸の主人に「あの池の中に石が並んでいるのは何か」と聞いたんや。そしたら「泉水を掘ろうと思って掘ったら下に石が並んどったので、それを掘り起こさずにそのまま置いてあります」と。

そのときに「なるほどなあ。こういうものがここにもあるのかなあ」と、それでそう思った。（末永 2004）

その時まで慎重に吉野宮跡所在地研究と向き合っていた末永が、宮滝以外の場所がまだ未調査のままなのに、なぜ昭和43（1968）年から態度が軟化したのだろうか。飛鳥京跡で石敷き遺構が確認されたから、だけでは不十分に思う。なぜなら、既に昭和 4（1929）年に中岡が

“当時浄御原宮の跡と考えられていた場所”を発掘し（中岡 1929c）、土中に石敷き遺構が存在することを確認しているからだ。中岡の報告が末永の手元に届かなかった可能性も考えられるが、中岡が奈良県に自身の発掘した情報を報告していないとは考え難く、そうでなくとも、何らかのルートで末永のもとに情報が届いていてもおかしくない。また、末永の発言から、末永自身も飛鳥の地下に石敷き遺構があることは知っていた可能性が伺える。これまでの慎重な姿勢を改めるきっかけとして、飛鳥の発掘調査だけでは説明できないように感じる。こうした疑問に対して、筆者が思いついた回答が上記のとおりである。非礼は重々承知しており、諸賢のご叱正を乞う次第である。

8．静かな炎と新しい風

ｉ．宮滝説、定説化へ

今日、吉野宮跡は宮滝であることが通説となっているが、これが通説となったのは平成初期になって以降である。そして、そのきっかけを与えたのはやはり発掘調査であった。

本稿６章でもふれたが、宮滝遺跡の発掘調査で注目されるのは、園地遺構の確認である。昭和 60（1985）年以前では詳細がよく分からない状態であったが、平成 2（1990）年に行われた 43 次・44 次調査の成果によって、11 次・20 次・43 次・44 次で確認された池状遺構は一連のもので、飛鳥時代前半に掘削された園池遺構であると考えられるようになった。この園池は、飛鳥時代後半に西半分の機能低下が認められるものの、東半分は奈良時代まで存続しており、飛鳥時代における宮滝遺跡の中心的な遺構であったとみられている。

この池は古墳時代の祭祀に関わる導水施設に端を発する飛鳥時代の古代庭園の系譜上に位置するものとみられ（増補吉野町史編集委員会 2004）、この池が確認されたことで吉野宮が宮滝にあったとする見解が定説となっていった。筆者が確認した限り、平成 5（1993）年刊行の『国史大辞典』や平成 6（1994）年刊行の『日本史大辞典』、平成 13（2001）年刊行の『日本歴史大辞典』などでは、「吉野宮」項目の説明に“宮滝遺跡がそれだと考えられている”といった記述がなされている。辞書類で扱われるほどに、宮滝説が定説化したとみて良いのではないだろうか。

また、宮滝説を前提とした論考が書かれるようになるのもこの頃からである。例えば、千田稔の「吉野宮と青根ヶ峯」（1991）や「離宮の地理的立地について」（2003）、和田萃の「古代大和の神々」（1995）などは宮滝になぜ離宮が営まれたのかを考えた論考であるし、小笠原好彦の「古代の離宮・行宮・頓宮の諸問

題」（2003）や相原嘉之の「飛鳥の古代庭園―苑池空間の構造と性格―」（2002）、柏原市教育委員会の『離宮-竹原井頓宮と智識寺南行宮-』（2005）などは遺構から離宮の意味や構造などに迫るものであった。

これらの論考を見ると、昭和末以前までの論考との違いがもう一つ指摘できる。従来の吉野宮研究は、国文学研究者が行う場合が多かった。しかし、ここで挙げた研究者は、歴史地理学者、日本古代史学者、考古学者であって、国文学研究者が不在である。研究の潮流の変化が、この様な点からも指摘できるだろう。

なお余談ではあるが、平成 10（1998）年には、吉野郡内で宮滝遺跡以外の吉野宮跡所在地研究に関連する遺跡が調査された。川上村にある丹生川上神社上社（移転前）境内の遺跡、宮の平遺跡である。即ち、山本健吉らによって奥の院にがあった考えられた場所であった。

発掘調査の結果、宮の平遺跡では、縄文時代の遺跡と平安時代以降連綿と続く神社以降が確認されている。飛鳥時代～奈良時代の遺物・遺構などは検出されず、丹生川上神社上社が小川説でいう奥の院に相当する施設は想定しがたいことが明らかとなった。無論、これで小川説が否定される状態になったわけではない。だが、これまでの議論されてきた未確認案件の一つが、考古学的事実によって検証されたという点は重要と思われる。

ⅱ．万葉研究から壬申の乱研究へ

先に述べたように、昭和末以前と以後では、吉野宮を取り上げる研究方法や研究分野に大きな変化が見られた。この変化は、吉野宮の扱われ方にもみられる。昭和末ごろまでは、犬養孝の「万葉―明日香　吉野のくに―続―」（1985）や奥野健治の『万葉地理研究論集第１巻　大和志考＋地名寸見』（1985）、『万葉地理研究論集第６巻　大和志考決（上）』（1986）などのように、『万葉集』を扱う研究が多かった。

しかし、昭和末頃から徐々にではあるが、壬申の乱の観点から吉野宮を扱う研究が急増する。即ち、壬申の乱のルートを考えるにあたって吉野宮はどこであったのか、あるいは、壬申の乱後に即位された天武天皇や持統天皇はどこに通われたのか、という視点である。例えば、玉城妙子の『壬申に翔ぶ』（1981）、北村稔の「壬申の乱地理新考（一）」（1986）、菅谷文則の「壬申の乱の踏査研究」（1994）、香芝市二上山博物館編の『大海人皇子、吉野を発つ　壬申の乱を旅する』（2004）、倉本一宏の『壬申の乱を歩く』（2007）などが挙げられる。

この潮流のきっかけになったのは、いったい何だったのだろうか。筆者は、そのきっかけの一つに末永雅雄の研究があ

げられるのではと考えている。繰り返しになるが、末永は晩年になって、自身が吉野宮跡所在地を宮滝と考えていることを発表されている。その時、末永が根拠としたものの一つが、壬申の乱の行程であった。少し末永の文章を引用しよう。

大海人皇子が挙兵作戦を練って進出して伊賀の名張に出た『書紀』の記載を総合して、丹生川上・宮滝の出発点を考えると、最初の到着点の地名は津振川（現在の津風呂？）、次に菟田吾城（宇陀？）、大野（古大野）、横沢を経て莉萩野に到って夜が明けたとある。これらの行程は丹生川上を起点とするか宮滝を出発するかについて戦術的に詳しく調べるとどういう答が出るか。私は宮滝の方が可能性が多いと考える。（末永 1968）

この後、菅谷文則や玉城妙子らの研究グループが壬申の乱の道のりを踏査し、宮滝を出発すればほぼ『日本書紀』にある壬申の乱の記述どおりに進める事を明らかしたが、その成果が『壬申に翔ぶ』や「壬申の乱の踏査研究」として発表されることになる。

また、壬申の乱の行程を巡る研究だけでなく、壬申の乱の経過やその実態などについて研究が進められる中で吉野宮所在地に言及する事例も散見されるようになる。椎谷紀芳の『ロマン紀行　壬申の乱』（1992）、西郷信綱の『壬申紀を読む―歴史と文化と言語―』（1993）、山本幸司の『天武の時代　壬申の乱をめぐる歴史と神話』（1995）、星野良作の『壬申の乱の研究の展開』（1997）、倉本一宏の『戦争の日本史２　壬申の乱』（2007）、岡本八重子編の『新説　壬申の乱』（2008）などが挙げられよう。さらには、『大化改新と古代国家誕生―乙巳の変・白村江の戦い・壬申の乱』（2008）や『古代史再検証　持統天皇とは何か』（2016）などの一般向けムック本あるいはビジュアルガイドブックと呼ばれるような雑誌類でも、今日、吉野宮の所在地について扱うようになってきている。

近年刊行の図書で吉野宮を扱ったものは、壬申の乱に関連ばかりではない。例えば、吉野の歴史を紹介した一般書などでも扱われている。河上邦彦の『考古学点描』（1989）、上田正昭編の『吉野―悠久の風景』（1990）、伊達宗泰の『大和・飛鳥考古学散歩』（1996）、松田真一・前園實知雄共編著の『吉野　仙境の歴史』（2004）などが挙げられよう。

これらの論考あるいは刊行物の中には、例えば北村稔の「壬申の乱地理新考（一）」のように、宮滝遺跡が吉野宮ではないとするとするものも幾つか見受けられる。また、壬申の乱を扱ったものではないが、郷土史家の辻井英夫は『吉野川上の古代史』（2014）において宮滝説を否定し、大滝説を主張されている。このような反論はあるものの、大勢は宮滝遺跡を吉野

宮跡とする見解をとっている。

現在、宮滝説を支える根拠は、『万葉集』の故地が周辺に位置していること、吉野宮の一部と考えるに十分な遺構が確認されていること、壬申の乱の行程から判断して妥当だということ、この三点となっている。以上の諸点から、宮滝遺跡が吉野宮であるとする見解が最有力であるとして間違いないだろう。

9．吉野宮をみる視点

ここまで、吉野宮跡所在地を巡る研究史を概観してきた。概観とはいえ、図版等をまじえぬまま、大淀町より指定された紙面を倍近くまで超えている状態であるから、それを伝えるのに必要な文字数の多さ、即ち情報量の多さは否が応でも感じていただけたのではないだろうか。しかも、ここで“概観”と述べた理由は、本稿の冒頭で述べたように、筆者がまだ確認できていない、あるいは確認できない資料があることがすでに分かっているからである。また、各候補地をその時代時代に顕彰されてきた地元の方々の存在や、各地に残る伝承など文献に表れない資料などにも踏み込めていない。個々の論考等の内容にも、踏み込むことができなかった。これらは偏に筆者の実力不足による。可能なかぎり文献は紹介したつもりなので、気になる方は個々の文献に当たっていただければ幸いである。

さて、こうして研究史をみてきて特に思うのは、それぞれの候補地にそれぞれの背景や歴史があり、そして顕彰碑が建てられるなどしていることからもわかるように、それらが地元の方々の誇りとなっているという点である。吉野宮跡所在地について勉強する一学徒として、このことはまずわきまえる必要があると感じる。他の候補地を徒に貶めたり、無暗に新説を乱立したり、根拠のない暴論を振りかざすことは、厳に慎まねばならない。無論、これは学術的な面での話であって、例えば万葉の故地を楽しむ個々人にまで強要すべきことではないことは、これも冒頭に述べた通りである。

最後に、吉野宮跡所在地研究に対する筆者の立場を明らかにしておこう。筆者は宮滝説を支持する立場をとっている。その根拠は、前章の最後に述べた３つの理由と同じである。まだ自説の大半を他説によっているような半端者ではあるが、その点については以後一学徒として研鑽に励みたいと思っている。

もう一言。吉野町ではこうした経過を踏まえ、平成 25（2013）年から宮滝遺跡の整備に着手した。その整備地は、奇しくも中岡や末永、前園が調査した、奈良時代の吉野離宮跡とされる石敷き遺構等が検出される場所である。平成 27（2015）年度には整備事業に伴う試掘調査を実施し、その遺構の範囲確認等を

行った。この時の成果速報は、すでにいくつかの機会で行ってきたところである（中東 2016）。この時確認できた石列や、飛鳥時代・奈良時代の遺物を包含する大型の土坑などの成果をもとに、今年度は改めて発掘調査を行う計画である。その成果は、『吉野歴史資料館だより たぎつみやどころ』（吉野歴史資料館編 2015 ほか）をはじめ、また別の機会にお伝えできればと思う。最後となったが、ご迷惑をおかけした大淀町教育委員会の皆様へのお詫びと、皆様の期待と応援をお願いして、本稿のまとめとしたい。

【注釈】

注１　visit japan with Tokyo Otaku mode（http://otakumode.com/sp/visit_japan）なお、2016 年 10 月 1 日現在､HP は閉鎖されている。

注２　政府観光局とは主要な市場に海外事務所等を設置し、外国人旅行者の誘致を行う政府機関である。専用 HP （http://www.jnto.go.jp/eng/animemap/index.html）で、2016 年 10 月 1 日現在、ジャパンアニメマップが公開されている。

注３　榊原 2009 ほかによる

注４　中岡 1929c 等にも記されている。

注５　桜井ほか編 1990 や宮滝遺跡顕彰会編 1969、瀧音監修 2016、大竹 2007 などで、吉野に伝わる天武天皇関連の伝承が掲載されている。

注６　例えば、森口 1956 などを見ると、現在の奈良日日新聞の前身である奈良新聞などで、吉野宮に関する発表がなされたことが分かるし、森口 1959 などを見れば、手紙でのやり取りがあったことが知れる。また、中岡 1929c などでは講演会で議論がなされたことや、自費出版で研究成果が公表されたことなどもわかる。末永 1944 によれば、山本源次郎の吉野宮に関する考察は手記にまとめられていたという。

注７　詳細は千田 2002 に詳しい

注８　大和タイムズ社編 1971 を参照。

注９　注８に同じ

注 10　足立 1936、大和タイムズ社編 1971 を参照。

注 11　以下、筆者不明 1912、筆者不明 1916 を参照しながら記述を進める。

注 12　可能な限り木村一郎が記した著書を確認したが、その限りでは宮滝に関する記述は見当たらなかった。

注 13　末永 1944 による

注 14　柴橋尋常高等小学校 1937 による

注 15　山本 1897 による

注 16　注１４と同じ。

注 17　注１４と同じ。

注 18　末永 1944 による。

注 19　澤瀉 1923 による。

注 20　吉野山小学校開講百年史記念事業実行委員会編 1986、吉野叢書刊行會 1937、中岡 1929c、鞆谷 2014「戦前の奈良県における学校図書館」『情報学』11 巻 1 号などによる。なお、視学とは、もと教育に関することを視察・監督・指導した官職で、職務の多くは現在、指導主事に引き継がれている。

注 21　吉野山小学校開講百年史記念事業実行委

員会編 1986 による。

注 22　吉野叢書刊行會 1937 による。

注 23　以下、森口の経歴等は葭田 1975 による。なお、森口の委員就任時期は奈良縣 1919 による。

注 24　森口 1956 による。なお、奈良新聞とは奈良日日新聞の前身で、現在の奈良新聞とは異なる。本稿中の奈良新聞は、以下同様のものとする。

注 25　大正 2（1913）年の奈良県丁訓第 53 号で設定された。その第 1 条には、「史跡勝地調査會ハ知事ノ命ヲ承ケ史蹟名勝地及テ年記念物等ニ關スル事項ヲ審査シ又ハ其ノ諮問ニ應ジ意見ヲ開申ス」と委員会の活動を規定している。昭和 25（1950）年に文化財保護法が施行されたことで同委員会は自然消滅となり、その役割は昭和 13（1938）年から活動を続けていた橿原考古学研究所に引き継がれることとなった（大和タイムズ社編 1971）。

注 26　森口は奈良縣 1919 等によって奈良県史跡調査会の委員であったことが確認できた。しかし、中岡は昭和 2 年当時、委員であったかどうかを確認することができなかったので、末永 2004 によって一般参加者とした。なお、末永は中岡・森口はともに委員ではなかったと述懐されている。

注 27　中岡 1937、末永 2004 などによる。

注 28　中岡 1928、森口 1928 などによる。

注 29　今日でいう考古学的検証のこと

注 30　以下豊田の経歴等は井ノ口 2006 による。

注 31　以下、喜田の経歴等については勅使河原 1995 と上田 1928 を参照した。

注 32　世界最古の木造建造物とされる法隆寺が再建されたものか、それとも創建以来の姿を今に伝えているのかを巡ってなされた論争。天智天皇年間に法隆寺で出火があったとの記述があり、これの妥当性などが問題となった。

注 33　明治頃までの古墳の編年観は、『記』『紀』により、竪穴式石室よりも横穴式石室が古いとされていた。これに対し、喜田貞吉が竪穴式石室の方が横穴式石室より古いと主張し、論争となった。

注 34　雑誌『ミネルヴァ』で行われた論争。縄文時代の週末は地方によって大きな年代差をもたないと考えた山内清男と、東北地方で縄文土器と宋銭が共伴して出土した事例を重視し、東北地方では縄文時代が後世まで残ったと考えた喜田貞吉とが対立した。縄文土器の編年研究の重要性が認識された論争として著名である。

注 35　辰巳の経歴については垣見 2006 による。

注 36　以下、勅使河原 1994 による。

注 37　本章における森口の記述は、主に葭田 1975 による。特に断りがない場合は、以後、これによったと考えていただきたい。

注 38　例えば、『大淀町史』では宮滝説の有力性を認めながらも、時代によって吉野宮が転々と移っていた可能性を指摘している。ただし、大海人皇子の吉野入りについては、「比曽寺に入られたとも解釈出来るが、「吉野宮に入る」と『書紀』にあるので、斉明天皇の時、造営となった離宮とするのが穏当であろう」として、比曽寺≠吉野宮との見解を示されている。『吉野町史』では、断定を避けつつも宮滝説の優位性を説いている。

【引用参照文献】

吉田東伍 1890『大日本地名辞書』第二巻 冨山房

山本源次郎編 1897『全国材木業連合大会報告』

第４回
邨岡良弼 1902『日本地理志料』巻２、東陽堂
水木要太郎 1903「大滝」『大和巡』奈良縣協賛会
戌亥久吉 1904『川上村誌』松本奨業舎
筆者不明 1912「彙報　皇蹟尊重研究者木村一郎君」『歴史地理』第 20 巻４号、吉川弘文館、筆者不明 1916「彙報　木村一郎氏逝く」『歴史地理』第 28 巻第４号、吉川弘文館
奈良県教育委員会編 1915「吉野郡」『大和志料』下巻（昭和 62 年復刻）
奈良縣 1919『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第六回
折口信夫 1919『萬葉集辭典』文會堂書店（『折口信夫全集』第６巻 中央公論新社（1976）に再録）
奈良縣吉野郡役所編 1919-1923『奈良縣吉野郡史料』奈良縣吉野郡役所（1971 年に復刻）
鈴木友吉 1921『吉野哀史』磯部甲陽堂
次田潤 1921『萬葉集新講』改訂版、成美堂書店
辰己利文 1930「宮滝の冬」『大和萬葉古蹟巡禮』紅玉堂書店（1922 年に『心の花』で発表）
岡本福太郎編著 1923『芳野之史蹟』岡本福太郎
澤瀉久孝 1923「吉野離宮跡の位置其他」『奈良文化』３号、竹柏會
市村英輔 1925『古典美術の研究』雄山閣
山本源次郎 1925「吉野離宮論（遺稿）」『奈良文化』６号、 紅玉堂出版
山本源次郎 1925「吉野離宮論（二）」『奈良文化』７号、紅玉堂出版
高原正作編 1927『神武天皇親祭の聖蹟：附・吉野宮址』丹生川上神社翼賛会
辰巳利文 1927「吉野宮滝」『大和万葉地理研究』紅玉堂書店.
山本源次郎 1927「吉野離宮論（三）」『奈良文化』12、紅玉堂出版
喜田貞吉 1928a「宮滝の絶景と新発見の遺蹟」『東北文化研究』第一巻第三号
喜田貞吉 1928b「吉野離宮と宮滝」『東北文化研究』第一巻第三号
喜田貞吉 1928c「宮滝吉野郡院説」『東北文化研究』第一巻第三号
（『喜田貞吉著作集』14 巻 平凡社（1982）再録）
豊田八十代 1928「吉野離宮考」『心の花』32 巻 12 号
中岡清一 1928「宮滝の吉野離宮阯に就て　森口氏の「吉野離宮考」を駁す」『史跡名勝天然記念物』、第３集第１０號
中岡清一 1928「宮滝の吉野離宮阯に就て　森口氏の「吉野離宮考」を駁す」『奈良文化』15
中岡清一 1928「金峯山に関する考證（一）」『名所舊跡』
森口奈良吉 1928「吉野離宮考」『史跡名勝天然記念物』第３集第９號
山田孝雄 1928「天皇幸于吉野宮時御製歌」『萬葉集講義』巻一、宝文館
辰己利文 1929a『大和萬葉地理研究』紅玉堂書店,
辰巳利文 1929b「編集後記」『奈良文化』17 号
豊田八十代 1929「續吉野離宮考」『心の花』33 巻６号
中岡清一 1929a「豊田氏の吉野離宮考を難ず」『心の花』33 巻３号
中岡清一 1929b『吉野名所誌（改訂 13 版）』吉野山同窓会
中岡清一 1929c『飛鳥浄御原宮一部発掘二就テ』
松岡静雄 1929『日本古語大辭典』刀江書院
森口奈良吉 1929『鳥見霊畤考・吉野離宮考』木原文進堂
鴻巣盛廣 1930-1935『萬葉集全釋』廣文堂
武田祐吉 1930『萬葉集新解』山海堂出版部
辰己利文 1930『大和雑記』紅玉堂書店,
澤瀉久孝 1931『萬葉集新釋』星野書店
末永雅雄 1932「宮滝の遺跡」『歴史と地理』29 巻５号、 星野書店.

豊田八十代 1932『万葉地理考 附録』大岡山書店.
大井重二郎 1933『万葉集大和歌枕考』曼陀羅社
末永雅雄 1934「宮滝の遺跡 略報第二」『大和石器時代研究』 大和上代文化研究会.
奥野健治 1934『萬葉大和志考』同人会
斎藤茂吉 1934『柿本人麿』岩波書店
小島貞三 1934「史跡ところどころ」福島宗緒編『吉野讀本』第二輯 吉野郡国語教育研究会
菊池壽人 1935『萬葉集精考』中興館
熊田葦城 1935『日本史蹟大系』第２巻、平凡社
坂口保 1935『萬葉集大和地理辭典』改造社
澤潟久孝 1935「南大和行脚覺書」京都大学文学部国語学国文学研究室編『国語国文』第５巻１１号、臨川書店
末永雅雄 1935「宮滝の遺跡」『考古学論評』１巻２号、東京考古学会（『末永雅雄著作集』第１巻、雄山閣（1990）再録）
足立康 1936『藤原宮址傳説地高殿の調査』日本古文化研究所
吉野叢書刊行會 1937『大塔宮之吉野城』
中岡清一 1937『大塔宮之吉野城』積善館
吉野郡柴橋尋常高等小学校 1937『郷土教育資料』
齋藤茂吉 1938『万葉集秀歌』岩波書店
福島宗緒 1941『吉野川上村史』川上村役場
佐佐木信綱 1941『萬葉辭典』中央公論社,
澤瀉久孝 1941『萬葉集講話』出來島書店
高木市之助 1941「象山際考」『吉野の鮎 : 記紀萬葉雑攷』岩波書店,
末永雅雄 1942「宮滝の遺蹟：調査梗概」『大和志』９巻８號通巻 95 號 大和国史会.
山田孝雄 1943「天皇幸吉野宮時御製歌」『万葉集講義』巻第一、宝文館
大井重二郎 1944『上代の帝都』立命館出版部
坂口保 1944『萬葉集大和地理辞典』創元社
末永雅雄 1944『宮滝の遺跡』奈良県教育委員会
土屋文明 1946『続萬葉紀行』改造社
末永雅雄 1951a「宮滝【上】」『青陵』Ｎｏ．５、奈良県立橿原考古学研究所
末永雅雄 1951b「宮滝【下】」『青陵』Ｎｏ．６、奈良県立橿原考古学研究所
武田祐吉 1952「萬葉吉野歌集」『萬葉吉野歌集』國學院大學事業部
末永雅雄 1953「大和の考古学遺跡（一)」『大和文化研究』創刊号、大和文化研究会
中荘小学校郷土研究会編 1955『中荘管見』
小島貞三 1955『史蹟と古美術 大和巡禮』大和史跡研究会
森口奈良吉 1956『丹生川上と鳥見霊畤・吉野離宮』丹生川上神社社務所
北島葭江 1956『萬葉集大和地誌』筑摩書房
佐佐木信綱 1956『萬葉集事典』平凡社
保田與重郎 1971「吉野離宮の濫觴」『保田与重郎選集』第３巻、講談社（1957 年論文再録）
土屋文明 1959「万葉時代の吉野」『吉野風土記』12
森口奈良吉 1959「吉野離宮の位置についての書簡」『吉野風土記』13
吉野史談会編 1959「アンケート　吉野離宮はどの辺りだとお考えになりますか」『吉野風土記』12
大口善信 1960「御馬瀬の行宮と吉野離宮について」『吉野風土記』14
森口奈良吉 1962「丹生川上と宮滝　吉野離宮跡について」『吉野風土記』17
山本健吉 1962『大和山河抄』人文書院
末永雅雄 1963「宮滝調査の回想」『吉野風土記』18
犬養孝 1964『万葉の旅』上巻 社会思想社
末永雅雄 1964『考古学の窓-日本古代文化を探る』
堀内民一 1964『大和万葉旅行』角川書店
森口奈良吉 1965「吉野離宮跡の発見」『吉野風土記』26
岸田定雄 1966「森口先生の「吉野離宮考」異見」

『大和史学』第２巻第３号
森口奈良吉 1966『丹生川上と鳥見霊畤・吉野離宮』丹生川上神社社務所
前登志夫 1967『吉野紀行』角川書店
末永雅雄 1968『考古学の窓』学生社
犬養孝 1969「吉野離宮の所在地」『国文学：解釈と鑑賞』 34⑵、至文堂（『万葉の風土』続、塙書房（1972）再録）
宮滝遺跡顕彰会 1969『宮滝』
大和タイムズ社編 1971『大和百年の歩み』文化編
末永雅雄 1971「飛鳥と宮滝」『奈良県史跡名称天然記念物調査報告 26 飛鳥京跡（一）』奈良県教育委員会
吉野町史編纂委員会 1972『吉野町史』
大淀町 1973『大淀町史』
葭田真澄 1975『森口奈良吉翁と丹生川上』丹生川上神社
末永雅雄 1976『考古学十二話』中央公論社
三浦昇 1976『敵見たる虎か吼ゆると』実業之日本社
上田正昭 1978『喜田貞吉』講談社
末永雅雄 1980「吉野宮と宮滝遺跡」奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県史跡名所天然記念物調査報告第 40 冊 飛鳥京（二）』奈良県教育委員会
前園實知雄 1980「宮滝遺跡の発掘調査とその成果」『吉野の文化財紀要（一）』吉野町文化財保護委員会
猪股静彌 1981「吉野離宮、宮滝の説（―アキツの地名をめぐって―）」『万葉』11 巻、奈良県立橿原図書館内万葉文庫
玉城妙子 1981『壬申に翔ぶ』玉城妙子
犬養孝 1983「吉野離宮の所在地」『萬葉の風土』塙書房
栢木喜一 1984「大伴卿の吉野の歌について　吉野離宮を考える」『万葉』11 巻、奈良県立橿原図書館内万葉文庫
犬養孝 1984「万葉―明日香　吉野のくに」『季刊明日香風』第３巻４号
犬養孝 1985「万葉―明日香　吉野のくに―続―」『季刊　明日香風』第４巻１号
奥野健治 1985『万葉地理研究論集第１巻　大和志考＋地名寸見』秀英書房
奥野健治 1986『万葉地理研究論集第６巻　大和志考決（上）』秀英書房
奥野健治 1986『万葉地理研究論集第６巻　大和志考決（下）』秀英書房
北村稔 1986「壬申の乱地理新考（一）」『史迹と美術』56 巻８号、史迹美術同攷会
斎藤忠 1984「宮滝遺跡」『日本考古学史辞典』東京堂出版
末永雅雄 1986『増補宮滝の遺跡』木耳社
末永雅雄 1986『日本考古學への道―学徒が越えた』雄山閣
吉野山小学校開講百年史記念事業実行委員会編 1986『吉野山小学校開講百年史さくらんぼ』
河上邦彦 1989『考古学点描』ロッコウブックス
玉城妙子 1989『壬申に翔ぶ』読売新聞社
宮坂敏和 1990「芳野離宮と宮滝遺跡」『吉野―その歴史と伝承』名著出版
桜井満ほか編 1990『吉野の祭りと伝承』桜楓社
千田稔 1991「吉野宮と青根ヶ峯」『古代日本の歴史地理学的研究』岩波書店
前園實知雄 1992「考古学から見た宮滝遺跡」『憧憬 古代史の吉野』奈良県吉野町経済観光課
椎谷紀芳 1992『ロマン紀行 壬申の乱』毎日新聞
和田萃 1993「吉野宮」『国史大辞典』第 14 巻、吉川弘文館
西郷信綱 1993『壬申紀を読む―歴史と文化と言語―』平凡社
和田萃 1994「吉野宮」『日本史大辞典』平凡社
菅谷文則 1994「壬申の乱の踏査研究」『橿原考古

学研究所論攷』18、奈良県立橿原考古学研究所
泉拓良 1994「宮滝遺跡」『日本史大辞典』平凡社
勅使河原彰 1995『日本考古学の歩み』名著出版
和田萃 1995「古代大和の神々」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』下、塙書房
山本幸司 1995『天武の時代 壬申の乱をめぐる歴史と神話』朝日新聞社
前園實知雄 1996「吉野宮の調査」『壬申の乱　大海人皇子から天武天皇へ』大巧社
奈良県立橿原考古学研究所 1996『奈良県史跡名称天然記念物調査報告書第 71 冊宮滝遺跡（遺構編）』奈良県教育委員会
伊達宗泰 1996『大和・飛鳥考古学散歩』学生社
星野良作 1997『壬申の乱の研究の展開』吉川弘文館
狩野久 2001「吉野宮」『日本歴史大事典』3、小学館
相原嘉之 2002「飛鳥の古代庭園-苑池空間の構造と性格-」金子裕之編『古代庭園の思想』角川選書
千田稔 2002『地名の巨人吉田東伍-大日本地名辞書の誕生』角川書店
奈良県立橿原考古学研究所 2003『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 84 冊宮の平Ⅰ』奈良県教育委員会
千田稔 2003「離宮の地理的立地について」『条里制・古代都市研究』第 19 号、条里制・古代都市研究会
小笠原好彦 2003「古代の離宮・行宮・頓宮の諸問題」『条里制・古代都市研究』第 19 号、条里制・古代都市研究会
増補吉野町史編集委員会 2004『増補　吉野町史』
松田真一・前園實知雄共編著 2004『吉野　仙境の歴史』文英社
前園實知雄 2004「吉野宮と宮滝遺跡」『奈良・大和の古代遺跡を掘る』学生社
香芝市二上山博物館編 2004『大海人皇子、吉野を発つ　壬申の乱を旅する』香芝市教育委員会
末永雅雄 2004『末永雅雄が語る 大和発掘ものがたり』（一社）橿原考古学協会
柏原市教育委員会 2005『離宮-竹原井頓宮と智識寺南行宮-』
井ノ口史 2006「豊田八十代の万葉地理研究」『万葉古代学研究年報』第 4 号、（財）奈良県万葉文化振興財団
垣見修司 2006「辰巳利文氏の活動について―奈良県における大正期から昭和初期にかけての万葉地理研究―」『万葉古代学研究年報』第 4 号、（財）奈良県万葉文化振興財団
倉本一宏 2007『壬申の乱を歩く』吉川弘文館
倉本一宏 2007『戦争の日本史２　壬申の乱』吉川弘文館
大竹初彦 2007『壬申の乱 史跡探訪』ブイツーソリューション
相原嘉之 2008「飛鳥と宮滝―飛鳥川をめぐる遺跡の諸相―」『季刊　明日香風』第 105 号、（財）飛鳥保存財団
岡本八重子編 2008『新説　壬申の乱』小学館
吉村武彦編 2008『大化改新と古代国家誕生―乙巳の変・白村江の戦い・壬申の乱』新人物往来社
榊原康彦 2009『異説　壬申の乱』彩流社
前園實知雄 2013「吉野宮滝遺跡と吉野宮」『季刊明日香風』第 126 号、（公財）古都飛鳥保存財団
辻井英夫 2014『吉野川上の古代史』奈良新聞社
吉野歴史資料館編 2015『吉野歴史資料館だよりたぎつみやどころ』準備第１号
瀧音能之監修 2016『古代史再検証 持統天皇とは何か』宝島社
中東洋行 2016「史跡宮滝遺跡」『大和を掘る』３４、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
吉野歴史資料館編 2016『吉野歴史資料館だよりたぎつみやどころ』準備第３号

表１　宮滝遺跡の調査履歴（吉野宮や吉野離宮に関連するとみられる主要なものに限る）

次数	調査代	調査で確認された主要な遺物・遺構
2	昭和50	顕著な遺構・遺物なし
6	昭和50	弥生時代の方形周溝墓・木棺墓・土器棺墓、飛鳥時代の掘立柱列、弥生土器
7	昭和50	弥生時代の竪穴住居・ピット、飛鳥時代の掘立柱建物、打製石鏃、弥生土器、須恵器
11	昭和51	奈良時代以前の池状遺構、中世の溝・土坑
14	昭和52	弥生時代の竪穴住居・方形周溝墓、時期不明の柱穴・土坑など、弥生土器、整地層
17	昭和53	奈良時代の柱列、土師器
19	昭和53	弥生時代の方形周溝墓、奈良時代の掘立柱建物、弥生土器
20	昭和53	弥生時代の溝、飛鳥時代の池、ピット群、弥生土器、土師器、須恵器
23	昭和54	奈良時代の石組溝遺構、土坑、瓦
25	昭和54	弥生時代の方形周溝墓、奈良時代の掘立柱建物、須恵器、弥生土器、瓦器
26	昭和55	弥生時代の方形周溝墓・竪穴建物、奈良時代の柱列・石組溝遺構、弥生土器、鞴羽口
27	昭和55	弥生時代の木棺墓、奈良時代の柱列、砥石、土師器小皿、瓦質擂鉢、開元通宝
28	昭和56	弥生時代の方形周溝墓・溝、土師器、須恵器、サヌカイト、鉄滓、瓦器、榛原石
29	昭和56	弥生時代の土坑墓、飛鳥・奈良時代の掘立柱列・土坑、弥生土器、須恵器、土師器
30	昭和57	奈良時代の掘立柱列・ピット群、須恵器
31	昭和57	奈良時代の柱列・土坑・礫群、須恵器、炭化物、瓦、土師器、丸瓦、羽釜、瓦器
32	昭和57	飛鳥・奈良時代の掘立柱建物・土坑、弥生土器、縄文土器、須恵器、弥生土器（遠江）
34	昭和59	弥生時代の方形周溝墓、奈良時代の掘立柱建物、ピット群、弥生土器、須恵器
35	昭和59	飛鳥時代の土坑、奈良時代の溝、土師器、須恵器、東播系須恵器こね鉢、黒色土器
36	昭和60	奈良時代の掘立柱列、敷石遺構、石組溝遺構、瓦器、土師器
38	昭和62	弥生時代の方形周溝墓・土坑墓・溝、飛鳥時代の土坑墓、土坑、奈良時代の掘立柱建物・柵列、平安時代の礎石建物、鎌倉時代の土坑墓、弥生土器、瓦、瓦器
40	昭和63	弥生時代の溝、弥生土器、瓦器、鉄滓、須恵器（古墳）、平安時代の土器、炭化物
41	平成元	奈良時代の掘立柱建物、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦
43	平成２	弥生時代の方形周溝墓・土坑、飛鳥時代の池状遺構・大型柱列、須恵器、土師器
44	平成２	弥生時代の方形周溝墓・土坑、飛鳥・奈良時代の池状遺構・柱列・土坑、弥生土器、鉄斧、鉄釘、鞴羽口、土師器、須恵器、瓦、陶器、磁器、仏飯具、白磁、瓦質羽釜
48	平成５	弥生時代の土器棺墓・溝、飛鳥～奈良時代のピット・池状遺構、弥生土器
52	平成９	弥生時代の溝、奈良時代の石組溝遺構、瓦器
53	平成10	弥生時代の溝、時期不明のピット、土師器、サヌカイト、須恵器
55	平成11	弥生時代の竪穴住居、縄文土器、石鏃、敲き石、サヌカイト片、弥生土器、土師器
58	平成12	奈良時代の石組溝遺構・掘立柱建物、縄文土器（宮滝式、こぶ付土器ほか）、弥生土器
59	平成12	縄文時代の集石遺構・ピット・土坑、縄文土器（早期）、石器、弥生土器、須恵器
67	平成27	奈良時代の瓦類、石列、大型土坑（飛鳥時代・奈良時代）

大和（やまと）と吉野（よしの）　―壬申（じんしん）の乱（らん）の前後（ぜんご）―

はじめに

１．伝承の吉野

応神・雄略朝の伝承　山海の政

２．変貌する吉野

天武・持統朝の行幸　広瀬・竜田と吉野

おわりに

奈良女子大学

西村（にしむら）　さとみ

講師プロフィール：

1963 年、京都府生まれ。奈良女子大学大学院修了後、同大学助手、助教を経て現在、同大学准教授。お茶とお菓子と音楽のある時間を愛するも、手が届かない今日この頃です。

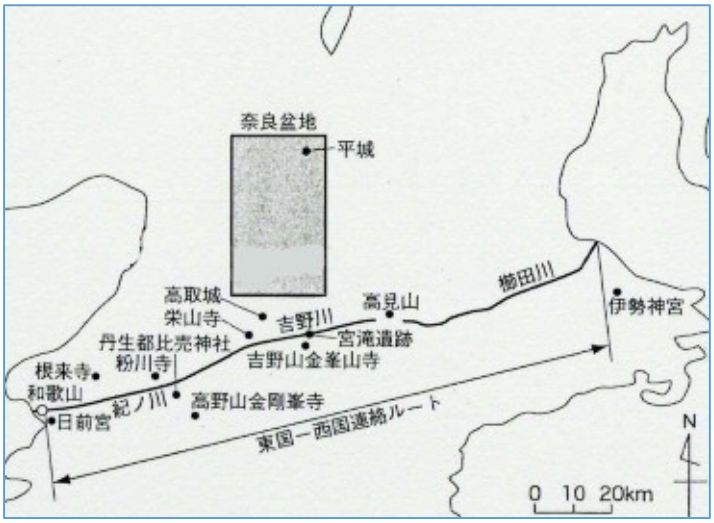
はじめに

天智天皇 10（671）年 10 月、病床にある天皇から後事を託された大海人皇子（おおあまのみこ）（のちの天武天皇）は、それを固辞して倭姫王（やまとひめのおおきみ）の即位と大友皇子の執政を請い、出家して吉野に入ったと、『日本書紀』※は伝える。大海人を宇治まで送った「或る人」は、「虎に翼を着けて放てり」と述べたという（天武天皇即位前紀 10 月壬午条。以下、とくに断らない場合は『日本書紀』による）。

それから半年あまり、挙兵の機をみた大海人は、６月に妃・鸕野讃良（うののさらら）（のちの持統天皇）らとともに吉野を発って東へと向かった。美濃、そして大和・近江と舞台を移しながら戦われた壬申の乱は、翌７月、瀬田川での決戦で近江方が敗走し、終幕を迎えたのである。

戦いに勝利した大海人は即位後、鸕野および草壁ら諸皇子をともなって吉野宮を訪れ、「天皇の勅の随に、相扶（たす）けて忤（さから）ふること無」きよう皇子たちに誓わせた（天武天皇８年５月乙酉条）。また、彼のあとを継いだ持統天皇が在位中

31 回も吉野に出かけたことは、よく知られている。しかし、なぜ吉野であったのか、彼らにとって吉野とはいかなる場であったのかを、それとして伝えてくれる史料はない。吉野をめぐりしばしば語られてきたのは、柿本人麻呂が「*我が大君の　聞こし食す　天の下に　国はしも　さはにあれども　山川の清き河内と　御心を　吉野の国の　花散らふ　秋津の野辺に　宮柱　太敷きませば*」(『万葉集』巻第 1-36)、大君がお治めになる多くの国のなかでも、とりわけ山も川も清い谷あいだとして、吉野国の秋津の野辺に宮柱をしっかりと立てられた、と詠った山河への憧憬、そ



図Ⅰ　紀伊半島を横断する交通路

図Ⅱ　奈良盆地から吉野へ

して修験の地の信仰である。しかし、吉野という場のもつ意味は、それに尽きるのであろうか。

近年、考古学の進展により、交通の要衝としての吉野の姿が明らかにされつつある。紀伊半島を東西に横断する中央構造線に沿って流れる吉野川は、和歌山県に入ると紀ノ川と名を変えて紀伊水道に注ぐ。他方、吉野川から東側の櫛田川や宮川に続く谷は、高見峠を越えれば往来が比較的容易である。このルートが縄文時代からすでに、山深い紀伊半島を横断する限られた交通路として重要な役割をはたしていたことが、遺跡の分布やそこから出土する遺物をもとに論じられているのである（松田真一 2004 など）。そして、その交通は半島内にとどまるものではなく、海を通じてその東西に広がっていた。

吉野の地名は、そうした交通の大動脈をなす吉野川流域のなだらかな丘陵地に由来するものであり、金峯山寺のある吉野山一帯が当初からその中核をなしていたわけではないという（足利健亮 1990）。

奈良盆地から山を隔てた「奥地」ではなく、列島規模の交通の要衝という地理的位置、そして、地名が指し示す範囲にみられるような場の歴史的変化に留意し、改めて史料を読みなおすことにより、奈良盆地に拠点をおく政権にとって吉野がいかなる意味を有していたかを、壬申の乱の前後に焦点をあてて考えてみたい。

1．伝承の吉野

（1）応神・雄略朝の伝承

吉野という地名は、まず神武東征伝承にあらわれる。「六合の中心」に「都」をつくるべく日向を出発した神武の一行は白肩津（しらかたのつ）に上陸し、生駒山を越えようとして長髄彦（ながすねひこ）に阻まれる。敗因は「日神の子孫」であるにもかかわらず太陽に向かい戦ったことにあるとして、一行は紀伊水道を迂回し熊野の荒坂津（あらさかのつ）に到着。八咫烏（やたがらす）に導かれて菟田県（うだのあがた）にいたった神武は、そこから吉野を視察に訪れたと、『日本書紀』は伝える。

吉野では、尾があり光を放っている井光（いひか）、磐石を押し分けあらわれた磐排別（いわおしわく）の子、梁で魚を取っていた苞苴担（にえもつ）の子らに迎えられた。それぞれ、のちに天皇に奉仕することになる吉野首（よしののおびと）、吉野国樔部（よしののくずら）、阿太養鸕部（あだのうかいら）の始祖であるという（神武天皇即位前紀）。

神武の足跡が『日本書紀』と『古事記』で異なることも含め、一連の記述が意味するところについては別の機会に譲るが、すでに述べた交通路の存在をふまえれば、紀伊半島の南部から奈良盆地に入ったという伝承を、交通の実態と乖離しているとは必ずしもいえないことを、とりあえず確認しておきたい。

次に吉野が登場するのは、応神紀である。応神天皇 19 年 10 月、吉野宮を訪れた天皇（天皇号の成立時期については議論があるが、以下『日本書紀』の記載により、便宜上天皇とする。）に「国樔人（くにすひと）」が醴酒（こさけ）（甘酒）を献上して歌を詠み、それが終わると手で口を打ち、上を向いて笑ったと記されている。

「京」からさほど遠くないにもかかわらず、険しい峰、深い谷に隔てられ、参向することは稀であった彼らがしばしば天皇のもとに産物を献じるようになったのは、これ以降であるという。加えて、その地の産物は栗・茸・鮎の類であることや、いつも山の木の実を食しヒキガエルを良い味つけで煮るなど、国樔（国栖）の習俗についても記載がある（**史料①**）。

続いて雄略紀には、雄略天皇 2 年 10 月に天皇が吉野宮に出向き、御馬瀬（みませ）で狩猟をおこなったこと（**史料②**）、同 4 年 8 月にも吉野宮に赴いて、河上の小野で猟をし、そこを蜻蛉野（あきづの）と名づけたこと（**史料③**）がみえる。『古事記』には、これらと異なる伝承が収められているが、そこでも蜻蛉野という地名が雄略の行幸に由来することが語られ、吉野における天皇の影響力を伝えるものとなっている。

ただ、吉野宮が営まれたのは、『日本書紀』斉明天皇 2（656）年是歳条に「吉野宮を作る」とある 7 世紀なかば以降とされ、応神紀・雄略紀の記述も伝承として紹介されるにとどまりがちである。しかし、あえてその時代のできごととして吉野行幸が記された背景には、それなりの理由があると思われる。記載内容をそのまま事実とみなすことはできないにしても、いかなる状況下で吉野に目が向けられたのかを検討することにより、場のもつ意味を浮き彫りにできるかもしれない。

そこで、当該期の諸政策との関係において、応神・雄略両天皇の吉野行幸をとらえなおしてみよう。

（2）山海の政

応神天皇は、３人の皇子のなかでも末弟の菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）を寵愛し、彼を後継者にしようとした。それはのちに長兄大山守命の菟道稚郎子殺害計画を暴かれての死、次兄大鷦鷯（おおさざき）（のちの仁徳天皇）の即位を望む菟道稚郎子の自殺などを引き起こしたが、ここで注目したいのは、「菟道稚郎子を立てて嗣とした」応神が、「大山守命に任さして、山川林野を掌らしめたまひ、大鷦鷯尊を以ちて太子の輔として国事を知らしめ」ようとしたことである（応神天皇 40 年正月甲子条）。『古事記』のなかでは「山海の政」と「食国（おすくに）の政」と表現されたような（中巻　応神天皇）、統治における分掌関係が確認されるのである。

応神紀には、「処々の海人」が命に従わ

【史料】

①『日本書紀』応神天皇 19 年 10 月朔条

吉野宮（よしののみや）に幸す。時に国樔人（くにすひと）来朝（まいけ）り。因りて、醴酒（こさけ）を以ちて天皇に献りて、歌して曰さく、

　　橿の生に　横臼を作り、横臼に　醸（か）める大御酒　うまらに　聞し持ち食せ　まろが父（ち）

とまをす。歌ふこと既に訖（おわ）り、則ち口を打ちて仰ぎ咲ふ。今し国樔、土毛を献る日に、歌ひ訖りて即ち口を撃ちて仰ぎ咲ふは、蓋し上古の遺れる則なり。夫れ国樔は、其の為人甚だ淳朴なり。毎に山菓を取りて食ひ、亦蝦蟆（かえる）を煮て上味とす。名けて毛瀰（もみ）と曰ふ。其の土は、京より東南、山を隔てて吉野河の上に居り、峰嶮しく谷深くして、道路狭く嶮（さか）し。故、京より遠からずと雖も、本より朝来ること希なり。然れども、此より後、屢参赴（まいき）て土毛を献る。其の土毛は、栗・菌と年魚の類なり。

②『日本書紀』雄略天皇２年 10 月癸酉条・丙子条

辛未の朔にして癸酉に、吉野宮に幸す。

丙子に、御馬瀬（みませ）に幸し、虞人（やまのつかさ）に命せて縦猟したまふ。重嶮（ちょうけん）に凌（のぼ）り、長莽（ちょうぼう）に赴き、未だ移影くに及らざるに、什（とお）が七八を獲（ころ）す。……　是の日に、車駕、吉野宮より至りたまふ。……

③『日本書紀』雄略天皇４年８月戊申条・庚戌条

辛卯の朔にして戊申に、吉野宮に行幸す。

庚戌に、河上の小野に幸す。虞人に命して、獣を駈らしめ、躬（みずか）ら射むと欲して待ちたまふに、虻（あむ）、疾（と）く飛び来て、天皇の臂をくふ。是に蜻蛉（あきつ）、忽然に飛び来て、虻を嚙ひて将ち去ぬ。天皇、厥（そ）の心有ることを嘉（よみ）したまひ、群臣に詔して曰はく、「朕が為に、蜻蛉を讃めて歌賦（うたよみ）せよ」とのたまふ。群臣、能く敢へて賦者莫し。天皇、乃ち口号して曰はく、

　　倭の　嗚武羅（おむら）の岳に　鹿猪（しし）伏すと　誰かこの事　大前に奏す　大君は　そこを聞かして　玉纏（たままき）の　胡床（あぐら）に立たし　倭文纏（しづまき）の　胡床に立たし　鹿猪待つと　我がいませば　さ猪待つと　我が立たせば　手腓（たくぶら）に　虻かきつきつ　その虻を　蜻蛉はや嚙ひ　昆虫も　大君にまつらふ　汝が形は置かむ　蜻蛉島倭（あきづしま やまと）

とのたまふ。因りて蜻蛉を讃めて、此の地を名けて蜻蛉野とす。

なかったため、阿曇連（あずみのむらじ）の祖である大浜宿禰を派遣して騒擾（そうじょう）を鎮めさせ、彼を「海人の宰」統率者とした（応神３年 11 月条）、諸国に命じて「海人と山守部とを定」めた（同５年８月壬寅条）といった記事もみえる。そこにいう海人は漁労に携わるばかりではない。応神 22 年３月丁酉条に、父母を思い帰郷を願う妃を吉備に送らせるべく「淡路の御原の海人八十人」を水手（かこ）としたとあり、その「淡路の海人」たちは「韓国」との間も行き来していた（仁徳天皇即位前紀）。

また応神は、即位後しばらくして、伊豆で「長さ十仗」の船を造らせている。海に軽く浮かび滑るように速く走るその船は「枯野（からの）」と名づけられたという（応神５年 10 月条）。長年にわたる「官用」に堪えた「枯野」は、その名を後世に伝えよとの応神の意向を受けて、次のように処理された。解体した材を薪として塩を焼き、得られた五百籠の塩を諸国に配ることによって、新たな船を造らせたのである。諸国が奉った五百の船は武庫水門（みなと）に集められた（応神 31 年８月条）。

具体的な記述はないが、船の解体、塩の生産と分配、船材の調達、建造、そして運送に海人が無関係であったとは考えがたい。またこの過程には、たとえば山野で製材にかかわる人びとも組み込まれていたはずである。種々の技術をもつ人、その原料や製造した品々を運搬する人も含めた「山海」の人びとをいかに制御するかが、応神朝の一つの課題となっていたことがうかがわれよう。吉野国栖の奉仕は、こうした状況下のできごととして語られていたのである。

なお武庫水門、兵庫県南東部を流れる武庫川河口の泊には、朝鮮半島出兵から帰還した応神の母神功皇后（じんぐうこうごう）の船が進まなくなり、そこに停まって占った結果、天照大神の「我が荒魂」を「御心の広田国に居しますべし」との託宣を得たという伝承がある（神功皇后摂政元年２月条）。応神朝に諸国から献じられた五百の船も、半島政策に用いるものであったと推測されよう。

応神朝に続いて吉野行幸があったとされる雄略朝も、新羅出兵（雄略天皇９年３月条）など、朝鮮半島に関する記事が『日本書紀』に散見される時期である。さらに、物部菟代宿禰（もののべのうしろのすくね）らを遣して伊勢の朝日郎（あさひのいらつこ）を伐たせた記事（雄略 18 年８月戊申条）など、大和盆地から東、伊勢方面に関する記事も少なからずみられる。崇神朝の豊鍬入姫命（とよすきいりひめのみこと）、垂仁朝の倭姫命（やまとひめのみこと）に続き、稚足姫皇女（わかたらしひめのひめみこ）という「伊勢大神」に奉仕する女性の名が記されたのも、この時代のことであった（雄略元年３月条）。

朝鮮半島をめぐる政策と吉野川、紀ノ川水運とのかかわりについては、すでに

指摘があり、豊かな水量を誇り物資の大量輸送に適した両河川の水運は、5 世紀後半から 6 世紀後半にかけて「外征」上きわめて重要な意味をもったと論じられている。ただ、それは「半島情勢の悪化にともない、帝都が大和国南部という局地に偏在したという、いわば偶然の事情にもとづくものであったとされる（薗田香融（そのだ こうゆう）1991　下記参考資料）。

吉野川、紀ノ川が、奈良盆地に拠点をおく政権にとって、列島の外へと開かれた重要な交通路であったことは頷（うなず）かれるが、それは対外関係の悪化により「局地」に政治拠点をおかざるをえなかったという「偶然」の結果に過ぎないのであろうか。その交通路が縄文時代にすでに確認され、「中世では高野山の年貢進上にさかんに利用され、近世でも大和の五条、紀伊の橋本は、上下船の発着点として殷賑（いんしん）をきわめた」といわれるように、時代を超えて活用されていたとすれば、特殊事情のもとでのやむを得ざる選択とみなすことには違和感が生じる。政権による交通体系の組織・再編は当然のことであり、重視されるルートも時代により変化するであろう。ただ、時代を超えてさまざまに利用され続けた交通の大動脈にアクセスしうる場所は必ずしも「局地」ではなく、またその交通の重要性を政権は十分に認識していたと思われる。

【参考資料】　　薗田香融「古代海上交通と紀伊の水軍」

日本の古代国家は、その成立の過程からみても、ほんらい、淀川―瀬戸内海―北九州を結ぶ水系ルートを中枢として形成されていた。それにもかかわらず、この「ある時期」に、紀ノ川―四国ぞい航路が大きな意味を担うことになったのは、半島情勢の悪化にともない、帝都が大和国南部という局地に偏在したという、いわば偶然の事情にもとづいたのである。

大和の南部（飛鳥周辺）から難波津に出るためには、奈良盆地を斜行し、大和と河内を隔てるかなり高峻な生駒・葛城山脈を横断しなければならない。人間の移動だけならともかく、外征というような大量の物資の運輸を伴うばあいは、かなり困難な行程となろう。奈良盆地を分流する大和川の支流は河底が浅く、とくに大和川が河内に流入する広瀬・竜田付近では、河流が屈曲して十分な舟運はのぞめないのである。これにくらべて、紀ノ川およびその上流の吉野河は、その源を吉野・熊野に発し、水量はゆたかで、かなり上流まで舟を浮かべることが可能である。紀ノ川水運は、中世では高野山の年貢進上にさかんに利用され、近世でも大和の五条、紀伊の橋本は、上下船の発着点として殷賑（いんしん）をきわめたのである。

いずれにせよ、応神・雄略紀の吉野行幸は、列島外にいたる広域交通とそれに関与する人びとの制御を問題化する文脈において語られているとみることができよう。斉明天皇による吉野宮の造営も、そうした吉野をめぐる認識とそれをささえる何らかの事実を前提になされたものと推測される。

斉明朝もまた、百済救援のため朝鮮半島に派兵した激動の時代であった。吉野宮の造営は出兵以前の斉明天皇２(656)年に遡るが、後飛鳥岡本宮の造営、「天宮(あまつみや)」とも呼ばれた両槻宮※の造営や「狂心の渠(たぶれごころのみぞ)」と誹謗(ひぼう)された大渠の工事と同年におこなわれている（同年是歳条)。また、同５年３月の吉野行幸の２日後には、現在は大津市となった琵琶湖畔の「平浦(ひらうら)」にも行幸があった(同月朔条・庚辰条)。これらは、吉野が統治空間の全体設計との関係において把握されていたことを示していよう。

近江を去った大海人、彼と行動をともにした鸕野讃良(うののさらら)も、こうした吉野の地理的、歴史的位置を十分に認識していたと思われる。内乱の出発点となったその地を、政権の中枢に立った彼らはどのようにみたであろうか。

次に、これまでの考察をふまえ、とりわけ交通・軍事といった観点から天武・持統朝の諸政策を振り返ることにより、吉野という場の性格を考えてみたい。

２．変貌する吉野

（1）天武・持統朝の行幸

さて、天武・持統両天皇の行幸記事を『日本書紀』から拾い出したものが、**表Ⅰ・Ⅱ**である。天武の行幸には、天武天皇９（680）年９月の朝嬬(あさづま)行幸における騎射など、軍事的要素が確認される事例がいくつか確認されることから、軍備にかかわる政策も付記することとした。

差し出させた良馬を「迹見駅家(とみのうまや)の道の頭」で駆けさせ、それを観た天武８年８月の泊瀬(はつせ)。上述した朝嬬。行幸は停止されたものの、同 10 年 10 月に親王以下群卿たちが軽市(かるのいち)で飾馬を検閲し、大山位以下の人びとは馬に乗って「大路」を北進したという広瀬野(ひろせの)。軍事色をともなう行幸の目的地は、当然といえばそうであるが、いずれも交通上の要衝であった。

迹見は、奈良盆地南部を東西に走る通称横大路に沿い、墨坂峠(すみさかとうげ)を越えて東国へと通じる位置にある。また朝嬬は金剛山の東麓にあり、騎射がなされた長柄杜(ながらのもり)は、河内と大和を結ぶ水越街道と金剛・葛城山麓を通る長柄街道が交差する地であった。そして広瀬野は、飛鳥川・葛城川などが大和川に合流するあたりの平坦地を指すとみられている。

時間は前後するが、天武４年２月には、高安城(たかやすのき)にも行幸があった。高安

城は、大和と河内の国境にある山城で、『日本書紀』天智天皇６（667）年 11 月条に「讃吉（さぬき）国山田郡の屋島城（やしまのき）、対馬（つしま）国の金田城（かねたのき）」などとともに築いたとみえる。壬申の乱に際しては、この城を大海人側が占拠したのであった。「政の要は軍事」であるとの詔は、壬申の乱から 10 年以上を経た天武 13 年のものであるが、内外の緊張がただちに解消されるものではないことは、順当に皇位を継承したわけではない天武自身が深く認識していたであろう。

高安城には、持統天皇３（689）年 10 月、天武に続き持統も行幸している。また、翌年２月には「腋上陂（わきがみのつつみ）」に出向き、公卿大夫の馬を観たという。『日本書紀』が伝えるのは、ほぼ目的地と滞在期間のみであるが、天武朝に通じる行幸の性格がうかがわれよう。なお「腋上陂」は、御所市に鎮座する鴨都波（かもつば）神社近辺とみられている。

ところで、天武、持統両天皇が行幸した高安城の南東、かつて竜田山と称された生駒山地の南端には、天武８年 11 月に「大坂山」と並んで関がおかれることとなった。注目されるのは、その「竜田の立野」と、先述した広瀬で神祭りが始められたことである。

『日本書紀』天武４年４月癸未条には、「小紫美濃王（みののおおきみ）・小錦下佐伯連広足（さえきのむらじひろたり）を遣して、風神を竜田の立野に祠しむ。小錦中間人連大蓋（はしひとのむらじおおふた）・大山中曾禰連韓犬（そねのむらじからいぬ）を遣して、大忌神（おおいみのかみ）を広瀬の河曲（かわわ）に祭らしむ」とある。この二祭は以後、ほぼ毎年４月と７月におこなわれたことが、『日本書紀』からうかがわれる。竜田の風神祭、広瀬の大忌祭の両祭は、孟夏および孟秋の祭祀として令制にも位置づけられた。

続いては、交通・軍事上の要衝で開始されたこの神祭りの内容を検討することにより、天武・持統朝の政治課題としての吉野をめぐる問題に迫りたいと思う。

（2）広瀬・竜田と吉野

延喜（えんぎ）５（905）年に編纂が開始され、延長（えんちょう）５（927）年に撰進された『延喜式』※には、広瀬大忌祭および竜田風神祭の祝詞（のりと）が採録されている。記された時期は下るが、成立期の姿をとどめているとされるそれによれば、大忌祭は、「御膳持ちする若宇加売命（わかうかめのみこと）」に加え、「倭の国の六つの御県（みあがた）」の神と「山口に坐す皇神（すめがみ）」にも幣帛（へいはく）を捧げ、「皇神たちの敷き坐す山々の口より、さくなだりに下し賜う水を、甘き水と受けて、天下の公民の取り作れる奥つ御歳（みとし）を、悪しき風・荒き水に相わせ賜わず、汝命の成し幸わえ賜」、山谷から勢いよく流れ出る水を良い水として草木を潤し、悪風や洪水に遇うこと

図Ⅲ　広瀬・龍（竜）田社と河川

なく豊かな実りがもたらされるよう祈る祭であった（**史料④**）。他方、風神祭では、「天の御柱の命・国の御柱の命」に「天下の公民の作り作る物を、悪しき風・荒き水に相わせ賜わず、皇神の成し幸わえ賜」うよう祈願している（**史料⑤**）。

この二祭に関する研究は多く、近年では、両社の立地から祭の成立過程や目的に言及した論考も発表された。そこでは、広瀬社が高市・葛木・十市・志貴・山辺・曾布の「六つの御県」をそれぞれ流れる飛鳥川・葛城川・寺川・初瀬川（志貴および山辺）・佐保川が合流する付近にあり、飛

【史料】

④『延喜式』巻第８　祝詞　広瀬の大忌の祭

広瀬の川合に称え辞竟（お）え奉る皇神の御名を白さく、御膳持ちする若宇加の売の命と御名をば白して……

倭の国の六つの御県、また、山口に坐す皇神たちの前にも、皇御孫（すめみま）の命の宇豆の幣帛（みてぐら）を、……かく奉らば、皇神たちの敷き坐す山々の口より、さくなだりに下し賜う水を、甘き水と受けて、天の下の公民の取り作れる奥つ御歳を、悪しき風・荒き水に相わせ賜わず、汝命の成し幸わえ賜わば、初穂をば汁にも穎（ほさき）にも、瓫（みか）のへ高知り、瓫の腹満て双べて、横山の如く打ち積み置きて奉らむと、……

⑤『延喜式』巻第８　祝詞　竜田の風の神の祭

龍田に称え辞竟え奉る皇神の前に白さく、志貴島に大八島国知ろしめしし皇御孫の命の、遠御膳の長御膳と、赤丹（あかに）の穂に聞こし食す五つの穀物を始めて、天の下の公民の作る物を、草の片葉に至るまで成さず、……　誰の神ぞ、……　天の下の公民の作り作る物を、悪しき風・荒き水に相わせつつ、成さず傷るは、我が御名は天の御柱の命・国の御柱の命と、御名をば悟し奉りて、……　竜田の立野の小野に吾が宮は定め奉りて、吾が前を称え辞竟え奉らば、天の下の公民の作り作る物は、五つの穀を始めて、草の片葉に至るまで、成し幸わえ奉らむと悟し奉りき。……

奉る宇豆の幣帛は、……　天の下の公民の作り取り作る物を、悪しき風・荒き水に相わせ賜わず、皇神の成し幸わえ賜わば、……

鳥（あすか）・石村（いわれ）・忍坂（おさか）・長谷（はつせ）・畝火（うねび）・耳無（みみなし）の山口神もまたそれらの川沿いに位置することが確認される。そのうえで、河川交通の利便性が重視され、広瀬が御県神や山口神を合祭する国家祭祀の場となったと解される。

対する竜田社は、大和と河内を結ぶ交通上の要所でありながら、通過に困難をともなう地でもあった。その竜田で神祭りをおこなうことは、政権による課題の克服を意味していたという。そして、二つの祭祀を一対でおこなうことは、飛鳥を中心とした奈良盆地から河内に続く大和川流域全体へと、政権が掌握する範囲の拡大を象徴しているとも論じられる（山口えり 2008）。

ここで注目すべきは、交通の制御が、関の設置といった実際的対応とともに祭祀を通じてなされていることであり、その祭祀が局地的な利を祈るのではなく、より象徴化された空間を対象にしていることであろう。紀伊半島を横断する交通路を擁する吉野の地も、同様の対応が求められたのではあるまいか。それは、いいかえれば、応神紀にみられた「山川林野を掌」ることと「国事を知らしめ」ることを結び合わせる論理の創出である。

吉野行幸の背景に山川に対する信仰をみることは、もはや通説化しているといえよう。ただ、その多くは、奈良盆地とは異なるその風土への憧憬を前提に、信仰をある意味では超歴史的なものとしてとらえているようにみうけられる。ここで述べたいのは、広瀬・竜田の地で新たな神祭りが創始されたのと同じ論理で、吉野においても政権の主導する祭祀がめざされたのではないか、ということである。

文武天皇２（698）年、「諸国旱」に対して「幣帛を諸社に奉」るのに先んじ、「芳野水分峯神（よしののみくまりのみねのかみ）」に馬を奉ったとの記事がみえるが（『続日本紀』同年４月戊午条・５月朔条）、こうした祈雨の祭祀がなされるようになった時期は、さほど遡らないように思われる。

吉野の地でそれまで祭祀がなされていなかった、あるいは政権の論理が信仰のありようを決定していったと述べるつもりは、もちろんない。広瀬・竜田における神祭りに話を戻せば、竜田の神は祭祀の創始にいたる経緯が祝詞に詳しく、土地との結びつきもうかがわせる。しかし同時に、天武朝以前に祭りがなされていたとしても、場の性格を考えれば、それが農事にかかわるものであったとは断言できないのである。

吉野にあっても、作物の豊かな実りをもたらす水源としてまつるとの発想は、その内部から、あるいは山川があればおのずから生まれてくるという類のものではあるまい。祭祀空間の象徴化が進展しようとも、農事によらない吉野を、作物を育む水を祈るという論理で包摂するのは

容易くはなかったと思われる。その困難が、宮の造営や度重なる行幸を要請したのではなかろうか。

おわりに

宮が営まれた吉野は、一時期、大和国ではなく監（げん）の管轄下におかれていた。「芳野監」の名は『続日本紀』※天平 5（733）年正月丙寅条にはじめてみえるが、前年 7 月丙午条に「両京・四畿内及び二監」とあり、霊亀（れいき）2（716）年 3 月、茅渟宮（ちぬのみや）のために河内国から 2 郡を割いて和泉監が設置された（同月癸卯条）のとほぼ同時期に、大和国から分立したと考えられている。設置と同じく廃止の時期も明らかではないが、史料に確認されるのは天平 10 年 10 月丁卯条までで、和泉監が廃された天平 12 年 8 月前後には大和国に復したとみられる。

それは、大宝元（701）年 2 月と翌 2 年 7 月に文武天皇、養老 7（723）年 5 月に元正天皇、神亀元（724）年 3 月に聖武天皇と、8 世紀に入っても続けられていた吉野宮への行幸が、天平 8 年 6 月を最後にみられなくなるのと軌を一にしている。その一方で、『続日本紀』に名を残す僧広達（こうたつ）が「吉野の金の峯に入り、樹下を経行して仏道を求め」たのも、「聖武天皇のみ代」のことであった（『日本霊異記』※中巻第 26 縁）。

そして、吉野は修験の場としての性格を強めていく。

直接の因果関係はさておき、これらは同時代に起こった一連のできごととして理解すべきであろう。そのうえで、政権の論理と吉野という場がもつ論理がどのようにかかわり、そうした事態になったのか、またその状況をささえる論理はいかなるものであったのかを問わなければならない。それらはついては他日を期し、課題の確認に終始した感はあるが、ひとまず考察を終えることにしたい。

【引用文献】

準備にあたり参照した文献は多くあるが、紙幅の都合上、文中に引用したものに限り以下に記しておく。

松田真一 2004:「吉野を縦横に走る縄文街道」前園実知雄・松田真一共編著『吉野仙境の歴史』文英堂

足利健亮 1990:「吉野という世界」上田正昭編『吉野ー悠久の世界』講談社

山口えり 2008:「広瀬大忌祭と龍田風神祭の成立と目的について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 148 集

薗田香融 1991:「古代海上交通と紀伊の水軍」『日本古代の貴族と地方豪族』塙書房 初出 1970 年

なお史料は、以下の文献によった。

『日本書紀』:
新編日本古典文学全集『日本書紀』
小学館　1994～98 年

『万葉集』:
新編日本古典文学全集『万葉集』
小学館　1994 年

『延喜式』:
虎尾俊哉編『訳註 日本史史料 延喜式』
集英社　2000 年

【図の出典】

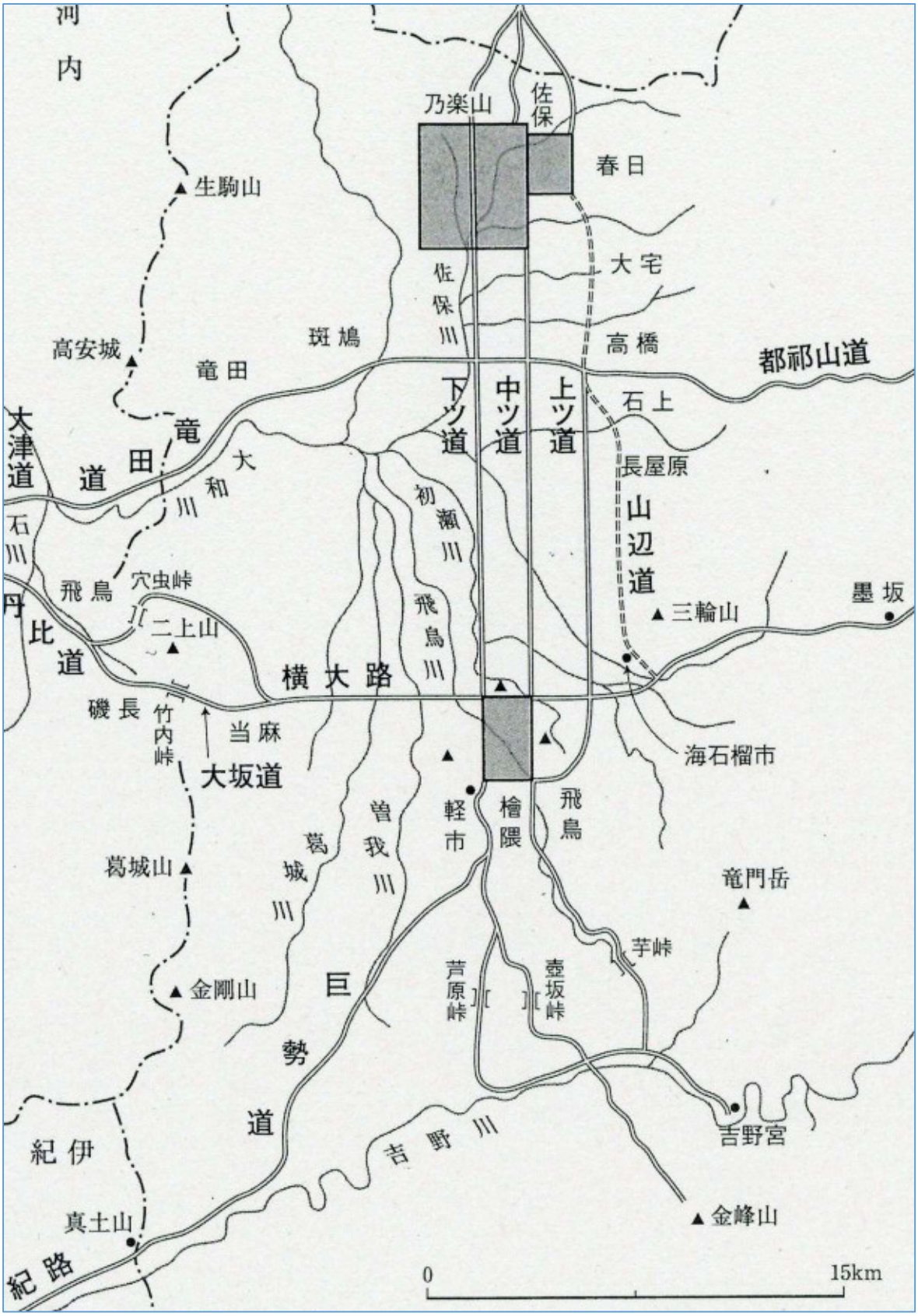
図Ⅰ:小路田泰直「『古都』奈良の誕生」奈良女子大学文学部なら学プロジェクト『大学的ならガイドーこだわりの歩き方』昭和堂　2009 年　〈文物交流の主要ルート〉部分

図Ⅱ:足利健亮 1990〈吉野と周辺の概要〉部分

図Ⅲ:義江明子『天武天皇と持統天皇』日本史リブレット人 006　山川出版社 2014 年　〈倭の六御県と広瀬・龍田社〉に加筆

附図:寺崎保広『藤原京の形成』日本史リブレット６　山川出版社　2002 年　〈大和の古道と宮都〉部分

【附 図】


河内
乃楽山
佐保
春日
生駒山
大宅
佐保川
斑鳩
高安城
竜田
高橋
都祁山道
下ツ道
中ツ道
上ツ道
石上
大津道
竜田道
大和川
長屋原
山辺道
石川
初瀬川
飛鳥
穴虫峠
飛鳥川
墨坂
三輪山
丹比道
二上山
横大路
磯長
竹内峠
当麻
大坂道
海石榴市
軽市
檜隈
飛鳥
曽我川
葛城川
葛城山
竜門岳
芋峠
金剛山
巨勢道
芦原峠
壺坂峠
紀伊
吉野川
吉野宮
真土山
金峰山
紀路
0
15km

僧形（そうぎょう）の皇子（みこ）たち ―いざ、吉野（よしの）へ―

はじめに

１．原吉野の風景

２．吉野太子と吉野寺

３．吉野を継ぐ者

おわりに

大淀町教育委員会

松田（まつだ） 度（わたる）

講師プロフィール：
1974 年、大阪市生まれ。同志社大学大学院終了後、同大学歴史資料館研究員を経て 2005 年より大淀町教育委員会に勤務、現在生涯学習課・主任技師。二児の父で、趣味は家庭菜園とウォーキング。

はじめに　―僧形の皇子―

若き日の中大兄皇子（のちの天智天皇）らは、時の権力者、蘇我臣蝦夷・入鹿父子を滅ぼし、軽皇子（のちの孝徳天皇）を中心とする、新たな政治体制をつくりあげた。「大化の改新」のはじまりを告げる、西暦 645 年６月 12 日の政変（乙巳（いっし）の変）である（以下、月日はすべて旧暦で記す）。政変後、皇位継承者だった古人大兄皇子（以下、古人）は、その大兄の地位を自ら放棄した。そして、「天皇のために仏道修行をしたい」との言葉を残し、人々が見守るなか、蘇我氏ゆかりの法興寺（飛鳥寺）で髯髪（ひげとかみ）をそり、袈裟衣（けさい）をつけ、吉野へ向かったという。

古人が留まった先は「吉野山」と伝えられ、ために彼は「吉野太子」と呼ばれたが、数ヵ月後、彼はその地で激動の生涯を終えた。享年 30 歳前後とされる。

その 26 年後（671 年 10 月）、古人と同じように皇位を捨てて、吉野へと向かった皇子・大海人も出家の身であった。

この「皇位の辞退→出家→吉野」の一致は、偶然なのか。僧形の皇子たちが目指した「吉野」には、何があったのか。

１．原吉野（げんよしの）の風景

ｉ．吉野の地勢的背景

吉野地域は、かつて紀の川（吉野川）を基幹水路（運河）とし、太平洋につながる河川交通にめぐまれた土地だった。その河川に対する意識の深さは、古墳時代にさかのぼってもうかがえる。たとえば、６・７世紀の古墳（横穴式石室墳）の大半が、吉野川を見下ろす高台に営まれていることや、そのなかに、紀の川下流域で特徴的にみられる「岩橋（いわせ）型石室」が存在することなど[1]。

対して陸上交通はどうなっていたか。とりわけ、記紀万葉の時代、飛鳥・藤原・平城といった宮都群から、貴顕（きけん）たちの吉野巡行がどのルート（峠）を通ってなされたのかは興味の尽きない問題である。

ここでは、吉野郡各地の古代遺跡、なかでも飛鳥・奈良時代の須恵器の分布状況から上記のルートを深めてみよう（**図 1**）。

ひとつは、大和川（曽我川）水系の巨勢（こせ）谷（現御所市）方面から車坂峠（くるまざかとうげ）をこえて、吉野川本流域へと出るルート（車坂古道と仮称）。現在は、国道 309 号線がこれをほぼ踏襲している。

巨勢谷は、水泥（みどろ）塚穴古墳・水泥南

図１　吉野への道（峠と関連遺跡）

古墳（御所市）といった６世紀後半～７世紀前半頃の巨石墳など、古墳群の集中地域である。この谷を通る道は古墳時代以来、人々の往還路として利用されていた。

巨勢谷から曽我川を遡上し、車坂峠へむかう途中の今木（いまき）谷にも、保久良（ほくら）古墳、正福寺（寺の下）古墳など、谷沿いに７世紀代の横穴式石室墳が点々と築かれている。

車坂峠を越えて大和川・吉野川水系の分水嶺にあたる丘陵上にあがると平畑（ひらはた）遺跡。吉野では最大規模となる弥生時代中・後期の高地性遺跡である。ここでは、６世紀末から７世紀はじめ頃の須恵器が採集されている。また、丘陵を南に下がった緩斜面（大淀町役場北方の定成（さだんｓり）遺跡）では、５世紀末頃の須恵器片がみつかっている。

そこからさらに東方へ向かって、八鳥川の渓谷を越えた河岸段丘のうえにひろがる土田（つった）遺跡でも、５世紀末頃と６世紀末頃の須恵器が採集されている。ここでは、７世紀前葉から中葉頃にかけて竪穴住居群が、続いて掘立柱建物群と「庭園（蛇行溝）」が造営され、８世紀後半に及ぶ[2]。さらに東方の越部川を挟んだ対岸の丘陵上には、６世紀後半～７世紀前葉頃の横穴式石室をもつ越部（こしべ）古墳（１・２号墳）が築かれている。

以上の古墳・遺跡をつなぐと、古代の都があった大和盆地から大和川（曽我川）をさかのぼり、今木谷を通過し分水嶺（車坂峠）を越え吉野にいたる、５世紀から８世紀代の往還道が浮かびあがってくる[3]。

ふたつめは、古代「下ツ道」をさらに南下し、高取町清水谷（しみずだに）から芦原峠付近をこえて吉野（土田遺跡周辺）へといたる、現在の国道 169 号線ルート（芦原道）。

しかしこの道は、江戸時代の地誌に吉野・大峯参詣のルートとして登場するが、残念ながら現状では、周辺で古代に遡る遺跡はみつかっていない。

みっつめは、高取町の古刹・南法華寺（壺坂寺）を経て、安佐（あさ）谷（大淀町田口地区）へと出、越部古墳周辺を通って土田遺跡方面、もしくは龍門方面へと向かうルート（壺坂古道と仮称）。この道は、飛鳥方面から吉野へむかうショートカットコースとしても最適である。途中経過する田口地区では、興福寺系荘園（吉野郡田口庄）の延久（えんきゅう）２年（1070）の記録、廃寺となった安佐谷の寺院群の平安時代にさかのぼる仏像群、現地で採集されている平安・鎌倉時代の土器・須恵器などから、平安時代以降の当古道の利用は確実である。ただし、それ以前の飛鳥・奈良時代に遡る手がかりは、まだ得られていない[4]。

よっつめは、宇陀方面から、宇陀川と吉野川（津風呂川）水系の分水嶺・関戸（せきと）峠を越え、龍門岳の南麓地域をへて吉野川本流域へ出るか、もしくは千股（ちまた）・

増（まし）地区を経て土田遺跡方面へと向かうルート（龍門古道と仮称）。

関戸峠付近には数多くの古墳、飛鳥時代の遺跡がある。龍門地域でも、奈良時代（８世紀代）にさかのぼる須恵器が各地で採集されており、宇陀と吉野をつなぐ主要路として古墳時代以降、長期にわたり利用されていた。吉野・宇陀を舞台とする記紀の神武東征伝承も、まちがいなくこの道をイメージして描かれている[5]。ただし、宮都のあった大和盆地を基点にすると、宇陀の高地を経由しなければならないというデメリットがある。

なお従来は、これ以外の峠道（芋ヶ峠など）を古代に利用した可能性も指摘されてきた。しかし、それらのほとんどは芦原道同様、江戸時代になってから利用が頻繁になった峠道であり、遺跡のうえで古代にさかのぼる痕跡は確認できていない。

さて、上記のルートのうち、もっともゆるやかで歩きやすいのは、大和盆地（国中）から巨勢谷（御所市）を経て、標高約 200 mの峠をこえて吉野（大淀町）へと入る、車坂古道である。上述のとおり、これが７世紀代に遡る主要な吉野往還道であったことは動かない[6]。

なかでも、広大な台地上で、弥生時代から安定した集落を営んでいる土田遺跡は、吉野川に近接し、車坂古道を利用する大和盆地・吉野往還の中継地として交通の要衝にあり、いわば古代の「道の駅」としての機能が想定される。７世紀後半から８ 世紀前半代に、庭園を含む何らかの公的機関が置かれたとみてよい（**図２**）。

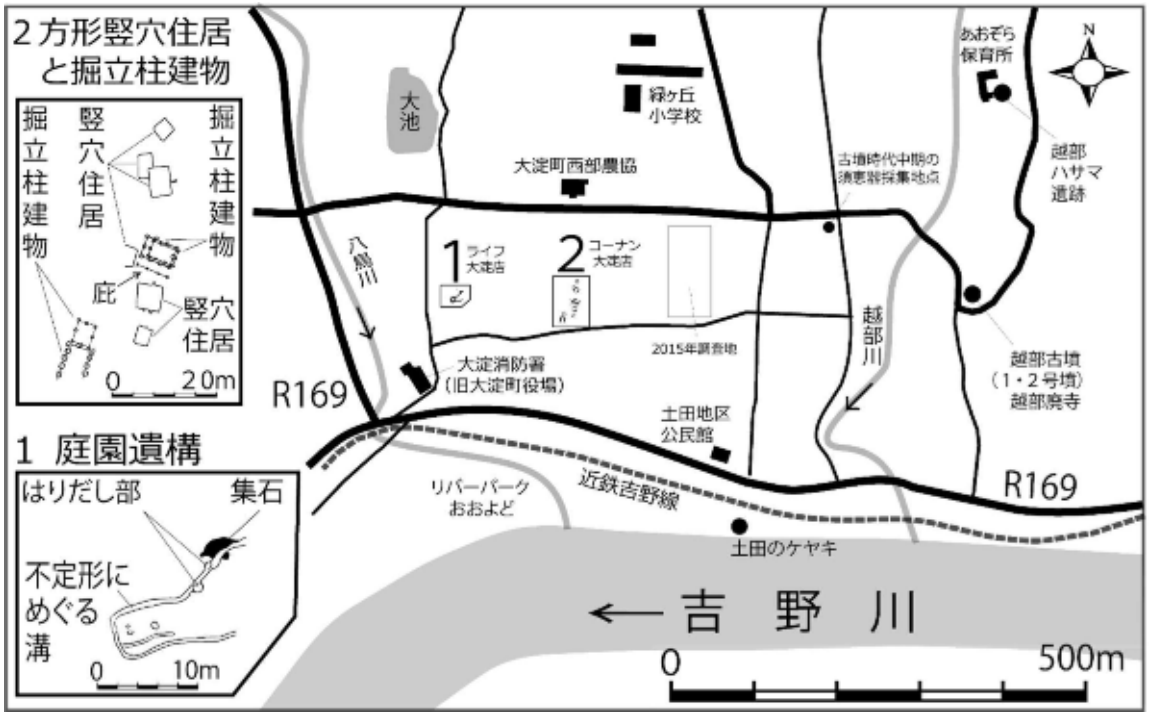


図２　土田遺跡の周辺

ⅱ．吉野の郡家（ぐうけ）と「監（げん）」

土田遺跡を考える際、ここが古代の吉野郡役所、すなわち「吉野の郡家（郡衙）」（以下、郡家で統一）ではなかったか、という指摘は従来からある。吉野には、奈良時代前半期の一時期、和泉国ともに王家直轄地の統括機関である「監」が置かれたことも知られている。

『続日本紀』※の吉野（芳野）をみると、史料上の「郡」の初出は大宝２年（702）。郡役人（大・小領、主政、主帳）の初出は和銅４年（711）。「監」の初出は天平３年（731）。一方「和泉監」は、霊亀２年（716）に設置、天平 12 年（740）に河内国に併合されるので、「芳野監」もほぼ同じ頃に設置・廃止されたとみてよい。当然、８世紀初頭頃の「吉野郡家」は、監設置以前から存在していたことになる。

土田遺跡では、おおむね７世紀後葉頃、おそらく後述する壬申の乱（672 年）以降、矩型（くけい）に配された掘立柱建物群が形成されているので、これらを郡家の中心施設と考えることができる。

その場合は、「吉野郡家（芳野監）」≒土田遺跡と考えるなら、「監」になって建物群が新たに整備されたのではなく、すでに機能している建物群をそのまま「監」として位置づけたにすぎないことになろう。

さらに、その前身としての竪穴住居群が群在する集落遺跡との関係もみのがせない。この前身集落のあり方から、吉野の支配拠点という王権の受け皿を準備した「地元勢力」の存在がほのみえる。

それは、古代の吉野で王権と深くつながり、大きな権力を発揮しえた氏族、吉野首（よしののおびと）らであろう[7]。彼らは「郡家」の実質的な管理者（郡司クラスの氏族）で、吉野の離宮（後述）を支えた立役者だった。彼らの支援を得つつ、土田遺跡は７世紀後葉を境に、王権による吉野の支配拠点（郡家）として再整備され、８世紀になって「芳野監」が設置されるにいたった、と考えておきたい[8]。

当時の郡家の選地理由に、上述の「地域交通の要衝」「地元の支援・管理体制」といった観点が不可欠と考えれば、吉野でそれらの条件を満たす場所として、土田遺跡のあり方はあらためて注目に値する。

８世紀後半頃、土田遺跡の「群家（監）」的な掘立柱建物群や庭園が廃絶した理由は定かでないが、740年ごろを境とする、吉野の社会体制の大きな変革が原因とみてよい。おそらくそれは、離宮を統括する「芳野監」の廃止、郡家の移転などが推測される。それは、飛鳥時代以来の「吉野」の終焉を示す出来事ともいえる[9]。

ⅲ．王権と原吉野

ここであらためて、吉野郡家（監）が置かれた「吉野」の原像を考えてみよう。

『古事記』『日本書紀』に描かれた「よき野（えし野）」は、吉野川北岸の河岸段

丘、大淀町比曽から中増にかけて発達した吉野でも数少ない原野である。かつそれは、山川の幸に恵まれた古代王権の「狩り場（御厨（みくりや））」でもあった。

足利健亮は、大淀町東部の比曽寺跡を中心とした吉野川本流域北岸の地域を「原吉野（Proto-Yoshino）」と命名した（10）。ただし、その王権の狩り場というイメージは、７世紀代に形成されたもので、その実態は王権や吉野郡家の官人たちの管理圏内であった、と考えられる。

その範囲は、現在の大淀町域を含む東西 12 ㎞、南北５㎞のなかにおさまる。そしてその圏内に、原吉野の管理施設（郡家・監）が置かれたと想定される。

逆にその圏外、①車坂峠以西の大淀町西半部から阿太・巨勢（五條・御所市域）に至る地域、②現吉野山を含む吉野川の南岸以南の地域、③龍門岳の南麓部から宇陀に至る地域、④吉野川上流域の国栖以東の地域は、王権や吉野郡の官人たちにとって維持・管理の対象外であったとみられる。つまり、①は北部が大和川（曽我川）水系で高市郡に、南部は阿太郷※で宇智郡に、③はその大半が宇陀郡に属していた可能性があり[11]、②④については、郡の領域としての認識があったかどうか定かでない。『古事記』『日本書紀』の伝承からは、阿太鵜飼、吉野国栖といった地元首長たちが、原吉野の圏外を領有していた形跡がほのみえる。

ところで、この「原吉野」には、平安時代以前にさかのぼる式内社「大名持（おおなもち）神社」がある。その祭神「オオアナムチ」が、三輪山（現奈良県桜井市）に鎮座した、古代王権の重要な守護神であったことは、多くの研究者が指摘している[12]。

私見では、斉明２年（656）、そのカンナビ（神宮・カミマツリの場）が、「国栖」の居住地に接する「原吉野」の東端部、吉野川上流部（宮滝遺跡）に設けられ、以来「原吉野」が、カンナビを維持する「神郡」として、古代王権との強いかかわりをもっていたと想定している[13]。宮滝遺跡は、従来より「吉（芳）野宮」の比定地として著名であるが、それ以上に王権の神祇政策とのかかわりが深い遺跡である。

また、この「原吉野」で平安時代以前にさかのぼる確実な古代寺院は、「吉野寺（比曽寺跡）」以外に存在しない。飛鳥時代以降、奈良時代にかけて、吉野寺は「吉野の官寺」としての寺格を有し維持・管理されていた（後述）。

以上みてきたように、「原吉野」とは、①野：古代王権が領有する「狩り場」と豊かな「御厨（みくりや）」を中心とする経済基盤、②道：紀ノ川・吉野川の河川交通を軸とする大動脈と峠を越える陸上交通、③人：支援者である地元首長たちの人脈、④施設：郡家と王権のカンナビ・官寺の配置）によって支えられた、７世紀を中心とする王権の所領として理解される。

２．吉野太子と吉野寺

ｉ．吉野太子の皇子宮

７世紀の中ごろ、地元の大首長でもあった吉野首らの支援をうけて、吉野の地に、古代王権の離宮（吉野宮）が整備された。史料上確実な「吉野宮」の初出は、斉明紀２年条（656）である。

しかし、実態として、吉野の地に古代王権の拠点が設けられたのは、それをさかのぼる大化元年（645）以前、〈吉野太子〉とも呼ばれた古人の「皇子宮（みこのみや）」の造営にはじまると、私は考えている。具体的に述べてゆこう。

皇子宮といえば、推古紀 13 年（601）10 月条に初出する、厩戸（うまやと）皇子（聖徳太子）・山背大兄皇子の斑鳩宮（いかるがのみや）（若草伽藍東方の建物群）が想起される（14）。「太子」「大兄」と呼ばれた皇子たちには、有力な皇位継承者として、それにみあうだけの複数の所領と、所領を管理する組織としての皇子宮が与えられた（もしくは厩戸皇子のように、自らの発案で造営する場合もあった）。

古人の皇子宮にかかわる記録としては、乙巳の変後に古人がこもったと記す「私宮（きさいのみや）」（皇極紀４年６月条）がある。これは名の伝わらない妃（きさき）の宮とみるのが穏当である。

また「古人」の「フル」が奈良県天理市の布留（ふる）を指すとの指摘や、「古人大市皇子」の別名（孝徳即位前紀）が示す「オオチ」も手がかりとなる。

前者の是非は判断材料に乏しいが、後者の場合、『和名類聚抄』※（10 世紀前半頃成立）にいう「志紀郡邑智（おおち）郷（大阪府）」や奈良盆地西南部の「城上郡大市郷（奈良県）」と、そこを本拠とした大市首（連・造）らとのゆかりが想定される。ただ、その所在についてはまだ確証を得られていない（15）。

古人の「皇子宮」は、上述のとおりいくつかの想定が可能である。しかし、「吉野太子」の尊称が示すように、彼が「太子」として７世紀半ば頃に「吉野」を領有していたことは間違いない。吉野にも、有力な舎人たちのいる、彼の軍事・政治・経済基盤としての皇子宮が存在したとみたい。

では、その候補地は、というと、７世紀代にさかのぼる資料（瓦・須恵器など）が確認できるという点から、吉野町の宮滝遺跡、大淀町の土田遺跡群と比曽寺跡周辺の３箇所に、ほぼしぼられてくる。

宮滝遺跡は、飛鳥時代の斉明朝以降、奈良時代の聖武朝にいたるまで営まれた、吉野でも屈指の古代遺跡である。それを「離宮」とする根拠は、８世紀（奈良時代）前半期にさかのぼる、石敷きをともなう掘立柱建物や、宮都（平城京）系の瓦類の発見である。もちろん、７世紀代の「宮」にかかわる施設なども発見されているが、それらは祭儀的な要素の強い「苑池（えんち）」

を中心とした空間であり、軍事的・経済的な拠点とはいいがたい様相である。

土田遺跡は、７世紀の前葉頃（須恵器の型式でいう高蔵寺 217 号窯式の段階）から、竪穴住居を中心とした集落形成が進み、７世紀後半以降、少量の瓦をもちいた掘立柱建物群と蛇行溝（苑池）がひろがる「郡家」的景観に変容する[16]。この景観は、８世紀にもうけつがれ（ただし遺物は少量）、８世紀後半代には廃絶した。

古人が上記の２ヶ所の地に滞在した可能性は十分ある。しかし、『紀』の記述に基づけば、僧となり「寺」に入るという行動から注目されるのは、当時吉野地域で唯一の仏殿をそなえた、欽明紀 14 年条に初出する「吉野寺」（すなわち比曽寺跡）である。

ⅱ．吉野寺（比曽寺跡）とその周辺

比曽寺跡で採集された単弁の八葉蓮華文軒丸瓦（**写真１**）は、文様構成からみると、桜井市・吉備池廃寺[17]の創建瓦より

写真１　比曽寺跡でみつかった最古期の軒丸瓦

新しく、桜井市・山田寺跡[18]の山田寺式軒丸瓦よりも古式の特徴をもつ。上記はいずれも７世紀中ごろの年代観を与えることができる。

上述の古代寺院は、いずれも王権との強いつながりをもちつつ、蘇我氏の息がかかった東漢（やまとのあや）氏（その一族、書直氏）などの、大陸系工人たちが深く関与しているとみられる[19]。同様に比曽寺も、瓦のデザインからみて蘇我氏系（東漢氏系）の工人がかかわった可能性もある。

あえて比曽寺跡の瓦の制作年代をしぼるなら、640 年代半ば頃に位置づけることは可能であろう。これは境内でみつかった瓦の中では最古期に該当する。

また、この比曽寺所用瓦の生産と関連して注目されるのは、比曽寺東南方の河岸段丘上に位置するトノカイト遺跡[20]である。現在のところ発掘調査はおこなわれておらず、採集品での判断となるが、７世紀中ごろから８世紀前半代まで連面と遺跡が形成されたようである。

また、同時期の土器・須恵器に加えて、吉野郡内では極めて稀な古代の文房具（円面硯）なども採集されており、比曽寺経営にかかわる人々との強い関連性が指摘されている[21]。

またこの遺跡では、遠方（五條市内）から運ばれた瓦とともに、付近で焼かれたとみられる炉片を含む瓦のほか、ガラス製品の材料になる石英塊、青銅製品など

を溶かした金属滓もみつかっている。

そのためこの遺跡は、飛鳥寺の東南方に隣接する飛鳥池遺跡のような、寺院にかかわる瓦や金工製品などの生産工房とその集散地、もしくは、寺院と工房等を一体的に管理する恒久的な公的施設（後の造寺司に類するもの）と想定されている。よって、吉野寺の造営とともに、その維持・管理を目的として、東漢氏をはじめとする多くの工人・知識者集団が、蘇我氏にゆかりのある飛鳥地域より派遣され、集住していたと考えてよいだろう。

いわばこの地は、7 世紀代の南山・吉野の地で、飛鳥周辺のような景観を有する拠点集落「邑（ゆう・まち）」だったといえる。

このようにみてくると、東西北を山川に囲まれ、南に大峯連山を見遥かす風水の立地に適った「吉野の邑」が、当時「吉野山」とも称されたこと、蘇我大臣家の勢力を母体とした古人の皇子宮となっていたこと、また、東漢氏を主体とする渡来系知識人（工人）たちの集住地であったことは、大いに考える余地があろう。

さらに想像をたくましくすれば、古人はおそらく成人を迎えた 20 才前後の 630 年代から、「吉野山」を領有し、有力な蘇我氏系氏族を後ろ盾として地元勢力をとりこみつつ、「原吉野」の開拓事業をすすめていたのではないだろうか。

古人が「吉野山」に設けた〈皇子宮〉は、まさにその拠点にとして、７世紀中ごろには機能していた。その思惑には、太平洋へとつながる大河と、そのヒンターランドとしての紀伊山地を見据えて、「吉野山」をコンパスの軸とし「原吉野」をその範囲内とする、「まぼろしの吉野京」構想があったのかもしれない。

上記の検討から、ここでは、トノカイト遺跡を含む「吉野寺（比曽寺）」周辺を、古人が向かった「吉野山」、古人の「皇子宮」とする可能性を提唱したい。以下ではこれを、仮称で「古・吉野宮」と呼ぶことにする。

さらに加えて、初期仏教受容期のシンボルでもあった、茅渟（ちぬ）の海に浮かんで流れてきた樟（くすのき）の霊木でつくった放光仏は、伝承によると、ある理由から「吉野」に移されていたことがわかる。

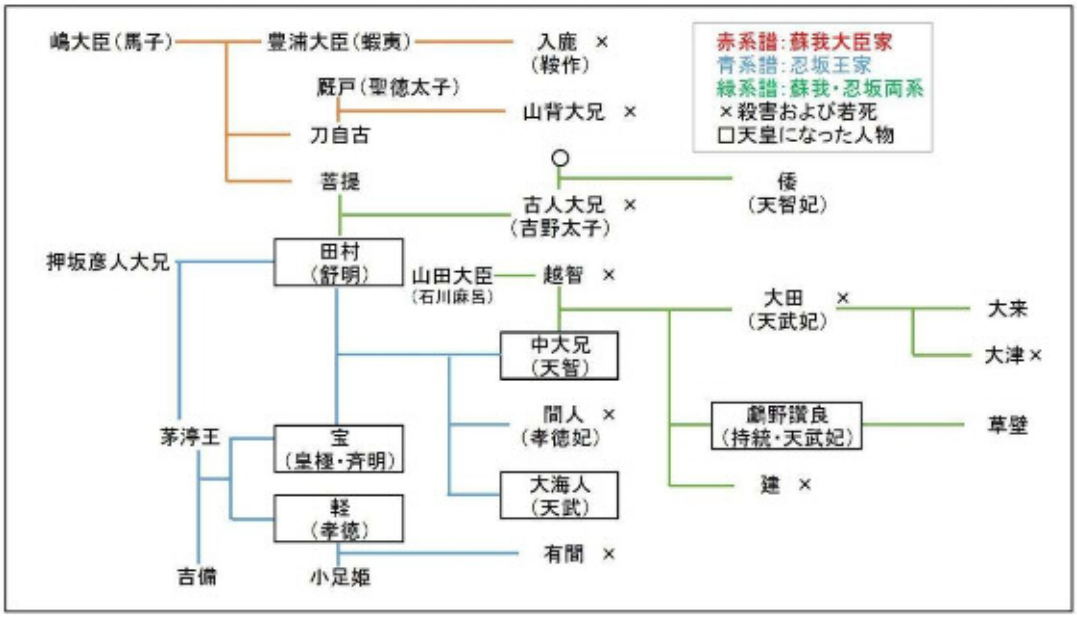
伝承に粉飾があったとしても、奈良時代以前から吉野寺が「放光仏をまつる寺」として伝えられていたのも史実であろう。

それでは、古人は、乙巳の変後、仏道修行をおこなう場として、どうして自らの皇子宮のひとつである〈古・吉野宮〉の地を選んだのだろうか。

3．吉野を継ぐもの

ｉ．乙巳の変とその後

前章では、７世紀の中ばごろ、大淀町上比曽の地に比定される「吉野山」が、蘇我氏の息がかかった王位継承者・古人の「皇



▲図３　　関係系図

子宮（古・吉野宮）」であった可能性を論じてきた。

上述のとおり、古人とその支持者（田口臣氏ら）を首謀とした蘇我政権を再起させる密談は、比曽寺周辺でなされたとみたいが、古人が〈古・吉野宮〉に入り、吉野寺で仏に祈りを捧げたのは、深い信仰心に拠ったものとは思われない。

表向きは仏道修行のためであっても、その内実は、滅ぼされた蘇我大臣家の背後にいた渡来系の氏族集団を味方に引き入れ、新政権に対抗する〈ポスト蘇我政権〉を決起させる政治的意図があってのことだったとみられる。

ただし、この「カウンター・クーデター」は内部告発により瓦解し、乙巳の変から３ヵ月後の９月（もしくは 11 月）に、古人とその一族は新政権によって滅ぼされたと伝える。ただし、中大兄（天智）の妃であった古人の娘・倭姫王（やまとひめのおおきみ）が、後にその大后となっている。その意図はともかく、子には恵まれなかった。ことほどさように、歴史の糸は複雑である。

乙巳の変で蘇我大臣家が滅ぼされ、続いてそれに深縁をもつ古人も誅殺された後、〈古・吉野宮〉や吉野寺、広大な「原吉野」の所有権は、誰の手に渡ったのか。

おそらくそれらの財産は、新政権下に接収されたとみてよい。

具体的には、周辺に移住していた東漢氏など傘下の渡来系氏族たちの活動拠点として、吉野首ら地元首長の管理のもと、新たなパトロン、すなわち蘇我本宗家となった蘇我倉山田（そがのくらやまだ）氏（石川麻呂）により維持されていたと考えられる。

ところが、石川麻呂とその一族も、大化

５年（649）の３月、新政権の策略により誅滅される（石川麻呂の変）。〈古・吉野宮〉が蘇我本宗家に伝えられる所領であるとみれば、その血統をたどると、石川麻呂の娘であり中大兄皇子の配偶者（嬪）として残された、越智（おち）とその子ら（大田（おおた）・鸕野讃良（うののさらら）・建（たける））に継承されたとみるのが自然である。

ところが越智は、石川麻呂の変の直後、（大化５年もしくはその翌年）、建を生んだ直後に亡くなったとみられ、建も斉明３年（657）の末頃（もしくは斉明４年の春）、８歳で夭折（斉明４年５月、殯（もがり）が「今城（いまき）」の地におこされたと伝える）。また大田も、天智３年（664）６月頃、幼い大伯・大津をのこして20才前後で早世する。越智・大田・建と〈古・吉野宮〉との関係はほとんど接点がない。

最終的に、天智政権のもとで〈古・吉野宮〉を財産として継承できる立場にあったのは、石川麻呂の孫にあたる鸕野讃良（のちの持統天皇）であった[22]。これが、後述の〈壬申の乱〉につながる布石となってゆく。

ⅱ．壬申の乱と吉野

大海人皇子（のちの天武天皇）がはじめて吉野入りを決意したのは、天智天皇10年（671）10月17日のことである。「臣は今日出家して、陛下のために功徳を修めんと欲す」と天皇の許しを得、「即日出家法服」の身となり、近江京より「吉野に至り之に居す」（天智紀10年10月20日条）と記す。

19日の夕方、同記事によると大海人が飛鳥の「嶋宮（しまのみや）に御す」とある。したがって、大海人一行が嶋宮を発ったのは、翌20日の早朝とみてよい。

嶋宮は、嶋大臣（馬子・推古34年・626没）の邸宅から始まり、吉備嶋皇祖母命（斉明の母・吉備姫王（きびのひめのおおきみ）・大化２年・646没）→嶋皇祖母命（糠手姫皇女（あらてひめのひめみこ）・天智３年・664没）→天智と継承されてきた離宮である。定説では天智の死去にともない大海人皇子の「皇子宮」になったとみなされている。『紀』は明確に記さないが、ここには鸕野讃良とその幼い息子（草壁）、数名の女嬬と舎人らが住んでいたと推測される。これに合流することが目的だったのだろう。

ところで気になるのは、先の天智紀10年条の記述、「出家」である。出家といえば仏門に入る（法身になる）ことであり、「吉野に至り之に居す」とは古人同様、「吉野寺」に入ったことを意味する。

天武即位前紀には「入吉野宮」と記すが、私はこの既述の〈違い〉にこだわっている。天武即位前紀は、勝者の論理で伝えられたものであり、天智紀10年条の記述が、より具体的な事実関係を示しているとみたい。いわば、「出家」という言葉は、史実として隠蔽できなかったのである。

7 世紀最大の国内戦、壬申の乱のはじまりをめぐる論争では、多くの研究者が古代吉野の〈聖地性〉とその意義に注目している。その中で、壬申の乱が「吉野」からはじまったと、多くの人々が考えていることも、大きな目で見ればあやまりではない。しかし、史料を仔細に見ると、そのスタート地点は明記されておらず、簡単には片付けられない問題である。

大海人はなぜ、わざわざ一族と舎人らを引き連れて、僧形で〈吉野〉へ入ったと伝えられたのか。

この場合も、仏門に入るということは、信仰心からではなく、古人の場合と同じカモフラージュに過ぎない。吉野へ入ることに意味があったとすれば、きわめて政治・経済的な背景が想定される。

そのひとつは、大海人の妃であり最大の支援者である鸕野讃良の経済基盤が飛鳥・吉野にあり、それが、祖父である石川麻呂から継承した蘇我本宗家由来の財産（既述した山田寺も含めて）であった可能性である。

古人に由来する〈古・吉野宮〉も鸕野讃良の「私宮」のひとつであり、祖母である斉明女帝の造営した「吉野宮」も、斉明の死去後、鸕野讃良に継承されていたと考えてよいならば、その後の鸕野讃良（持統）と吉野の歴史的関係も理解しやすくなる。

すなわち、飛鳥から吉野一帯の旧蘇我本宗家由来の財産が、近江に遷都した天智政権下の有力な皇女であった鸕野讃良の経済基盤として継承され、大海人もそれを頼りに、近江を抜けだしたということになる。

大海人がまったく縁のない辺境の地・吉野へ逃げ込んできたという、従来描かれていた壬申の乱のイメージでは、その本質的な理解は得られない。妃と子どもたちを連れての吉野入りは、古人の行動に同じく、すでにこの時点で「新政権」の発足が意図されていたと考えざるを得ない[23]。鸕野讃良はその場合、近江から来る大海人とは別行動をとって飛鳥で合流し、吉野に入ったことになる。鸕野讃良は、大海人の行動を予見し、既にその受け入れ体制を整えていたのであり、大海人は安心して鸕野讃良の〈ふところ〉に飛び込んだのである。

これに関して、大海人一行の東国への遠征が始まった時点でつき従っていた舎人 20 数名のなかに、書直（後に文忌寸ふみのいみき）智徳がいることは見逃せない。舎人であり渡来系の文人であったとみられるが、彼は当初から〈古・吉野宮〉（さらにいえばトノカイト遺跡周辺）に起居していたとみられる。彼は「吉野寺」の造営氏族と目される東漢氏集団の長であったと考えられるからである[24]。

彼も、法身の大海人に就いて仏道修行をおこなった舎人のひとりであるが、鸕野讃良の舎人だった可能性も考えられる。

ⅲ．吉野というレガシー（遺産）

さて、話を壬申の乱前夜に戻そう。12月には天智天皇が 46 歳で没し、翌年（672）の6月 22 日、天下分け目の決戦となる壬申の乱が始まる。現在、そのスタート地点を、宮滝遺跡、すなわち「斉明朝に造られた吉野宮」と通説的に理解されていることは既述した。これについて私見はすこし異なっている。

先述したように宮滝遺跡については656 年、斉明女帝が、王権の守護神・オオアナムチを三輪山より勧請し、そのまつり場（カンナビ）として整備した遺跡とみている[25]。そして、661 年に斉明女帝が死去したのちは、その後継者として、鸕野讃良が吉野のオオアナムチのカンナビの奉斎権を継承し、壬申の乱以降、持統の死去まで続いたとみたい。

「吉野宮」は、神まつりの場・神に誓う場（カンナビ）であり、王権にとっては伊勢・出雲とならぶ「レガシー（遺産）」のひとつであった。吉野のオオアナムチはその後、「南山の九頭龍」とも呼ばれ、聖武天皇自らによって奉祭されている[26]。

この「吉野宮」のカンナビは、９世紀のある段階まで、随時王権が管理していたとみられるが、やがて、８世紀前半の一定期間、その西方の隣接地に「芳野宮（芳野離宮）」が整備されるようになった、とみておきたい[27]。

この８世紀代の「離宮」にまつわる衣食住や二エなどを貢納する「御厨（みくりや）」を管理し、吉野郡全域（当時は原・吉野の範囲）の動向を監視しながら、律令政府との連絡網を確保するための国家機関が「吉野監」であった（それを土田遺跡にあてる私見については既述した）。

その意味では、宮滝遺跡の「吉野宮」も、天武・持統と強いかかわりをもつ遺跡であるが、壬申の乱との兼ね合いについては、史料からもよくわからない。

もうひとつ気になる点は、大海人が「僧形の皇子」として吉野に入る必要性、である。『日本書紀』に手がかりはない。

これに関して、推古紀に「豊浦宮」として初出する蘇我氏系の古代寺院、「豊浦の堂（向原寺）」に安置されていた「光を放つ阿弥陀の像」を、その後「吉野の竊（ひそ）（比蘇）寺」に移したとする、紀伊・大伴氏の一族、大部屋栖野古（おおとものやすのこ）にまつわる伝承に注目したい（「三宝を信敬し現報を得る縁 第５」『日本霊異記』※上巻）。

９ 世紀に流布していた説話であるが、吉野寺（比蘇寺）は、『日本霊異記』の編纂された平安時代でも、仏教を擁護した蘇我氏の「法灯」を継ぐ拠点寺院として吉野の山中に移されたもの、と認識されていたことになる[28]。

吉野寺本尊の放光仏が、実際に豊浦寺から移設されたのであれば、仏像だけでなくそれ以外の経典類も、同時に吉野へ将来された可能性は十分にある。

そこで、その招来された時期が問題となるが、伝承がいう敏達天皇の時期（６世紀後半）は、後世の付会であろう。

現時点で比曽寺跡の最古期の瓦が乙巳の変前後に位置づけられ、古人の吉野入り以前にはさかのぼりえないことを勘案すると、招来の時期は、645 年６月の古人の吉野入りのタイミングをおいてほかにない。

つまり、「豊浦堂の放光阿弥陀像伝承」は、645 年の乙巳の変後、蘇我大臣家（蝦夷・入鹿）が管理していた〈豊浦寺の放光仏〉を含む諸々の仏像・経典類が、古人の吉野寺入りとあわせて、「吉野寺」創建の道具として吉野に請来されたことを伝えているのではないか、と解釈したい。

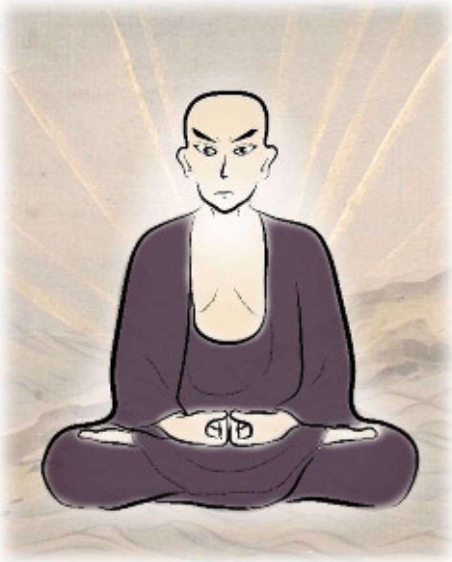
また、その際、飛鳥近辺から蘇我氏にゆかりのあった多くの渡来系知識人と工人たちを招き、彼らの私持していた仏具・経典類もあわせて「吉野寺」に施入されたと考えたい。

吉野寺の記述が『日本書紀』に少ないこと、王権とのかかわりが不明瞭にされている点などは、『日本書紀』の編集者による巧妙な添削の結果とみてよい。あるいは、それは王権にとって消したい記憶だったのかもしれない。『日本霊異記』はその空白をうめる貴重な伝承を伝えており、今後も詳細に読み解く必要があろう。

以上のように、古人の皇子宮（古・吉野宮）は、僧形となった古人の出家を機に、「吉野寺」として整備されはじめたのではと、私は考えている。「宮」がその後「寺」に転換してゆく事例は、斑鳩地域の斑鳩宮と法隆寺の東院伽藍・中宮と中宮寺・岡本宮と法起寺、飛鳥地域の川原宮と川原寺、平城京の新田部親王（にいたべのしんのう）宮と唐招提寺など、枚挙に暇はない。

つまり「吉野山（寺）」は、滅亡した蘇我大臣家ゆかりの「放光仏」をまつる仏殿を含んでいたがゆえに、蘇我の血をひく法王・古人、そして、同族の石川麻呂家とその血統を継承する鸕野讃良（その夫君である大海人）の「遺産」として領有されることに意味があった。

その飛鳥・豊浦と吉野・比曽を結ぶ放光仏伝承は、歴史の裏側で永きにわたり存在したとみておきたい。これは『日本書紀』にほとんど記されることのなかった「吉野外伝」でもある。



▲図４　僧形の皇子

おわりに

「吉野宮」という３文字の奥深くに秘められた歴史を解明しうる手がかりは、近年にいたるまで多くの蓄積があり、われわれがどのようにそれを整理し、読み解いてゆくのかが問われている。あわせて、それらを統合した吉野の古代史の見直しが、今まさに迫られているといえる。

今回は、史料にみられる「吉野」「吉野宮」の実態解明を目指した。「吉野」という世界がかたちをなしてくるプロセスを追いかけつつ、吉野最古の寺院「吉野寺」（比曽寺跡）、離宮を管轄する機関として設けられた「吉野郡家・監」（土田遺跡）がどのように成立し展開したのか、という点に争点をしぼってみた。なお、詳述したように、飛鳥時代の宮滝遺跡については、王宮・離宮としての性格以上に、苑池を中心とした王家のプライベートな「カミまつりのカンナビ」として機能する場（神宮）としての意義をもっていた、と私は考えている。

そこからみえてくる「原吉野」の姿は、「仙境の地」として物語られてきた通説とは異なるイメージを我々に投げかける。そして、その背景には「蘇我」に代表される反権力の影がほのみえることも、縷々述べてきたとおりである。

政権を追われた大海人が、舎人とともに、蘇我氏の法灯を受け継ぐ「吉野寺」や、王権のカンナビ（宮滝遺跡）を求めてたどり着いたのは、きわめて政治的な理由があってのことである。本考では、大海人を吉野に招来できる条件を備えた人物を、蘇我氏の血統をひく有力皇女であり大海人の妃でもあった鸕野讃良と考えたが、いかがだろうか。

『日本書紀』が冷淡に記す、即位した持統女帝の執拗なまでの吉野宮行幸は、上記のような持統女帝と吉野のただならない事情を物語っているようにも思える。

しかし、以上の論争をもってしても、記紀に描かれた飛鳥時代の「吉野」の実態はなお霧中にある。論争の行方は、未来に託すのが穏当だろう。

今できることは、論争の原点となるゆかりの地と関連資料が未来に適切に残され、いつでも立ち戻ることができるよう、地域の人々とその保存・継承に努めることだと考えている。とりくまねばならない課題はまだまだ多い。

最後に、この小論執筆の機会を与えていただいた人生の先輩たち、日々の仕事を支えてくれている家族、職場のみんなに感謝し、擱筆する。

【註】

（１）和歌山市・岩橋千塚古墳群で特徴的な横穴式石室。奈良県内３基のうち２基が吉野川流域にある。松田度ほか「吉野の横穴式石室墳―その変遷と終焉―」『由良大和古代文化研究協会 研究紀要』第 18 集 2013 年。

（２）奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報』1992 年度（第二分冊）1993 年（第 1 次調査）。同概報・2002 年度（第二分冊）2003 年（第２次調査）。当然、宮都から吉野へ訪れた貴顕たちを迎える宿泊施設もあったと想定される。調査でみつかっている遺構・遺物のなかに、その手がかりが含まれているかもしれない。今後の検討課題である。

（３）成瀬匡章ほか「吉野郡内の古代寺院―比曽寺を中心として―」『由良大和古代文化研究協会　研究紀要』第19集 2015年。

（４）山本昭緒「宇多上皇の宮滝行―『扶桑略記』より―」『吉野一隅―その自然と歴史と人間―』2015 年。

（５）壬申の乱（672 年）についても同様。

（６）飛鳥寺から土田遺跡までは、車坂峠越えで約 19 ㎞（藤原宮からは約 20 ㎞）、徒歩４～５時間の距離。土田遺跡から宮滝遺跡までは、吉野川沿いの最短距離で約 10km（徒歩２時間程度）離れており、途中、比曽寺に立ち寄ったとして、約 14km（徒歩３時間程度）の移動。馬（現代でいう車）なら、時速 60km として、それぞれ 15～20 分程度の距離。一日の平均的な徒歩での移動距離は、経験的に 30km 前後までが限界とみられるので、飛鳥から宮滝までの行程（30～35km）で、十数人規模での行列がまとまって移動できる一日の距離は、おおむねその半分程度（15～17km 前後）とみられる。人文地理学者の足利健亮もほぼ同じ推定をしている。足利健亮「吉野という世界」『吉野―悠久の風景―』1990 年。

（７）和銅３年（710）正月に従五位下となった吉野連久治良、天平勝宝６年（754）に「擬少領」であった吉野（連）百鳥、そして嘉祥（かしょう）元年（848）に吉野連豊益が吉野郡の「大領」を務めている。

（８）吉野へ来るのに「車坂古道」を利用する場合、養老７年（723）・神亀元年（724）・同２年（725）・天平８年（736）の計４回行われた、元正・聖武天皇による平城京から「芳野宮」への行幸（往復総距離約 120 ㎞）が参考となる。先の２回は４泊５日の旅程で、①平城宮を出発し飛鳥で一泊（30 ㎞）、②翌日早朝飛鳥を出発し、土田遺跡で一泊（20 ㎞）、③翌日「芳野宮」、帰りに土田遺跡で一泊（20 ㎞）、④飛鳥で一泊（20 ㎞）、⑤翌日帰還（30 ㎞）との旅程が想定される。

（９）その後の吉野の郡家を考える手がかりは、昌泰元年（898）に宇多上皇が止泊した「吉野郡院」の候補地のひとつ、大淀町中増の下垣内遺跡である。飛鳥時代から天平期（７世紀後半～８世紀代）の土器・須恵器があり、奈良時代後半期（８世紀後半）

の遺物は明瞭ではないが、平安時代の灰釉（かいゆう）陶器片が採集されている。松田度・山本昭緒「奈良県吉野川流域の古代遺跡―吉野郡大淀町中増地区の踏査―」『青陵』No.122 橿原考古学研究所 2007 年。山本昭緒『わが村史―中増歴史研究ノート―』2014 年。

（10）足利健亮『考証・日本古代の空間』大明堂 1995 年。（本論の英訳は筆者）

（11）宇智郡阿太郷は、九州南部地域に由来をもつ阿多隼人の移配地とみなされている。また、飛鳥池遺跡出土の木簡に「吉野・龍門」とあるので、吉野と龍門は７世紀末頃には明確に区別されていたようである。

（12）前田晴人『三輪山―日本国創成神の原像』2006 年。松田度「王権のカンナビ―〈吉野宮〉の成立背景―」『橿原考古学研究所論集』第 16　2013 年。同「茅渟と三輪」『森浩一に学ぶ：森浩一先生追悼論集』同志社大学考古学シリーズ 11 2015 年。

（13）前掲註 12。松田 2013 年。

（14）推古紀９年条「初めて斑鳩に宮室を興す」と同 14 年条が「斑鳩寺」の初出。

（15）大市郷は、現在の奈良県桜井市北部から天理市にかけての範囲が想定されている。この大市氏は、古人の養育氏族である可能性も考えられよう。私宮＝大市宮とする仮説もあるが、考古学的に立証されているわけではない。奈良時代には天武の孫、長皇子の子で後に僧となる大市王（臣下して文屋大市（ふんやのおおち）、内命婦（うちのみょうぶ）の大市女王（続紀天平６年正月の叙位）がある。大市王は現大神神社（桜井市）境内にあった「大御輪寺」の創建にかかわったとみられる人物であり、磯城郡大市郷にゆかりがあるとみてよい（遠山美都男『大化改新』中公新書 1119　1993 年。荒木敏夫「古人大兄皇子論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 179 集 2013 年）。なお、これに関して、「丁巳（ひのとみ）」の年、「倭姫命」が、大市郷内に比定されている倭笠縫邑（やまとのかさぬいのゆう）から斎宮（磯宮・渡遇宮）へ、アマテラスを遷座させたとの伝承（垂仁紀 25・26 年条）がある。大市郷が古人の皇子宮であれば、この「丁巳年」を斉明元年（657）にあて、大市郷にゆかりの深い「倭姫命」は、古人の娘（倭姫王）がモデルとなっていると解釈できる。つまり、古人の私領であり、アマテラスをまつるカンナビがあった「オオチ宮」を後に倭姫王が継承した可能性があり、それがアマテラスの遷座伝承の背景になっているという理解である。仮説の域を出ないがメモしておく。

（16）前掲註２。

（17）639 年の舒明紀 11 年７月条に初出し、642 年の皇極紀元年条に再出する「百済大寺」かとみられている。

（18）641 年の舒明紀 13 年条に初出するが、649 年の大化５年までに金堂を中心とし

た伽藍の整備は完了していた。

（19）吉備池廃寺については舒明紀 11 年秋七月条に「書直縣（ふみのあたいのあがた）を大匠となす」の記述がある。山田寺は蘇我倉山田石川麻呂の氏寺として創建された。

（20）2016 年５月、新たに遺跡として登録された。前掲註１、松田 2013 年。

（21）前掲註３、成瀬 2015 年。

（22）比曽寺跡からは、７世紀後半に位置づけられる川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦、７世紀末ごろとみられる本薬師寺式の軒平瓦が出土している。これらはその大半がトノカイト遺跡付近で焼かれたものであり、持統朝における寺域整備の証左とみることができよう。７世紀後半代も、王権（もしくは鵜野個人）による維持・管理がなされていたことを示している。

（23）大海人が居した「吉野」の条件としては、引き連れた皇子、舎人、女官の多さや宿泊施設の有無、「宮・寺」と明記されていないことなどにも留意が必要だろう。

（24）宮坂敏和「史跡比蘇寺跡について」『吉野その歴史と伝承』名著出版 1990 年。福塚忠司「吉野寺と文忌寸」「神叡（吉野僧都）について」私家版 2007 年。

（25）註（15）の仮説に拠った場合、翌年の 657 年には、「倭姫（王）」を依り代として、三輪山のカンナビ（大市）から伊勢斎宮へのアマテラスの遷座がおこなわれたとみられる。続く 659 年には、出雲臣氏にオオアナムチの神宮（のちの杵築大社 きづきのおおやしろ）を修厳させている。この数年間で、オオアナムチ・アマテラスという三輪山由来の神々の重要な分祀政策がおこなわれていることになり、興味深い。

（26）前掲註１、松田 2013 年。

（27）前掲註１、松田 2013 年。

（28）『日本霊異記』日本古典文学大系 70　岩波書店　1967 年。

【参考文献】

大淀町教育委員会編『平成19～22年度大淀町文化財調査報告』2011年

大淀町教育委員会編『おおよどの地域文化財を学ぶ』2013年。

大淀町教育委員会編『平成17・18年度大淀町文化財調査報告』2008年

奥田尚・松田度『うちのの館所蔵の古瓦と館にみられる石材』2010 年。

直木孝次郎『壬申の乱 増補版』塙書房　1992年（初版1961年）

西郷信綱『壬申紀を読む－歴史と文化と言語－』平凡社　1993年

上田正昭編著『吉野―悠久の風景』講談社　1990年

前登志夫『新版 吉野紀行』角川書店　1984年

遠山美都男『天武天皇の企て　壬申の乱で解く日本書紀』角川書店　2014年

コラム：原吉野（げんよしの）の成り立ち

吉野の名称は「吉野・芳野・三芳野・見吉野・三吉野・美与之努」等が歴史・文学上で使用されています。吉野を舞台とする「吉野千本桜（よしつねせんぼんざくら）」は有名ですが、その通路の大淀は地図上の印の存在でしか在りません。

吉野川北岸に聳する大淀町は、吉野山が歴史に登場する前の吉野、原吉野です。役行者・修験道の吉野山は、高取・子嶋山寺を創建（七六〇年）した報恩が、優婆塞（うばそく）修行の場とした安禅寺宝塔が始まりです。青根ヶ峯と峯続きである宝塔ヶ峯の所です。聖宝（しょうぼう）が現光寺（比蘇寺（ひそでら））に仏像二体を奉納して、現蔵王堂を開基し中興の祖となります。八九五年頃です。

飛鳥・藤原・奈良朝時代、数里はなれた高取山地（五八四メートル）の南には、山並み深く縄文の神仙郷の道教色濃い世界が広がり、神武天皇の征路の記憶が伝えられた原体験が天皇氏一族には潜在意識としてあり、その追憶があるので、複活者が再生エネルギーを得る為、吉野に来ます。大海人皇子（おおあまのみこ）は成功しました。他の源義経・後醍醐天皇・天誅組は敗北します。古人大兄皇子（ふるひとのおおえのみこ）は吉野寺（よしのでら）で出家したかったと思います。原吉野（大淀）とはそのような所です。

吉野寺・比蘇寺は、『古事記』『日本書記』『日本霊異記（にほんりょういき）』『今昔物語』等、日本歴史のなかに出てきます。原風景です。神武・応神・雄略・聖武天皇が活動した場所でもあります。

比蘇寺は自然智宗（じねんちしゅう）（虚空蔵菩薩求聞持法（こくぞうぼさつぐもんじほう））のメッカです。奈良時代には大安寺の道璿（どうせん）、平安時代には最澄も空海も修業しています。幾多の僧侶が修行し、ここから平安仏教や鎌倉仏教が派生しています。日本仏教の濫觴（らんしょう）の地が此処です。

庭園のある土田（うった）遺跡は、吉野監（げん）の所在地ではないでしょうか。監は離宮の維持運営を目的とする役所です。吉野離宮が現在の大淀町にあるかどうか、探しています。それのみならず、土田の水取り神事があります。畝傍山の麓、畝火山口（うねびやまぐち）神社の神官・大谷播磨守（神功皇后に大臣として使えた武内宿祢の末裔）は、幕末まで十二人の武装した供を引きつれ、道中おごそかな行列で、高取藩領を通るときも「播磨さんのお通りや」と道をあけさせたといいます。早朝、吉野川・土田浦で修祓（しゅばつ）の後、「吉野川の水を汲んで神とするため」祝詞（のりと）をあげます。清浄水を汲んで神社にもちかえり神前にお供えします。

畝火山口神社では、摂州一宮・住吉大社から神官が武装した従者を引きつれ、畝傍山の土を採取して厳瓮を神前に供える神事があります。神武天皇の故事に倣う、埴使（はにつかい）神事です。「倭国の物実（ものざね）」（倭国の霊質）で住吉の神（海神）が祭祀権を有し、国の生命そのものを差配しているとの神事を現しています。

古代から神の世界でも、大淀の地は重要な聖地と認識されていたのです。

おおよど住まい人　蔵下　稔※

※一九三五年、高知県生まれ。大淀町在住四〇年。著書に『大淀・口吉野　文化・歴史アラカルト』。

比曽寺跡表採の軒丸瓦（大淀町教育委員会保管）

平成 28 年度大淀町地域遺産シンポジウム

「吉野宮の原像を探る」資料集

―2016 年 11 月５日（土）於 大淀町文化会館あらかしホール―

発行年月日　平成 28 年 11 月５日
編集・発行　奈良県大淀町教育委員会
〒638－0812　奈良県吉野郡大淀町桧垣本 2090 番地
ＴＥＬ：0747－54－2110　ＦＡＸ：0747－54－2112
印　　刷　岡本印刷所
〒639－3126　奈良県吉野郡大淀町新野３４２番地２
ＴＥＬ：0746－32－2166　ＦＡＸ：0746－32－2188

※本冊子は地方創生加速化交付金を活用し発行しました。